

乾山

江戸篇 — その遺産 —

リチャード・ウィルソン

小笠原 佐江子

はじめに

江戸の乾山

一、公寛法親王と乾山

二、入谷村と乾山

三、今戸焼と入谷村

四、乾山陶法の拡がり

陶法書

一、初代乾山系陶法書

二、乾山名のある陶法書

三、乾山名のない陶法書

四、専門陶工による陶法書

その他

附録『陶工必用』 大概

はじめに

ものとの別れ、人との別れ、生きるものには必ず別れがやってくる。ひたすら歩み、真を知る。何ら特別なことではないであらう。唯、当たり前に生きることではないか。

一仕事を為し終えたとする達成感、次代を養子猪八に任せたという安堵感、兄藤三郎、光琳も赴いており、新都「江戸」への興味と期待。乾山は都人の誇りを胸に上野山麓入谷村へと旅立った。江戸下向には動機があらう。推測ながら直接には上野寛永寺門主・輪王寺宮公寛法親王との邂逅、間接的には時代の波、吉宗による殖産事業の拡張と教育奨励、折からの光琳人気が高まりなどが背を押したと考える。禅に鍛えられた老陶匠の胸裡には小さな燈火が灯りつづけた。悔いなくその命を尽くすこと、入谷村は半農半陶、瓦・焙烙を焼く窯場であった。鳴滝山、聖護院の森との違いは如何であったか。

土を捏ね、形を造り、炎と闘う、何らそこに違いはなかつた。村に馴染み、新たな友と交わり、いきいきとやきもの造りに精を出した乾山の姿が浮かび上がる。

江戸の乾山

一、公寛法親王と乾山

一、なげ、世は卯月のかけの雲隠(嘆け世は卯月のかけの雲隠)

むかしを忍ぶやまほと、きす(昔を忍ぶ山ほととぎす)

あちきなし花橘の香は消て(あちきなき花橘の香は消て)

みきりの草そあめにしほる、(時節の草そ雨に萎る)

た、しはし休ふ旅の中やとり(ただ暫し休ふ旅の中宿り)

ふくと吹なりせきのあき風(ふくと吹くなりせきの朝風)

(蘭田秀延詠・六字名号連歌百韻初折)

二、袖の露はまたかかぬにうききはをミとセの春のけふにむかへて

うつとも夢ともわかすあたにのミきえなて露の身は残りけり(袖の露はまだ乾かぬに憂ききはを三年の春の今日に迎えて)

ほからかにひらくる花のうてなより瑠璃のひかりや空にみつらん(うつとも夢ともわかす徒にのみ消えなて露の身は残りけり)

うけつきし法のともし火かけたかくあきらけき世をなをや照らさん(ほからかに開くる花のうてなより瑠璃の光や空にみつらん)

いくちと七榮へんものか梅かほりたちはな匂ふ玉のみはしは(うけつきし法の灯火かけたかくあきらけき世をなを照らさん)

むさし野の草葉おしなミ野へふすもたへぬ御法の花の春風(幾千歳栄えんものか梅かほり梅匂ふ玉のみはしは)

(武藏野の草葉おしなみ野へふすもたへぬ御法の花の春風)

(尾形深省乾山詠・崇保院宮追善和歌懐紙一編)

一、連歌六句は、正徳六年(二七二六)四月一七日、上野寛永寺第五代門

主輪王寺宮(三世)公辨法親王(二六六九—一七二六)の薨去に際し(在位二

七年)、同家坊官従四位備前守蘭田秀延が、同宮を偲び、詠じた追善供養

の連歌百韻初折の六句である。折句として頭に六字名号「なむあみたふ」

をおき、法号大明院宮准三后(准后)公辨法親王の霊前へ限りのない悲し

みを捧げるが、宮を悼む秀延の想いは遺稿集『手むけ山』に留められた。

二、和歌六首は、元禄の陶工尾形深省乾山(二六六三—一七四三)が、公

辨法親王の名跡を継ぎ第六代門主となった公寛法親王(二六九七—一七三

八)の三回忌に(在位二三年)、法親王を偲び献じた追善の和歌である。こ

の三年、現とも夢ともわからず年を重ねた我身をふり返り、「そうほうい

む」の法号を頭におき亡き宮を想う。

同和歌書は乾山遺品として入谷村乾山焼二代目次郎兵衛が所持。次郎

兵衛孫・坂本村百姓彦右衛門から酒井抱一へと渡るが(鈴木半茶、一方次

郎兵衛筆記「初代口述二代筆記」は三代宮崎富之助へと譲られ、富之助妻

はるからこれも抱一が入手、併せてそれらは文政七年(二八二四)西村貌庵

へと譲渡された。貌庵は天保七年「乾山世代書」を認め、名前譲り状とな

り、今日、同和歌(懐紙一編)は奈良市大和文華館に保管されている。

初代口述二代筆記陶法書は関東大震災によって消失(推定)。行方知れ

ずとなっている。が、このたび筆者らはその写本を東京都中央図書館加

賀文庫に見つけ出した(冒頭図)。

乾山、江戸篇では次の三つの事項を基に考えた。

- 一、江戸下向に伴う関与を推定、公寛法親王と周囲の人々
- 二、入谷村における作陶を考慮、江戸入谷村と入谷窯
- 三、光琳二世を名のり絵画も描く、席画・席焼と周囲の人々

はじめに乾山所縁の公寛法親王の足跡を尋ねたが、先立って法名「公寛」を与えた寛永寺五代門主・輪王寺宮公辦法親王の事蹟を問うてみたい。

(一) 寛永寺五代門主・輪王寺宮公辦法親王

門跡寺院は、平安以来の伝統がある。

天皇は「御門」、その出家を「御門の跡」と称したが、仁和寺門主を始まりとして、天皇家の皇子・兄弟が門主となる宮門跡、摂関家の子弟による摂家門跡、皇族出身者・公家らによる准門跡などがあり、天台宗・真言宗・法相宗に限られていた。江戸期になり浄土宗を宗旨とした徳川家の所縁によって知恩院宮門跡（華頂御懸、天海の希もあり、天皇家皇子を門主とした輪王寺宮門跡が創設。格式は門主の出自に順うが、「禁中並公家諸法度」（慶長二〇年・一六一五）には規定があり、宮門跡でも青蓮院・妙法院・梶井宮など、親王の位階を表す極位は二品であり、最高位一品は輪王寺宮門跡、宮は天台座主に補されることが決まりであった。

公辦法親王は後西天皇の第六皇子、母は梅小路定子（三条局）、幼称貴宮、字脩礼、秀憲、玄堂を号とした。延宝二年（一六七四）、寛永寺二代（一六〇八―九五）の法嗣となり山科毘沙門堂に入室、同六年得度するが、天和二年（一六八二）同堂門主を経て、元禄三年（一六九〇）輪王寺

宮二代（初代は守澄法親王 一六三四―一八〇）天真法親王（一六六四―一九〇）の遺命に従い上野寛永寺五代門主の名跡を継ぐ。

その折、既述の連歌を捧げた園田秀延（秀英・一六七六―一七四八）は一五歳。以来二六年の歳月を公辦法親王に近仕するが、法親王から深い信頼を寄せられていた。生国（父）は上野国吉澤と伝承、父秀房も輪王寺宮天眞法親王に仕えた家司であったが、秀延は公辨亡きものち短期ではあるが、次代公寛法親王にも仕え、享保元年（一七二六）四一歳を以つて辞職。翌二年父の死を契機として玉川へ退隱、寛延元年（一七四八）その生涯を終える。公辦法親王は、寛永寺中興の祖とされる。

三山管領として宗教界の頂点に立ち、宗内寺院の創設にも尽力するが、「公」とは私心なく正しい・公の義、「辨」は弁える・明らかにする・ただすなどの意である。元禄三年、寛永寺に入山。同六年（一六九三）及び宝永四年（一七〇七）の二度に涉り天台座主を勤めるが（元禄六年には一品宣下、宝永四年には准三后、正徳五年（一七一五）病を以つて新宮公寛法親王に職務を譲る。『輪王寺宮年譜』には「御上京御供覚樹院御附竹中主膳御医師芥川元泰正徳六年三月御上京御供御附之名前留無之」とあり、公辨は翌六年三月二四日体調の勝れぬなかを上洛、四月五日山科毘沙門堂に到着し、僅かその一〇日余りを経た四月一七日四八歳の生涯を閉じる。公寛法親王は嘆く坊官園田秀延を即刻山科毘沙門堂へと送り出すが、公辨への深い思いを綴つたその道中記が遺稿集『手むけ山』（玉川子園田君遺稿）である。公辨には五代將軍綱吉との交流が知られている。

公辨時代、寛永寺は寺領・寺域を拡張、伽藍・堂・門などの増築もあ

り、露座であつた大仏殿を建立、学問所の整備・勸学寮の再興を図るなどの功績が残る。隠居領も受理、綱吉の御成もあり、靈廟参詣、年回法要、元禄十一年（二六九八）九月三日には盛大に綱吉寄進の瑠璃殿（根本中堂）の落慶供養が行われた。同月六日には靈元院宸筆「瑠璃殿」の勅額も届くが、不運にも同日、新橋より発した火は下谷・上野山内へと廻り、瑠璃殿は免れたが、寛永寺本坊・巖有院靈廟（家綱・子院一三坊を焼失した。一二年をかけて復興するが、江戸の疾風は秋から冬烈しさを増し、街は乾燥、しばしば火災が起きた。

宝永六年（一七〇九）正月一〇日綱吉が生涯を閉じる。公辨は、厄月でもあり祈祷のために日光に滞在していた。が、急ぎ帰山。儀式・法要の任に当たるが、綱吉との交流は宮の涙となつて表れた。東山天皇の勅使が来山、綱吉は「正一位・太政大臣・常憲院」の官位・院名を下賜されたが、これらの事情は公辨に従い終止当儀式・法要に参列した秀延の遺稿集『いるさ山』に書き留められた（『玉川子園田君遺稿』）。

公辨には著述が多い。『延暦寺条例』『武州東叡山新建瑠璃殿記』『台宗二白題』などが現存するが、漢詩を好み、しばしば坊官らとともに詩会を開催。正徳元年には日光の美景を選し八景詩を賦すなど、翌年『日光八景詩集』（二巻）が刊行された。冒頭には、

新刻日光八景引 日光山八景詩者吾 一品大王之所新設 而與陪從之輩同賦者也
且類遇朝鮮國聘使在干江城 命需夫詩合爲一冊集 就而傳寫之者多 臣恐其有魯
魚之謬因請製諸梓云

正徳壬辰春三月 中大夫長州刺・史源好古 謹識 四方白印・朱印
朝倉景暉詩序には「天地之間雄雌地境境不爲不多（略）」

正徳改元辛卯秋九月既望朝倉景暉拜書

とある。詩序は陪從之輩 矢田陪好古（矢田陪長門守好古、朝倉景暉（孫六）、詩賦は「一品大王奉」（公辨法親王・玄堂）を筆頭に、大西法印元龍（子淵・矢田陪長門守好古・園田備前守秀英（秀延）・水野子碩（敬雲・慶雲）、医師芥川時亨（元泰）ら坊官・諸大夫・医師らのほか、朝鮮国聘使による序文・八景詩もあり、好古詩序には伝写する者も多く謬伝を恐れ、板行に至つた経緯などが記された。

公辨は伊藤仁齋・東涯を重用した。交流は古義堂文庫の記録に残るが、
「輪王寺宮公辨親王御筆靈山圖」（元禄・四年下賜）

「武州東叡山新建瑠璃殿暉」（宝永庚寅・七年賜、瑠璃殿は綱吉創建の根本中堂）
「次韻伊藤原蔵見寄」（七絶）

などであり、輪王寺坊官らに關しては、東涯筆『先游傳』に芥川貶敏（時亨・元泰父・水野慶雲・朝倉如圭らの名がみられ（乾山關係では緒方元眞・緒方維文・那波祐英・三好安宅など、書簡には芥川元泰・矢田陪長門守・進藤主税・原芸庵らの消息が伝えられる。公辨及びそれを取り巻く坊官・諸大夫、その学問、志、精神のあり方などを垣間見るが、仁齋は「仁を外にして所謂学問といふものなし」とし、仁は「言を以つて盡し、口を以つて悉すことのできない」ものであつた。「よく人を愛すれば人亦我を愛す」ことを教えとした。

天和三年（一六八三）、仁齋日記「家乘」には「尾片権平」（乾山）の名がある。乾山も正月二日の新年、五月五日の端午の挨拶に古義堂を訪れるが、仁齋の先妻嘉那（二六四六―七八）は乾山父宗謙の兄、備中浅野家半井家流医官緒方元庵の娘であつた。母妙千院は旗本井上氏の出、江戸に

生まれ、嘉那は東涯・具壽・清の三子を残して延宝六年（一六七八）に没してしまふ。乾山はそれより以前同四年、母「かつ」を失っていた。嘉那との面談は叶わなかったが、心中何処かに嘉那を懐かしみ、仁齋の学問に惹かれていたのかもわからない。文人となったその後の選択に答は潜むが、坐して自ら慮る道を進む。東涯は享保一六年、公寛法親王の在洛記録「准三后宣下勅書」を書写している。輪王寺宮と家司、学習塾と文人乾山、心底には各々相通するものが流れていたように思われる。乾山は江戸へ下向、坊官らの勤める輪王寺宮・寛永寺領内入谷村に住してやきもの製作、何らかの因縁が胸裡を過ぎる。

公辨には、寛永寺末寺深大寺の瘦土地に蕎麦の栽培を奨励、その蕎麦を好み、年貢米にならない「はね米」を用いた竹隆庵のこごめ大福餅を食し、根岸では笹之雪の豆腐を楽しみにしたなど、種々の逸話も伝承する。

(二) 寛永寺六代門主・輪王寺宮公寛法親王

公寛法親王は乾山所縁の法親王である。

「寛」は、心が豊か・度量が大きい・慈しむなどの意であるが、乾山初開窯の鳴滝山は撰家二條家山屋敷跡であった。元禄七年八月二日に讓渡されたが、当時の二條家当主は一七代綱平（一六七二—一七三三）、簾中は榮子内親王（一六七三—一七四六）、靈元天皇（一六五四—一七三三）の皇女である。兄には仁和寺宮寛隆法親王、弟には東山天皇、妙法院宮堯延法親王がおり、公寛は榮子内親王弟東山天皇（一六七五—一七二〇）の第三皇子であった。公寛法親王の消息は、以下の記録にその概略が認められる。

- ① 『輪王寺宮年譜』…出生・経歴・官位・院号とその大概
- ② 『徳川実紀』…將軍吉宗との交流、行事、日光登山のことなど
- ③ 『史料稿本』…寛永寺門主・輪王寺宮の動静、帰洛後の事柄
- ④ 『月堂見聞集』…天台座主として上洛、在洛中の諸事
- ⑤ その他伝えられる自筆の書・画・扁額揮毫、和歌・漢詩など

1、公寛法親王の消息（各々に重複する箇所を含む）

① 『輪王寺宮年譜』

『輪王寺宮年譜』は輪王寺宮歴代の来歴を年代を追い纏めたものである。公寛法親王の父は東山天皇、母は春日局従三位経子（参議水無瀬兼豊女・実は下冷泉爲経女。幼称を三宮、俗称有定。三歳の折に近江円満院行恵法親王の附弟となり、同寺を継跡。円満院は平安期天元四年（九八二）の草創とされる。村上天皇皇子悟円法親王を開基とするが、園城寺（三井寺・天智天皇皇子大友皇子の発願）一山中、第一の格式を有したとされ、宝永五年（一七〇八）公寛は同院において得度、法諱寛尊、正徳三年（一七二三）公辨の法嗣

に決定。同四年坂本滋質院に移り、二月一日東叡山・日光新宮に就任する。公辨からは公寛の二字を授け、二品、阿闍梨宣下、勅令御旅頂御修行、同五年五月二〇日一八歳を以つて寛永寺門主、輪王寺宮を継承する。享保二年（一七二七）一品宣下。翌三年天台座主として上洛、供は靈山院（御附は不明）、五月三日に東叡山発興、同月一四日京都着、御旅館は有栖川殿とある。

再度の上洛は同一六年四月二六日、供は惠忍院、御附は水野惣兵衛、医師名はないが、『輪王寺宮御上洛記上』（叡山文庫）に照合、芥川元泰であつ

たことがわかる。同上洛記は寺方による記録である。大半が寺院関係、挨拶・贈答品などの記載である。もしやと思ひ叡山文庫を訪ねたが、三〇種ほどの文書中乾山名を見出すことはできなかった(町人名を認めるが)。

京都着は五月七日、御旅館は廬山寺とあり、九月一八日には毘沙門堂に入室する公遵^{こうじゆん}の得度に戒師を勤め、一〇月二三日江戸へ戻る。享保二〇年(一七三五)五月八日公寛法嗣として公遵法親王が決定。元文三年病がちとなり、三月日光新宮・公遵法親王に職務を譲り、勅賜号崇保院を受理。同月一五日、四二歳を以つて薨去、東叡山慈眼堂境内に奉葬される。

②『徳川実紀』

『徳川実紀』は『御実紀』が正しく、幕府の記録を基盤とする。日付を追つて歴代將軍とその時代の出来事、逸話などを集録。本編と附録から成り、編集には林述斎、成島司直^{なるしよぢく}ほか下級武士、昌平坂学問所の学生が当たるとされる。文化六年(二八〇九)二月に始まり、天保一四年(二八四三)二月(嘉永二年とも)完成したが、公寛法親王に關係する記述は、正徳三年(一七一三)二月一日「けふ日光准后こはせ給ふま」に円満院覺尊法親王附弟の事仰下さる」に始まり、元文三年(二七三八)三月一六日「この日崇保院准后公寛法親王うせ給ひしをもて音楽をと、めらるゝこと三日なり」を以つて終わる。

公寛法親王関わりの將軍は、かつての紀州藩主、八代吉宗・頼方である。政治体制、幕府財政の再建を試み享保の改革に着手するが、公寛とは親しく交流、日光山への往還にはその前後に必ず慰勞の使者を立てる

が、宮の健康を気遣い、時には医師の派遣・随行などを考慮する。宮の進言にも即対応。一例であるが、日光山東照宮給仕輩の困窮を伝える宮の訴えに即賑給を以つて応え、天台座主として上洛する節には駅使の配慮も記録に残る。一方、公寛も吉宗の改革に恭順、享保六年寛永寺本坊の修理には「華麗に過ること然らず」として、自ら書院、装束所他を取り扱うなど、質素を心懸ける態度をみせる。

が、享保一三年四月一三日、幕府は大散財、大行事を取行する。

吉宗による日光社参である。秀忠・家光・家綱以来六五年ぶりの日光登山、諸大名を引き連れての参詣であったが、幕府権威の復活を図り、泰平の世に軟弱化した武士の精神を戒めることを目的にしたという。莫大な支出を伴い、出発前八日には行軍予習も行われたが、一三万人余の供奉、二二万人の人足、夥しい数の人馬を揃えた記録が残る。嚴重な警護のもと、日光までの途次、岩槻・古河・宇都宮に宿泊。一七日には家康忌日の祭祀を厳行、家光・大猷院靈廟に参詣し、帰府となるが、五月二〇日には寛永寺に御成^{おんご}とあり、法親王・僧正・院家・坊官・家司ら一山の宗徒みな出座、無事の還御をよろこぶとある。

宮は、毎年一月・四月・九月の厄月には日光山に上るしきたりであった。滞在は凡そ一カ月、寺務を果たし、天下泰平、幕府安泰・万民豊樂を祈念するが、年度はじめの登城はそれ故二月一日が決まりであった。拝賀には日光・比叡・東叡山の三山僧侶、宮家の家司、伶官も参内。三月には上巳^{じよし}、五月端午^{たじて}、七月七夕^{たなばた}、九月重陽^{ちやうやう}などの季節・節会の挨拶、折に触れて法会・法要・法務に関する伺候もあるが、「日光門跡」(日門・妙

法院日記』は「輪門」と記す）からも四季折々の贈答品、祈祷の巻藪・符録、祖師天海の植林した吉野の桜（上野の桜、不忍池の蓮根、薯蕷・岩茸、京都からの薰衣香・干菓子などを献上。將軍からは昆布・柿・蜜柑・葡萄・茶・龍眼肉、朝廷の慣習に因み時服と称し毎年春秋・夏冬二季の衣服を贈呈。祝事には太刀・金、仏事・法会には金銭の授受も記録に残る。享保一六年の上洛には、出立前の四月四日、將軍は銀五〇〇枚・綿三〇〇把、大納言は銀三〇〇枚を贈呈。執当・坊官・家司らにも賜ものがあり、京都においては寛永寺門主法嗣（公遵法親王の得度に際し、公寛・公遵両宮へ紗綾・銀・馬代などが贈されている。諸行事は恒例化、応答には寺側、幕府側ともに専門とする担当者の配慮があつた。

元文二年五月三日上野は大火にみまわれた。下谷八軒町より出火した火は寛永寺本坊・開山堂・福聚院・東漸院などを焼き尽くすが、吉宗生母浮圓院靈牌なども被災。公寛は観成院へ、新宮となった公遵法親王は春性院へ避難をするが、幕府からは即、時服・夜着・蒲団などの配慮があり、本坊復興の営作の任には寺社奉行大岡越前守忠相、小普請奉行本多近江守正庸が当てられた。が、公寛法親王はこの頃からしだいに健康を損なうか、病の記述が散見。やがて翌年三月九日病臥を以つて任務を離れ、幕府からは医師吉田元卓も参上するが、同月一六日薨去、鳴物停止三日の沙汰が下された。

③『史料稿本』

『史料稿本』は、『大日本史料』の草稿である。明治年間の編纂であり、

平安仁和三三年（八八七）から江戸・慶応三年（二八六七）までの史料、本文・書名・その他を集成、記録したものである。公寛法親王に関しては、正徳四年四月二日（三日とも）二品宣下、享保二年二月一日（二九日とも）一品宣下、享保三年初の上洛を伝え、寛永寺新門跡の始まりを知らせるが、天台座主には二度就任。初度は享保三年、二二歳の折であり、青蓮院尊祐法親王の辞任に伴い選任された。「御上京御供靈山院其外御附之名前書留無御座」とあり、寛永寺執当靈山院が同行。靈山院は慈泉（公辨より賜）と称し、西久保普門院の院主であつたが、供衆の詳しい記載はなく、滞在は五カ月余り。六月一三日天台座主、八月護持宣下、十月二六日には座主を辞任し江戸へ向かう。帰府後の記録は以下の通りである。

享保四年一月四日 將軍吉宗より朝鮮国からの贈品を分与される
 同 五年二月一日 焼失した寛永寺開山堂（享保三年）の建立を願ひ出るも不許
 同 一月一日 再度幕府に開山堂建立を請ひ小規模として認可
 同 七年二月二日 律院創置を願ひ認可
 同 二年五月二日 吉宗の寛永寺詣り（御成、公寛宴を催す）

再度の上洛は享保一六年四月二六日、三四歳の折である。「此時御供患忍院御附水野惣兵衛御醫師名前書留無御座」とあり、同行は患忍院、水野惣兵衛、医師は芥川元泰の名を確認した（『公寛法親王御在洛日記』叡山文庫）。患忍院は患潤と称し、寛永寺執当と推測。供衆は水野惣兵衛、『月堂見聞集』には惣兵衛に加えて水野隼人正の名もみられる（両者は父子か否か）。滞在は同じく五カ月余り。一〇月二三日帰府の途につくが、その後のことは以下のように認められる。

享保二〇年五月九日 毘沙門堂公遵法親王を附弟とする

元文元年 九月四日 幕府開催江戸城大広間に於ける散楽・饗応
 同 二年 三月一日 公寛、公遵両法親王を招き於座御間における散楽・饗応
 同 五月三日 下谷大火。寛永寺本坊・吉宗生母巨勢氏廟焼亡
 公寛は觀成院、公遵は春性院に移居

同 六月二五日 幕府齋菜を開催、公寛、公遵法親王を饗応

同 一〇月九日 幕府江戸城丸九において公寛、公遵を饗し齋菜

同 元文三年三月九日 公寛法親王病を以て隠居願。公遵に代わる

同 三月一五日 公寛法親王薨去

同 三月一六日 公寛の薨を以て鳴物三日の停止

同 三月二四日 公寛の薨を以て京都において廢朝三日

④『月堂見聞集』

『月堂見聞集』は本島知辰(生没年不詳)編。知辰は京都の人、字を梅十、号を月堂と称したが、詳しいことは伝わらない。同書は元禄一〇年から享保一九年(一六九七—一七三四)に至る三七年間の記録であるが、江戸・京都・大坂の三都を中心に地方に伝わる巷説、天変地異、災害、自然の出来事などを集録。公寛法親王に関しては正徳四年から享保一六年までの記述があり、以下はその抜萃である。

正徳四年甲午歳(一七二四) 公寛法親王一七歳、乾山五一歳、両者の年齢差は三四歳)

○三井寺門満院宮 東山院之皇子 冷泉様御樂御殿 当年十七 此度日光山輪王寺へ御入院 去極月十八日江戸御殿中にて為被仰出 則当二月朔日京都御発興被遊候由 町奉行中根撰津守殿 内々江府御參勤御願故 此度宮様供奉被成候管

享保三年戊戌歳(一七二八) 宮二歳、乾山五十五歳

○同(五月) 十四日 日光輪門主御上京 有栖川様御屋敷御旅館

○同(廿七日) (十月) 輪門主日光へ御帰山に付 京都御発足

享保一六年辛亥歳(一七三二) 宮三四歳、乾山六八歳

○五月七日 日光宮様御入京 廬山寺に御寄宿 御供水野惣兵衛 水野隼人正御

尋相候御札のため御參内

○日光宮様 江戸御道中御通り之節 大名方泊り休み高札をおろし 小き紙に何某泊り或は休みと書付 彼の札の柱に張る 但し地より二三尺高張るなり 宮様御乗物よりあがざるやうの為なり 若し寄宿の大名あれば幕をおろし上下の人数外へ不出 鳴り音を静め 是又細微なる紙に何某寄宿と書し 地より二尺程に張る 途中にて行逢たる大名家中未々迄惣下馬なり

○五月廿九日 六月初二日行逢たる大名 日光宮様へ山門惣出齊來 其外諸國僧侶諸旦那 御礼金子銀子御菓子献上 貝塚ト半金目録御目見え

○同(十八日) (マ) 日光宮様叡山へ御參詣 夫より三井寺にて御晝休み 夫より毘沙門堂へ御入御休息 志賀院に御滯留

○六月十日 二条右府吉忠公御籬中一所に壬生地蔵堂へ御參詣 此処に二条殿御地方あり 庄屋濱岡与三右衛門宅にて御休息あり 籬の内に御望に依て俄に舞臺を拵て 壬生寺大念仏の狂言を仕候 世間に日光様御見物と云 尤非なり 輪門主様は祇園会七日十四日ともに御見物無之由 山門へ御登山被遊夫より志賀院に少の内御滯留 三井寺より山科へ夫より御本坊へ御帰駕被遊候由 已上

○六月晦日夜 日光宮様下賀茂へ御越 則拜殿并橋殿に翠簾を掛御座とす 御祝の後御帰寺 志賀院 水野惣兵衛御供

○九月十二日か 妙法院様坊官衆逼迫の事 一説に 日光宮様御方へ諸門跡様方御招請被遊候節 妙門様紫衣一説緋衣と云は謬り也 此れは御着被遊候時は 青門様へ御断被遊候て御着被遊候古実也 右の御断無之 坊官衆の不届に依て如此右は法皇御所より被仰渡候由

○九月十二日 修学院へ御幸に付 日光宮様御一所に行啓あるべき筈の所に 宮様は少々御機嫌不宜故 其義無之候

○同(十八日) 二宮 毘沙門堂へ御入漆行列奥に記す

○享保十六年亥九月十八日 二宮(公遵法親王) 毘沙門堂へ御入室行列同日御得度其後に御囃子在之

二宮様は三条西殿迄御入 夫より傍に聖護院宮様へ御入被遊候毘沙門堂迄の儀式は空輿而已 是故実の由 御得度も実は当春被遊候 曇景院様も御得度は儀濟候て 当九月廿一日に御得度の御儀式有之候

二宮の御事 今上皇帝第二の皇子 御母は清水谷大納言御娘源内侍の御腹(公寛法親王の法嗣、次代輪王寺門主公遵法親王の得度のこと、戒師は公寛)

○同(十月) 五日 日光御門主 毘沙門堂御門主 両御門跡様御目見 金目録 毘布一臺御贈を御札貝塚ト半 右は日光御門主于干日には江戸へ御発足に付て也

○同十日朝 日光御門主京都御発興 以上。

正徳三年二月一八日、江戸城において公辦法親王の法嗣として公寛法親王が決定。翌四年二月一日町奉行中根摂津守同道のもと日光新宮として江戸へ向かう。

五年が経過、初上洛は享保三年。再度の上洛は享保一六年四月二六日。同日江戸を立、供衆は水野惣兵衛・隼人正、宮の格式を示す道中記があり、近江三井寺、山科の毘沙門堂にも立ち寄っている。かつて新門主として研修に励んだ大津坂本天台宗滋賀院に滞留。滋賀院は天海の開創であるが、元和元年（一六一五）後陽成天皇より京都法勝寺を下賜されたことに始まるという。輪王寺創設に伴い兼帯寺となり、延暦寺里坊の一つとなるが、天台座主を勤めた法親王の住まい、学問修業所として使われていた。叡山文庫には享保一六年「公寛親王御上洛坂本井山上下宿部屋割寛」（止観院文書）とした宿泊記録が残る。供衆の宿泊を確認するが、月堂はここで巷説を挿入。京都滞在中公寛は、六月一〇日二條綱平息吉忠夫妻の壬生地蔵堂参詣に同伴した。否、祇園会見物をした。否、また六月晦日夜には水野惣兵衛を供に下賀茂神社の祓えに参上、九月には洛中の諸門跡の集會に参會するが、もしや乾山との手懸かりがあるのではと考えたが、否であった。

⑤公寛法親王の文事・芸事

公寛法親王には桂州けいじゅうと号し、書・画、漢詩・和歌、猿蓑などの嗜みたしなが伝えられる。絵画・扁額揮毫、和歌集奉納などが伝世（判然としないものも

ある）。近辺及び三山管領職を勤めた関係上それに繋がる寺社、輪王寺宮御家来衆に蔵された諸品などに足跡が残る。

― 絵画 ―

一、元三大師肖像

日光往還の折、公寛法親王は佐野大字寺岡、春日岡山惣宗寺を宿所とした。同寺は別名寺岡山薬師寺、通称佐野厄除け大師として親しまれているが、寺には公寛筆元三大師肖像画が伝承する（一六弁の金彩菊花紋章がある。元文年間、龜田庄左衛門則重なる人物が寛永寺より拝領、当地の寺に寄進したと伝承するが『栃木縣誌』）、元三天師は天台宗中興の祖、延暦寺一八代座主慈恵大師・良源（九二一―八五）である。命日が正月三日であることから元三の異称が生じ、一説によれば同絵画は、佛絵師神田宗庭（三代善信か四代伊信か）の描く所、公寛法親王が開眼供養（目を描き魂を入れる）をしたと伝えられる。神田宗庭は、木村了琢とともに江戸期を通じて日光山、東叡山などの仏画・肖像画を制作した仏絵師である。初代宗信（一五八九―一六六二）は天海に従い江戸へ下向、家康の肖像画を描き、その修復に当たり七代貞信（一七六四―一八〇〇）は「東叡山御繪所宗庭御修復調達」と記すが、寛永寺絵所、絵仏師であったことが知られる。『古画備考』には寛文以来一代に渉る記録がみられる。江戸期は大規模な寺社造営に伴って御用絵師狩野一派とともに神田家、木村家代々が活躍、日光東照社に関しては、東照大権現像・天海大僧正像・薬師如来像・釈迦三聖像などが伝世する。

二、珠絵（宝珠か）…

前橋市総社町、光巖寺には珠絵が伝えられる。光巖寺は天台宗秋元山江月院、府内・関八州天台寺院の取締役であったが、享保二〇年（一七三五）三月下旬、同寺一〇代晃覺は日光山禪智院住持を勤め、その折公寛より同画を下賜され、箱書には以下のように記されている（光巖寺文化財調査）。

晃覺住持晃日光山禪智院時公寛大王命爲口近因自画以賜之者也
享保乙卯春三月下旬 准三后一品公寛親王御真筆 當寺第十世晃覺寄附

三、山水画…

享保一四年刊『澹園初稿』（秋本澹園・一六八八一—一七五〇）に「東叡玉台因不佞白雲詞賜画山水謹奉拜謝即事」とある。澹園は下野国黒羽大関藩鈴木刑部三男、名は以正（喜内）、秋本家の養子であった。荻生徂徠に古文辞学を学び、詩文にすぐれ、しばしば大名家の詩会に参会するなど、回画は澹園の賦した「白雲詞」に対し、公寛法親王が山水画を描き下賜したものと伝えられる。その他、地藏菩薩像、日光照尊院藏品なども伝聞する。

一書（扁額・経巻・その他）—

一、日光山二荒山神社神額…

享保一六年日光山二荒山神社中鳥居に「正一位勳一等日光大権現 一品公寛親王御筆」（『日光大観』「千とせの神垣」とした神額が掲げられた。元禄八年の建立であるが、寛政年間修理によって杉の鳥居は唐銅に改められ、のちに神佛分離によって撤去されたと伝承する。

二、下谷稻荷神社扁額…

下谷廣徳寺向かい側にあり、俗称廣徳寺稻荷また正法院稻荷。寛永寺

の建立に伴い寛永四年上野下寺（屏風坂大久寺隣）、延宝八年下谷廣徳寺前へと移転したが、享保四年、公寛法親王の執奏により正一位、中鳥居扁額に「正一位稻荷大明神」（『江戸名所図會』）と揮毫、下谷鎮守となるが、大正一二年関東大震災によって社は倒壊。昭和九年に復興する。

（その他『略縁起集成』によれば埼玉熊谷稻荷社額もあるという）

三、鶴岡八幡宮「三十六歌仙」扁額…

鶴岡八幡宮扁額に關し「畫ハ住吉廣守筆、歌ハ日光准后公寛法親王ノ筆ナリ」とある（『新編相模國風土記稿』。康平六年（一〇六三）源頼義（九八八—一〇七五）が石清水八幡宮の分靈を由比鶴岡に勧請し、神仏の分靈を請じ迎えること、現在地には治承四年（一一八〇）鎌倉幕府初代將軍源頼朝が移し、日光山と同様、頼朝によって関東一円の護りとされていた。扁額は伝世せず、廣守筆絵、公寛の和歌書も不明であるが、住吉廣守（一七〇五—一七二）は住吉廣保息、御用絵師であり、やまと絵を専らとした。公寛の周囲、和歌・文学では田澤義章が侍史しており、田澤は享保二年『武藏野地名考』を著し、『日光山記』『志賀記』『歌仙考』などを献上。鶴岡八幡宮両宮（上下）にはさらに公寛法親王筆歌仙和歌各々一通があつたと伝承。

是元文御修理ノ時造ラル、所ナリ

承寛雜録曰、元文元年、上下兩宮へ歌仙一通ツ、御奉納、日光准后ノ筆ナリ云々、按スルニ、上宮ノ額ハ、回録ノ時鳥有ス（『新編相模國風土記稿』）

とあるが、「鳥有」は全く無いの意、文化・文政期には既に消失していたか。が、『徳川実紀』には「日光准后公寛法親王鶴岡八幡宮の歌仙を染筆ありしにより、高家中條大守信實して純子二十卷、昆布一箱をくらせたまふ」とあり、幕府の関与が推考される。

四、法華經八卷…

埼玉県岩槻市大字慈恩寺に伝承する「崇保院公寛親王御筆法華經八卷」である。慈恩寺は天長年間（八二四—三三）天台宗延暦寺三代座主慈覚大師・円仁（七九四—八六四）の開創と伝えられるが、寺山の風景が唐の慈恩寺に似た所から慈恩寺の名がつけられたという。天正一九年（一五九二）徳川家康は寺領一〇〇石を寄進。寛永年間、寛永寺末寺となる。

五、書一行物…

文政頃、輪王寺宮家に仕えた狩野派絵師鈴木一郎（秀実・有年？—一八六六）は宝井馬琴（一七六七—一八四八）に公寛法親王筆一行物「乾坤一草亭」を贈る（『馬琴書翰集成』）。天保二年（一八三二）宮家家臣宅において目にした掛物であったが、詩句（『金石印譜』）は馬琴の愛翫する印章句の一つ。喜ばせようと無理に入手、馬琴に進呈。が、權威に媚びることを好しとしない馬琴は押入にしまい込み、遂に用いることはなかったという（『馬琴日記』）。その他公寛作の漢詩には葉室顯孝（一七九六—一八五八）自筆「頌公寛法親王初賦詩」がある。

安永頃には初音の森の鶯（乾山献上と伝承、浅草寺門前の浅草餅を好むとした逸話も伝承、俳諧では宝井其角門人秋色女もの句、「井戸端の桜あぶなし酒の酔い」（『いつを昔』元禄三年刊）に心を留め、庶民の暮らしに目を向ける。公寛は「供養法華儀」「重建勸学会条式」「説法華千部会啓建議」などを著した。日記には「公寛親王御在洛日記」（叡山文庫）が伝承する。が、このたび叡山文庫を訪い関係文書のすべてを披見、乾山に関する如何なる文書・事項も見出すことができなかつた。自筆・個人の日記などは別

途に保管されているかも知れず、江戸では度重なる火災もあり、焼失した可能性もある。乾山は入谷村のほか本所六軒堀・材木屋筑島屋坂本米

舟の長屋に独居、陶器を製したともあるが（『古画備考』）、元文二年下谷は大火、寛保二年には浅草・下谷一帯が大洪水に見舞われるなど、それによつて乾山は本所へ移るか。本所には長崎町があり、「長崎乾山」はその折の作陶であると考えるが、一仕事成し終えた老陶匠は、数寄者の陶芸、席焼・席描を愉しみとしたものではなかつたか。光琳二世を名のり、何帛（立林）を相手に絵師としても活動、和歌・俳諧では吉原名主庄司道恕齋、坂本米舟、須藤杜川、ことに依ると『近代世談』を著した菊岡沾涼らとも知り合ひではなかつたか。茶会・詩会、和歌・俳諧の集いに参会、江戸における乾山は、輪王寺宮公寛法親王と同家坊官進藤周防守勝任、入谷村やきもの工人次郎兵衛、久作。絵師立林何帛、数寄者・趣味人、既述の俳諧仲間などの交遊の中に活動していたことが推察される。

2、公寛法親王と乾山

元文三年三月一日、公寛法親王は四二歳の生涯を閉じる。薨去は京都『二條家御番所日記』には以下のように書き留められた。

三月廿四日晴 関白様御使中島岳八 御廻文來候儀 次第御傳達可被成候由也 其趣左記崇保院宮様就薨去 從今日三ヶ日之間廢朝候 仍而爲御案内如是二候 已上 三月廿四日 右如例次第可被來御傳達候 以上

『妙法院日記』にも同様の文書を認めるが、加えて公寛法親王後継者、中御門天皇皇子公遵法親王の兄弟からは、「御海御使被進候ヶ所」として聖護院宮様忠誓法親王（一七三二—一八〇八）、曇華院宮様聖珊女王（一七二二—一五

九、大聖寺宮御附弟友宮様など、弔意の使者が立てられたことが知られる。乾山の嘆きは如何ばかりであつたらう。三回忌に当たり崇保院宮の法号を頭に和歌六首（冒頭の六首）を詠するが、光輝く宮の遺業を偲び、^{はな}くも命長らえる我身を叙しくふり返る。

宮と町人との関わりは、寛文年中初代輪王寺宮守澄法親王に随従、江戸入りした江州坂本豆腐屋平右衛門の名が残る。天和三年（一六八三）坂本町二丁目に「金御紋付御用掛札」とあり、京都より「連れ來たり」、麩の用途を命ぜられた麩屋清右衛門は屏風坂下車坂町に「御用札」を拝領する（『下谷區史』）。寛永寺門主らとの関係では天海と御木具師（吉兵衛 柴田山城、屏風坂下車坂町）、公海と御木具師（庄左衛門 山城屋 他）があり、業種商勸學屋大助池之端仲町、菓子商茗荷屋肥後上野元黒門町、呉服商・瀬戸物商・指物師など、上野界限に住まいし、時代とともに名匠、名店として名を残す。乾山も、類似の立場ではなかつたか。法親王との関わりは元文二年正月の乾山自筆書状（小西家文書）に確認できる。銀座役人甥の彦右衛門（光琳庶子）を宮に紹介、その同僚長谷川兵衛を宮に對面させるなどの勞を執るが、『上野奥御用人中寛保御日記』には乾山の死に関し坊官計らいによる弔いの配慮、「乾山世代書」には「准后様京師より御召連被成候」、『古画備考』には「上野ノ准后様ヨリ折節召レシ時」とあるなど、町人ながら法親王との関係はかなり融通のきく立場にあつたことが推測される。御所出入りの商家の出自、半ば高い、半ば属する貴族に從属するなど、乾山には上つつ^{うえ}と^{がた}の交流が深く、葬儀、善養寺への墓所を手配した人物

も輪王寺坊官周防守進藤勝任である。「宮様懇意」とした言葉も残り、さらに進藤家は毘沙門堂坊官も勤める家柄。毘沙門堂には「東叡輦寺」と書した乾山焼蕎麥圖茶碗が伝世していた。追善和歌六首、書状・絵画にみられる「傳陸」印と活用。傳陸は「王命傳御」、帝に奉侍する王臣の意を含み、「傳」「扶」は同義、「陸」は陸む・広く平らな上野台地を意図したのか。武江在住の証であろうが、佐野の素封家大川顕道も手控（『陶器傳書』）に「乾山焼秘伝武州より申來たる」「壬九月廿二日」（享保一七年）と記しており、享保一七年乾山の江戸在住が確認できる。乾山は入谷村住。入谷は上野にあり、上野には寛永寺・輪王寺宮家があつた。權威ある天皇家、権力を有する將軍家、両者の結びつきが如何に大きな力を有したのか。乾山はその法親王の膝元にあり、晩年をおくる。

(三) 日光山・比叡山・東叡山

1、日光山満願寺（一乗実相院）

輪王寺宮は三山管領宮とも称された。

東叡山寛永寺に常住、正月・四月・九月の厄月三カ月を一カ月ごと日光山に登り滞在、時に応じて天台座主として近江比叡山に上る。輪王寺宮は承応三年（一六五四）後水尾天皇第三皇子守澄法親王を初代とするが、明暦元年（一六五五）後水尾院の勅によつて日光山満願寺は輪王寺と改称、貫主は輪王寺宮と称された。天台座主として上洛、東叡山門主、日光山貫主、比叡山座主を兼ねる三山管領、全国の天台宗寺院及び幕府の施策・行政に從つて当時の宗教界を統轄する役割を担う。

日光山は、地名であり、祭祀団体、同地方の宗徒二〇カ寺の総称である。奈良時代末期、天平神護二年（七六六）、山岳修業を求めた勝道上人（七三五—八一七）が神宮寺、四本龍寺を創建したことに始まるとされ、二荒山神・三社大権現を勧請、寺院は満願寺と改称、弘仁二年（八二〇）二荒は日光に改められた。嘉承元年（八四八）慈覚大師円仁（七九四—八六四）が来山、天台宗一乘実相院を総称とするが、二年後には坐禅院を創立、宗徒三十六坊が開かれるなど、勝道上人従弟大中臣清真を招いて二荒山神社に神主を置くが、治承元年（一一七七）兵火に遭遇、寺院は全焼してしまう。

再建は鎌倉期である。鎌倉幕府初代將軍頼朝（一一四七—一一九九）は下野寒河郡の土地を寄進、源氏の信仰を受けて日光山は関東一円の護りとなるが、三代將軍実朝（一一九二—一二二九）時代に護持僧弁覚法印が入山、熊野修験法を導入。光明院を創設し、貫主は源惠、鎌倉に居をおき、執務は留守役が当たるとした形式が成立。源惠はやがて京都へ上り天台座主を勤めるが、日光座主が天台座主となる嚆矢とされる。隆盛をきわめ、室町時代には関東一の霊場として知られ、領主壬生氏が介入するのは戦国時代以降のことである。が、壬生氏に従い日光宗徒は秀吉の北条征伐には北条氏に加担、全てを没収される結果となり、復活は、慶長一八年（一六一三）、家康が天海を日光山貫主に命じたことに始まり、日光山に新たな時代が訪れる。

家康の没した翌元和三年（一六一七）、日光山に「東照大権現」（家康）が祀られた。天海は、臨濟僧以心崇伝（一五六九—一六三三）らの主張を退け、神仏融合、山王一実神道の立場をとり、家康の死に権現号の謚号勅許を願

い出る。日光山は徳川氏とその祖廟を守る霊地となり、徳川幕府の権威を支える拠点となるが、かつて天台宗祖最澄（七六七—八三三）は中国に渡り帰朝後、天台山国清寺に倣い延暦寺に地主神・日吉山王権現を祀る。空海の来山説も伝承し、天台・真言二つの密教が伝播、日光山は三王神道、日枝山の山岳信仰・神道・天台宗が融合するが、さらに真偽は別として「二周忌過ぎに日光山へ勧請」（神仏の分霊を請じ迎えること）するべし、八州の鎮守とならん」とした家康遺言も伝世、天海は朝廷から「東照大権現」の勅許を得る。元和三年（一六一七）駿府久能山に納められた遺骨を遷移、東照廟が創祀されるが、七回忌には二代將軍秀忠が参詣。寛永一三年（一六三六）、三代家光による東照社大造替が完成するなど、二一回忌には「東照大権現縁起」（狩野探幽筆）が起草された。同二〇年天海は入寂。正保二年（一六四五）東照宮の宮号が勅賜されたが、家光は積極的に家康の神体化を図り、自らも日光に大猷院靈廟を造営。家康は増上寺において盛大な葬儀、安国院靈廟を設営、日光山には大権現となつて神として祀られる。家光も寛永寺に墓所を設け、日光山に靈廟を設けるが、同山には朝廷から毎年奉幣使が参向、秀忠・家光・家綱・吉宗・家治・家慶らの將軍社参、御三家・諸大名の日光詣、庶民の参詣が始まってゆく。日光街道も徐々に整備、門前町・宿場・茶店などが揃い、東照宮の造営は多くの繁栄をもたらすが、統率者、その責任を任された人物が三山管領宮、輪王寺宮であった。

2、比叡山延暦寺

比叡山は、『古事記』に山の地主神「大山咋神」（山末之大主神）の鎮

まる所、聖地であったと記されている。天智天皇が大和から三輪明神を
迎え大比叡と為し、大山咋神は小比叡として、日枝大社に祀られる。

比叡山は京都及び大津坂本に位置する山である。山上には桓武天皇代延
暦年間（七八一―八〇六）に開創された勅願寺延暦寺があり、天台宗総本山
開山は伝教大師最澄（七六七―八二二）である。大山咋神は山の地主神、延
暦寺の結界を守る守護神であるが、中国の天台山鎮守「地主三王元弼真君」
に倣い別名「山王」、天台宗に起きた神道一派を山王神道と称している。

最澄は、近江に生まれ一二歳で同地国分寺行表の弟子となった。一五歳
で得度。奈良東大寺に学び、延暦四年（七八五）比叡山において禪定修業。
一乗止観院（根本中堂）を建て經典の研究、同七年比叡山寺を建立する。入
唐して天台山上に学び、四宗（天台円教・密教・止観・戒律）を相承、帰朝して
桓武天皇から天台開宗の勅許を得るが、継承者修禪大師義真（七八一―八三
三）も最澄に従って入唐。『天台法華宗義集』を著し、天台座主の初代とな
る。二代は寂光大師円澄、三代は齊衡元年（八五四）慈覚大師円仁であるが、
三代以来寺内の称であった天台座主は公的な役職となり、一山宗徒三〇〇
〇人、一八代慈恵大師（良源・元三大師）の頃には最盛を極めたという。

元龜二年（一五七二）、織田信長（一五三―一八二）は延暦寺を焼討ちにす
る。秀吉、家康は復興に尽力するが、多くの堂・塔を焼失。叡山に学び
の道を求めていた天海はこの折、武田信玄のもとに身を寄せるが、信玄
は翌元龜三年壬申正月二十一日身延山を以って「東叡山」の山号を希ん
でいた。が、成就することなく（『享祿以來年記』）、「東叡山」のはちに常
陸の千妙寺、天海が住持を勤めた武藏国仙波喜多院（無量壽寺）の山号と

なる。天海は新都江戸に、比叡山延暦寺と同格の寺院・勅願寺造営を望
んでいた。結果、山号「東叡山」は上野寛永寺に移され、千妙寺は古東
叡山と呼ばれ、仙波喜多院は星野山に復されるといふが、慶長一二年（一

七〇七）、天海は家康の命を受け比叡山探題奉行を勤める。叡山復興に尽
力、根本中堂、大講堂なども再建、積極的に幕府の宗教政策に参画する。
勅願寺の建立、三山管領宮の確立と輪王寺宮の設立、家康を権現として
日光山に祀るなど、元和元年（一六一五）には比叡山麓に滋賀院を創設す
る。滋賀院は後陽成天皇から京都法勝寺を下賜されたことに始まるとい
う。輪王寺宮門跡の成立に伴い天台座主・門跡の学問修業所、隠居所、
延暦寺里の坊の一つとなったが、寺領は一二五〇石、境内は凡そ六〇〇
〇坪、客殿、小書院、二階の書院、文書保管・寺務を司る用部屋があり、
御成門・物見・長屋・土蔵が設けられた。滋賀院御殿とも呼ばれており、
公寛法親王も輪王寺宮となり江戸へ下向する前、滋賀院に入室、勉学修
業、上洛時には御座所として活用、滞留に用いていた。

3、東叡山寛永寺

家康（一五四三―一六一六）は、江戸入府（天正一八年・一五九〇）前、小田
原陣中におき、菩提寺、祈禱寺として増上寺、浅草寺の方丈、別当を招き、
話し合いをもったという。

三縁山増上寺は、武藏国豊島郡貝塚にあつた真言宗光明寺を本居とす
る。明徳四年（一三九三）千葉氏・佐竹氏などの助力によって再建され、
浄土宗増上寺に改められたが、家康は郷里岡崎の菩提寺大樹寺とともに

江戸にも菩提寺を求めていた。結果、法系を同じくする増上寺を選択、元和二年（一六二六）、家康の葬儀が執行される。將軍家の菩提寺となり、家康墓所安国院（家康）廟を設けるが、將軍秀忠、家宣、家継ほか、その生母、各夫人方、子供方の墓所・霊屋などが調えられる。

金龍（竜）山浅草寺は江戸における最古の寺である。聖観音宗の総本山とされ、始まりは推古天皇代三六年（六二八）に遡る。隅田川に流れ着いた観音像を本尊とし、坂東三十三所観音の十三番とされており、大化元年（六四五）観音堂を建立した勝海上人を開山とし、東国を巡行した円仁（七九四―八六四）を中興の祖とする。寺名は『吾妻鏡』に初見、頼朝・北条氏・足利氏らの庇護などが記録に残る。家康は寺領五〇〇石を寄進、江戸城鎮護、幕府の祈願所としたが、秀忠は同寺に東照宮を造営するなど、周辺は庶民の集う娯楽場として繁栄する。綱吉時代に寛永寺支配下となり、貞享二年（一六八五）兼帯寺、昭和五〇年天台宗から独立する（伝法院は本坊である）。

―東叡山―

寛永寺の山号「東叡山」は、比叡山に対する東の叡山（上野山麓）、もとは武蔵国仙波（埼玉県川越市）、天台宗準別格寺院、星野山無量壽寺・北院（喜多院）の山号である。喜多院は通称川越大師、天長七年（八三〇）淳和天皇の勅により円仁が開山となるが、鎌倉期には北院 仏藏房・中院 仏地房 が設けられ、天台教学拡張の拠点となった。五五歳の天海は同寺 天台に師事、僧名 隋風を天台に改めるが、慶長一七年（一六二二）天台は住職として中興の功有り、後陽成天皇から「東叡山」の山号を下賜され

たという。家康は寺領五〇〇石を寄進、北院は喜多院に改められ、関東天台宗の総本山となるが、寛永一五年（一六三八）川越大火に遭遇し罹災、山門以外を焼失する。復興には江戸城紅葉山の別殿を移築、東叡山寛永寺の末寺となる。

―寛永寺―

寛永寺は円頓院と称し、寛永二年（一六二五）、上野山麓に天台宗、徳川將軍家の祈禱寺として創建された。家康没後の建立であり、開山・初代門主は慈眼大師天海、開基は三代將軍家光である。山号は天海が喜多院から移した東叡山。計画は家康の意を承けた二代將軍秀忠時代に始まるが、將軍は朱印地と称し全国の寺社に領地を与える権限を有していた（大名の場合は黒印地）。元和八年（一六三二）一月、寛永寺建立地には伊勢阿濃津城主藤堂高虎・陸奥弘前城主津軽信牧・越後村上城主堀直寄の大名家屋敷別野、及び周辺の村落が当てられた。寺域・寺領は寛文から宝永期まで四期に涉り拡張されるが（『下谷區史』）、京都御所から鬼門に当たる延暦寺を模倣（陰陽道）、江戸城より鬼門の地、上野忍岡を選択。桓武天皇の勅願寺延暦寺の止観院に対し、「円頓止観」（『摩訶止観』）の題目から寛永寺を円頓院と命名した。天台宗は江戸期叡山、東叡山に二分されるが、輪王寺宮を門主とする東叡山寛永寺が総本山となり、日光山に結集する寺社を統括、東照社（東照宮）の宗廟祭祀、鎮護国家、仏法興隆を祈願する任務を負う。三代將軍家光以降は徳川家の菩提寺となるが、本坊は今日の東京国立博物館全域に当たるとされ、上野台地の半分余りが寺域であった。大規模な寺社の建設・造営に伴い谷中、池之端、車坂側

の一带へと拡張されるが、寛永二年（一六二五）本坊が落成し、その後京都清水寺を模して上野清水寺、琵琶湖に見立て不忍池、竹生島弁財天を勧請し弁財天堂が創設される。寛永四年までには経藏・多宝塔・仁王門・東照宮など、同八年までには鐘樓・清水観音堂・五重塔・大仏・祇園堂などが寄進された。末寺は一八〇〇寺に余ると伝承。諸大名も前後して子院を設け、自らの宿坊としたが、元禄十一年（一六九八）五代將軍綱吉が瑠璃堂（根本中堂）・吉祥閣（文殊樓）・三王社門・宝蔵などを寄進。同年九月三日には瑠璃堂落慶供養が催されたが、生憎当日新橋から発した火は神田・下谷、寛永寺へと延焼。瑠璃殿は免れたが、本坊・子院一三坊・巖有院靈廟を焼失する。復興には一二年の歳月を要したという。

寺領（寺の収入）は、幕府の寄進が基本である。神領・佛供領・坊舎領などを合わせ、正保三年（一六四六）二二〇〇石、享保三年（一七一八）一七九〇石となるが（『下谷區史』）、子院は三六坊とされ、靈廟祭祀料、寄進、葬儀・法要、祈祷料などの収入があったという。年中行事・開山堂など種々の領分・修理・学頭・衆僧らの配当に充てられたが、寺界隈は農村と町家が主体。商業の発達は遅く、産業は近在の土を以って瓦・土器を焼く瓦生産、幕府、寺院の御用を務めた窯場が知られ、職人は半農半陶。乾山の江戸下向までその活動は記録に乏しい。

—慈眼大師・天海—

天海（一五三六—一六四三）は、戦国末期から江戸初期に活躍した天台僧である。寛永二〇年寛永寺において一〇七歳の長寿を全うするが、陸奥国高田の出自。会津黒川桶荷堂弁養幸のもと二歳で得度し随風を名のる。

一八歳から比叡山・近江園城寺・奈良興福寺において修学。一旦帰郷し永禄三年（一五六〇）足利学校に学び、上野国新川善昌寺に住したと伝承する。元亀元年（一五七〇）再度比叡山を目指すのが、信長の焼討ちに遭い、武田信玄のもとに身を寄せる。天正元年には会津黒川桶荷堂別当、上野、常陸国不動院、下野国宗光寺にも関わり、慶長二年（一六〇七）家康に謁したことから運命が変わる。背後にあつて徳川幕府の寺社政策・行政、法度などの起案・施策に参画するが、家康・秀忠・家光と三代に渉る將軍家の帰依を獲得、以下はその概要である（『下谷區史』・中川仁喜著「徳川將軍家と寛永寺」）。

元亀二年（一五七〇）信長による比叡山焼討後、甲斐国武田信玄の庇護を受ける
天正元年（一五七三）会津、上野、常陸に移る
慶長四年（一五九八）武藏国仙波無量壽寺（北院・喜多院）に住し豪海に師事、天

海と改名。同八年下野宗光寺を復興
同十二年（一六〇七）施薬院宗伯の推挙を得て家康から比叡山探題奉行に任ぜられる。叡山の復興に尽力、同山南光坊に入る

同十三年（一六〇八）家康に招かれ駿府に赴く。翌年後陽成天皇に謁する

同十四年（一六〇九）智楽院院室の下賜、権僧正となる

同十六年（一六一〇）後陽成上皇からは毘沙門堂門跡の室を預けられる

同十七年（一六一二）武藏国仙波喜多院、天台宗関東の本山となる。川越へ移る

同十八年（一六一三）家康から日光山貫主に命ぜられ、元和七年（一六二二）同山本坊光明院を再興する

元和元年（一六二五）比叡山麓に滋賀院を創設する

寛永二年（一六二五）寛永寺が完成する。天海は八九歳を以って開祖となるが、家康の構想に従って幕府、徳川家の繁栄・安泰を祈願。門主には天皇家の皇子を迎え宮門跡寺院とすることを願うとされる。初代天海、二代公海（花山院忠長息・一六〇六—一六九五）、承応三年（一六四五）三代門主に後水尾院第三皇子守澄法親王（尊厳）が迎えらる。勅号を得て明曆

元年（一六五五）門主は輪王寺宮となるが、東叡山門主、日光山貫主、比叡山座主となり三山を統括、三山管領宮と称された。天台宗に限らず江戸期の宗教界に君臨する存在となるが、一年のうち寛永寺に九カ月、日光山に三カ月（正月・四月・九月の厄月各一カ月毎）、延暦寺には時に応じて五カ月余りを滞留した。比叡山の支配権を掌握、天台宗一門を統率するが、「座主」は貫主、住持・住職の意である。のちに各宗本山住持の敬称にも使われるが、平安期天長元年（八二四）、寺の私称として始まつており、

最澄入寂後、修禪大師義真が初代座主に就任、二代は寂光大師円澄、三代慈覚大師円仁着任以来太政官の任命する役職となる。中世には宮・摂家門跡の制度も整い、法親王らが就任するが、寛永寺建立後は後水尾院第三皇子尊敬法親王のちの守澄法親王（二七九代）が着任、同寺門主四代天真法親王・五代公辨（二八八代・二九〇代）、六代公寛（二九六代・二九九代）、七代公遵法親王（二〇三代・二〇六代）が任に当たる。

寛永寺は三代家光以来徳川將軍家の墓所となる。同寺及び家康廟安国院のある増上寺に葬られた將軍は以下の通りである。

- 寛永寺…三代家光（大猷院）・一六〇四―一五〇）・四代家綱（殿有院）一六四一―一八〇）
- 五代綱吉（常徳院）一六四六―一七〇九）・八代吉宗（有徳院）一六八四―一七五二）
- 一〇代家治（俊明院）一七三七―一八〇六）・二代家斉（文恭院）一七三二―一八四二）
- 一三代家定（温恭院）一八二四―一五八）以上七人。
- 増上寺…二代秀忠（台徳院）一五七九―一六三三）・六代家宣（文昭院）一六六八―一七二二）・七代家継（有章院）一七〇九―一六）・九代家重（尊信院）一七一六―一七二二）
- 一二代家慶（慎徳院）一七九三―一八五三）・四代家茂（昭徳院）一八四六―一六六）以上六人。

最後の將軍慶喜（一八三七―一九一三）は寛永寺谷中の墓地に埋葬。各寺には各々

將軍生母・正室、関係する子女らの墓所がある。寛永寺は幕府の官寺であった。將軍の御成もあり、葬儀、法要、命日の参詣ほか、門主・輪王寺宮には葬儀・法会の導師、戒師、その他の勤めが課せられたが、寺には役職があり、各々補佐が控えていた。学頭（宮に代わり一山を統括、法要・儀式・僧徒の指導に当たる）・執当（寺の諸実務を執り仕切る）・別当（靈廟・三内諸堂の管理などに当たる）目代（年貢・警護・警備などの雑務を担当）である。

輪王寺宮は寛永寺の門主、併せて宮家の当主でもあった。家臣には坊官・諸大夫があり、僧俗両面から宮を支える家司である。宮個人の使者ともなり、公武の場にも関与するが、俗体、帯刀、剃髪して僧位をもつ者もあり、皇族、摂関家の事務を掌る。朝廷に仕えるところから天皇より官位が下される官人であり、位階は四位、五位から進む廷臣、官は「守・大輔」など格別の待遇であつたとされる。解る範囲内であるが、初代守澄法親王には進藤長昌（二男長之は近衛家諸大夫。二代天真法親王には芥川昶敏（古義堂『先游傳』）・蘭田秀房、三代公辦法親王には蘭田備前守秀延（秀房三男秀英・矢田陪長門守好古（孟敏）・芥河時亨（元泰・昶敏子息）・水野子碩（敬雲・『先游傳』に慶雲とあるが）・進藤泰道（長昌長男・のちに近衛家家仕。四代公寛法親王には進藤周防守勝任・矢田陪豊前守好銃・水野惣兵衛。五代公遵法親王には進藤周防守勝任・矢田陪豊前守らの名が確認される。

院家は、仏事に関与し僧侶として宮に随う側近である。宮が個々の任職に与えることもあつたという。

二、入谷村と乾山

(一) 江戸

地形は気候の変動によつて変化をする。海面が下がり陸地が生じ、川や谷、台地が造られる。江戸は下総台地に対しており、武蔵野台地、山の手台地、下町低地から成り立つという。武蔵国に属するが、「入江の門戸」、「江戸」の地名は平安時代末期に遡る。在地領主に江戸郷を名字とした武将がおり、関係文書数通が伝世する。

江戸重継(生没年不詳)である。祖を桓武天皇曾孫高望王秩父流平氏とし、江戸に本拠地・居館を構えたとされる。子の重長(生没年不詳)は水上交通路、江戸湾・隅田川の水路を握るなどして経済力をつけ、治承四年(一一八〇)、重継とともに相模国豪族三浦氏と戦うが敗北。頼朝に屈し、やがて武蔵国指揮権留守所総檢校職に補任されるが、応安元年(一三六八)一揆に敗れ、一五世紀頃には没落したとみられている。以後、江戸は扇谷・上杉家の支配所となるが、長祿元年(康正三年・一四五七)、上杉家(持朝)の家宰であった太田道灌(資長、一四三二—一三八六)は享徳の乱(幕府・足利成氏・上杉氏の争乱)に備えて同地に江戸城を築城する。道灌没後は上杉朝良の居城となるが、桃山期大永四年(一五二四)、戦国大名後北条(伊勢氏)氏の支城となり、城代は遠山綱景。が、秀吉の小田原攻めに遭い敗北。天正一八年(一五九〇)八月朔日、徳川家康の移封となり、新たな江戸の歴史が幕を開ける。

江戸は、家康の入府した折、僅かな町家と農家の在する貧弱な土地であったという。周囲は湿地、原野、入江が入り込み、船の発着場はあつ

たが、城館は板葺き・萱葺き、土間によつて構成されるなど、子城・中城・外城の三重構造、城は門・橋を以つて結ばれており、南に品川湊、さらに南方、鎌倉への水・陸路があつたという(「江戸城静勝軒序并江亭記等写」)。

家康の事蹟、説話を伝える『岩淵夜話』(大道寺友山著、享保初年頃)は「東ノ方平地ノ分ハ窶モカシコモ沙入ニ茅原ニテ」と記しているが、三代將軍家光に至るまで浅草寺雷門より東叡山の峯までは葦が一面に茂る谷とされた。家康は池や沼、海岸を埋め立て、掘割を開削、川の流れを替えるなどして即刻土地の開発、治水工事に着手する。城や城下の整備も始まり、時代とともに内郭の本丸・二の丸・三の丸・西の丸・北の丸・吹上など、外郭の武家地・寺社地・町人地などの配置も徐々に整えられるが、造成地の地割り、割り当ても始まり、沼地・田地であつた寒村は、慶長期から寛永期(一五九六—一六四四)、のち二五〇年に渉る帝都の土台に変貌する。城の大増築、市街の整理・拡張など、侍屋敷、神社仏閣、町屋ほかの建設地へと姿を変えるが、それには莫大な建築資材・工材に需要があつた。新都市江戸は、城を軸として江戸内海(江戸湾)、及び隅田川を中心に展開される。海が迫り、辺りは沼地・湿地帯。物流には運河、造成地の乾燥や排水のため掘割を開削、飲料水(神田川など)には井戸、上水道を建設するが、江戸の発展、拡張には水路、水の便の確保は不可欠のことであつた。城下には舟の出入りを可能とすべく日比谷入江を埋め立て道三堀を開削、江戸湾へと繋げ、隅田川では本所・深川から小名木川を通して房総へと結びつけるなど、資材・部材、米・塩・魚・野菜などの食料輸送路を確保。城の周囲には外堀を繞らし、内濠・外濠を結び、内側に徳川家直属の

家臣群団を住まわせるなど、着々と城と城下の建設が進められた。

慶長八年（一六〇三）家康は征夷大將軍に任ぜられる。天下に号令「天下普請」の時代となるが、近世江戸の建設はこの期に始まり、諸大名は競って未整地造成に着手する。大名小路と称し武家地を設定、周囲には町人地を配し、日本橋川には橋を架けるなど、日本橋からは東海道・中山道が拓かれてゆく。江戸城の本丸普請も本格化（慶長一〇年、寛永一四年（一六三七）には江戸の街づくりは一定の終わりをみるが、大名も一家二邸・三邸・四邸まで許されるなど、上屋敷と称する邸は主人の所居・江戸詰藩士の長屋を含み、中屋敷は上屋敷の補助、世子・隠居方の居処となるほか用途も雑多、下屋敷は修理・災難に際しての住まいとされた。府外には農地を買い取り抱屋敷を設けるなど、幕府同朋衆数寄屋坊主をはじめ、医師・絵師・能役者などにも土地が給された（『下谷區史』）。

状況が一変するのは明暦年間（一六五五―一六五八）のことである。町の六割を焼き尽くす大火が発生、都市の改造が余儀なくされる。復興は急務であり、且つ広範囲におよぶ移転が必要。選択は郊外となり、新たに本所・深川などの湿地の開発・造成が計られる。中級・下級幕臣らの武家屋敷、寺院などは強制的に同地へ移動、町人地も芝・赤坂・小石川・下谷・本所・深川へと広げられた。

(二) 上野台地

台東区は、先史時代、海底、海水の押し寄せる処であったという。陸地化したのは旧石器時代のこととされ、縄文期には海が入り込む内海で

あつたと伝承。貝塚の分布により武蔵野台地には大集落の存在が認められるが、活発な火山活動は火山灰を堆積させ、関東ローム層が築かれる。「上野」はもと岬であったという（二一頁上段図参照。台地には古墳群があり、埴輪なども発見されたが、国・郡・郷などの区分が生まれた律令時代、江戸は埼玉県・神奈川県の一部とともに武蔵国と称された。『望海毎談』（著者不明・元文から明和年間成稿）は江戸の古事・古跡を伝え、上野（忍の岡）項）に関して以下のように記している。

一 武蔵の國にて今の上野を忍の岡と云 湯島天神の臺を向ふの岡と云 谷中の方を入砂の岡と云 昔は芝浦の海の潮此所迄入來る入江の續にて 斯三ツの岡の打續を以て 谷中の岡に三崎と云地名有（以下略）

上野は忍の岡と呼ばれ、潮の打ち來る入江であった。名称は足利期永禄二年（一五五九）『小田原衆所領役帳』（北条氏康の家臣諸役・分限帳）に「上野内法林院分」とあり、『天正十九年の水帳』（一五九一・入谷村名主三葉傳次郎所持）にも「武州豊島郡上野郷」とある。足利期文明頃（一四六九―一七八七）には「忍岡」、永禄年間（一五五八―一七〇〇）には「上野」と呼ばれ、徳川期以前の呼称であり、のちに山籠一帶の名称となる。町の起立は寛永寺建立時代が始まると伝承する。

(三) 下谷低地

「下谷」は台地に対する低地の意である。台地は上野・高台にある平坦地、低地は下谷・上野から下へと続く低い土地をいうが、文書には「江戸廻り下谷菅野分」（『小田原衆所領役帳』）とあるなど、戦国時代からみら

れる地名であつた(谷中・深川・本所・小石川・金杉・栗嶋・青山・麻布・四谷などを含む)。同地域からは石器・金属器、貝塚、縄文土器・弥生土器などが出土、『新編武蔵風土記稿』(文化七年から文政二年・一八一〇—一八一八)には「下谷ハ古キ地名ナリ」、浅草寺『事蹟考』には「大猷院殿御代ノ後マテ 浅草寺雷神門ノ邊ヨリ東叡山ノ岸マテ 葦一面ニ茂リシ谷ニテ 一目ニ見渡サレトアリ」とあり、下谷の歴史の古いこと、家光時代は未だ一面に葦草の覆う見渡しの良い谷であつたことが理解される。明暦の大火後、急速に拓けるが、南方には下級幕臣の家屋敷、北方には文人墨客の集う根岸村、寛永寺前方にはしだいに門前町が開かれてゆく。浅草寺門前には戦国時代以来の古い集落があつたとされ、寺院、娯楽場所が混在、賑わいは今日の浅草寺界限へと継続する。下谷一帯は農隙に土器を造る村であつた(『新編武蔵風土記稿』)。半農半陶、隅田川の西岸川域(上野・浅草側)を中心に、土器・瓦・火鉢・植木鉢などが生産された。

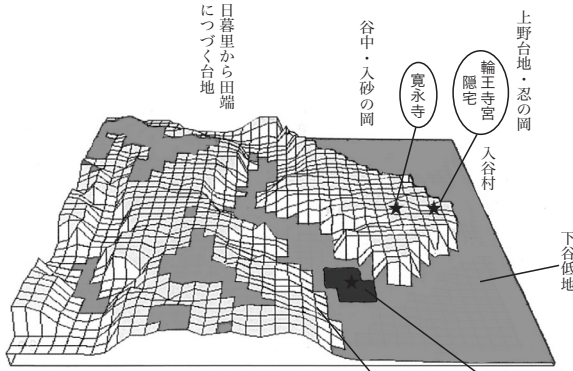
当時、職人は紺屋・鍛冶屋・木具屋・畳屋・石屋・研屋・経師屋・髪結師などが代表である。正保(二六四—一四八)頃から寛永寺を中心に門前町が開かれ始め、下谷・谷中界限には徐々に米穀・炭・味噌・油などの問屋、両替屋・飛脚屋・呉服屋、紺屋・鋳物屋・樽屋などの諸職商人・職人が住まいし、寛文年間(二六六—一七三)には寛永寺御用を勤めた菓子商猪左衛門(受領肥後)、豆腐屋・右衛門、麩屋清右衛門らの名が認められる(『下谷區史』)。延宝頃(二六七—一八一)には「江戸雀」(近行遠通著・延宝五年刊)に「かはらけ町」として麻布一帯、金杉新堀三田臺町・西の久保・四ツ辻(飯倉四ツ辻)などの名があり、麻布・四谷も下谷の内、現在の麻

布台二丁目三番東側・四番、東麻布一、二丁目北部とされる。「土器坂」「土器町四辻」「土器町」などの名も残るが、元禄年間、土器に関しては井原西鶴(二六四—一九三)の『西鶴置土産』(元禄六年刊・一六九三)に浅草北の土人形師、『万買物調方記』(元禄五年刊)には瓦師、土器師を分けて以下のように記されている。

かはら師 浅草門跡前、同 せう天町のうしろ、同 はしほ
かはらけ あさくさ 竹丁 弥左衛門、同 西ノくぼかはらけ町

初期、大名屋敷は山の手周辺を占めていた。対して「下谷」は庶民の住む下町であり、地域は時代によって変化をするが、浅草・本所・上野周辺を本拠地として、南は神田川、北は坂本村、東は鳥越・浅草に接し、西は上野・湯島を限りとし、金杉・箕輪・南千住など台東区一帯が含まれた。元和五年(二六二九)、下谷村名主金子三郎兵衛・恩地惣兵衛が願書を提出、町屋が起るが、商家の出現は遅く、当時商業は日本橋・京橋を中心に発達。問屋・仲買・小売りまでも同所に集中していた。街道の整備、駅路・飛脚の進歩も著しく、さらに物資の供給、物流には船使こそが不可欠であつた。隅田川の沿岸は埋立られ、河岸・荷物の揚場、蔵、卸売りの施設などが設置される。塩・酒・油・野菜ほか、木材・石材、建築資材、多くの物品が運び込まれるが、当時、大坂・江戸間の定期貨物船には菱垣廻船(寛永元年始)、後に樽廻船(享保一五年始)があり、到着した荷は小舟に転積、河岸へと運搬、隅田川の両岸、蔵前・深川・両国などの揚場・倉庫に移された。

隅田川は荒川の支流である。古くは入間川・浅草川とも呼ばれており、北区岩淵辺りから分派して隅田川、浅草辺りで浅草川、駒形辺りで宮戸



上野台地と下谷低地…地形様式図

郡立上野高等学校遺跡調査会編
『東叡山寛永寺福院院』一九八八年参照作成

上野・高台から続く低地。三代
將軍家光時代は未だ蘆草の一面
に覆う谷であったという。

上野台地は、もと岬。室町時代にはその名称があり、歴史は石器・弥生・古墳時代に遡る。下谷低地は、室町期永祿頃の記録に残り、上野に対して生まれた名とされる。寒村であったが、江戸期慶長から寛永年間(二五九六―一六四四)に武家屋敷と寺院が大半を占める地域となる。

上野台地と本郷台の谷底に生じた池とされる。

本郷 湯島天神・向ふの岡

川、両国では大川とも称される。絵図によれば、京都が基盤の目のように整備されたことに比し、江戸は江戸城を中心に円形に広がり、内濠(さとほり)・外濠(そとほり)・運河、上水道、不完全ながら下水道(火消人足分担)、自然の河川も加わるが、水路が重要な役割を果たしていた。上水道には神田・玉川・千川があり、廃止されたが青山・亀有・三田などの六派が開削されたという。

―入谷村―

入谷村は下谷北部に位置している。御府内(ごふない)〔品川・四谷・板橋・千住域内〕の外にあり、豊島郡坂本村内に置かれた村であった。周辺は沼地であり、発展の最も遅れた地域とされるが、入谷村の名主には二葉傳次郎・五左衛門の名が残る。二葉家先祖傳次郎は『天正十九年の水帳』の所持者であった。かつては寛永寺本坊辺りの住人であり、寺の建立に伴い土地は御用地として召し上げられ、坂本村へと転居の由、村名入谷村をそのまま用いたものと伝えられる。入谷は下谷の中の村であるが、坂本村は古くは廣澤村(ひろさわ)と呼ばれており、水田地。寛永期になり寺院建立に伴って拓かれたが、坂本町から浅草までの間、入谷村は元入谷・中入谷・南入谷と拡張され、乾山時代には周囲に日光抱屋敷があるなど、界限には庚申(かの)塚、浄土宗壽壽院・英信寺・良感寺、天台宗嶺照院、曹洞宗正覚寺などが建てられていた。入谷村は江戸末期まで入谷田圃と呼ばれていた。

三、今戸焼と入谷窯

(一) 江戸期の産業

家康は、信長、秀吉らとともに戦国時代を生き抜いた。秀吉没して全

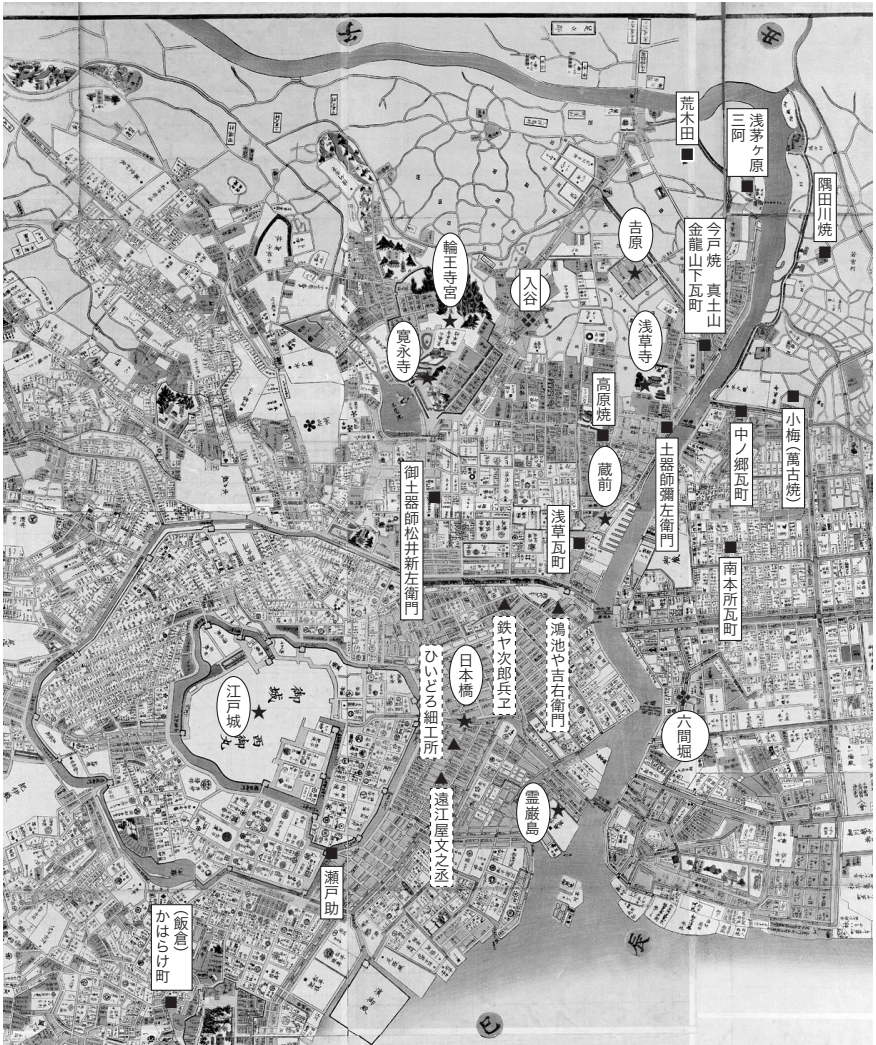
国統一を完遂するが、基本的には戦国大名の一人であり、政策なども多くそれらを継承。将軍と大名による国家統治の機構を整える。

江戸の町は、地方の大名とその家族、関係する人々の集合体であった。東西南北、日本各地から地方人が集まり、全国見本市の如き様相を呈したというが、衣食住、あらゆる面において大消費地として発展する。

「衣」は、衣類から夜具に至るまで、支配者階級・庶民階級の需要に応える。織物、染物、全国各地に絹・木綿・麻織物が出廻るが、絹織物は京都西陣、九州博多が主産地であり、二本の糸を撚り合わせる撚糸よりいとから各地には縮緬ちぢみ生産が始まってゆく。大衆の衣料品は綿織物である。綿作が起こり、摘み取り、繰綿、紡績まで家内工業が主体となるが、手織りの堅機かたはた・居座機いざはたから絹織物には高機たかはたを導入、西陣の技術が地方へと伝播する。糸染め・布染め、染色技術の進歩もあり、農閑期の家内労働は専業の生産者の手へと移る。

「食」は、公家の饗応、禪院しんいんの精進料理しょうじん・食作法を融合した本膳料理は会席料理へと移行。室町末から桃山期、茶事が盛行、懐石料理が新たに始まる。酒宴を切り捨て簡素を旨とし、膳は一膳、飯と汁、采は二、三采とした形式が定着。江戸期には宴会・寄り合いに合わせ懐石は会席・宴席へと転ずるが、流通機構、都市の発展もあり食生活も変化をする。労働力を必要とした明暦大火後には出店でみせが流行り、災害の起こる度ごと煮しめ・煮豆・おでんなどの煮売り・飯めし売り・田楽豆腐でんがく売りが町を往来。飢饉ききんのたびに新たな食物屋が出現した。自由な町人が中心であり、茶屋・料理屋・居酒屋など大衆的な商売が発達する。

「住」は、安定した時代を迎えて建築需要が急増する。侍屋敷、寺社建築、経済力をつけた町人らの町屋敷・別業・蔵・店舗、また長屋ながや・見世物みせもの・小屋こや・遊里あそび・料亭など様々な建築が求められたが、幕府創設当初から設けられた普請奉行ふしん、寛永九年（一六三二）に常設された作事奉行さくじが任に当たる。普請奉行は橋・石垣などの土木を担当、作事奉行は建築部門、後に破損・修繕を担当する小普請奉行こふしんも加えられたが、作事奉行の支配下には大工頭おほい・作事下奉行さくじ・小普請奉行こふしん・豊奉行とよ・勘定役かんだいなどがあり、享保三年以後、工事造作を担当する手大工てだい（町大工）なども加えられる。大雑把には作事奉行のもとに起築、勘定方が吟味し、工事費を支払う仕組みであるが、大工頭は技術官僚の最高位に位置していた。世襲制せじゆせう、筆頭ひつとうは中井家であり、中井正清（一五六五―一六二九）は官位大和守・従五位下、知行一〇〇〇石、畿内・近江を支配し、京都大工棟梁として御所造営・修理などに携わる。関ヶ原の戦の後は家康に仕え、二条城・江戸城ほか、徳川家御大工として多くの建築を担当、工事関係の責任を負うが、工事監督・資材調達には作事下奉行、被官は工事設計・職人の監督。設計・図面作成・細工さいこうは大棟梁おほい・手大工（町大工も加わる）らの管轄であった。大量の需要に応えるべく、資材・部材は規格化へと進み、土地の条件もあるが、建築形式も一定化。基本を柱の大きさにおき、指矩さしむすを用いて用材に墨付する「木割きわり」「規矩術ききよじゆつ」が発達する。戦国時代に陣中の使役であった黒鐵くろてつ者も土木下役に置かれるなど、除草・掃除・荷役などの作業に割り当てられた。



文久改正御江戸大繪圖

文久元年（二八六）刊
カリフォルニア大学バークレー
校図書館蔵図参照作成

◆乾山関係

入谷・六軒堀

■やきもの関係

荒木田・浅茅が原・隅田川焼
今戸焼・金龍山下瓦町・小梅
萬古焼・中ノ郷瓦町・南本所
瓦町・土器師彌左衛門・御土
器師松井新左衛門・高原焼・
浅草瓦町・飯倉かはらけ町・
瀬戸助

▲絵具・材料店

鴻池や吉右衛門・鉄ヤ次郎兵
エ・ひいどろ細工所・遠江屋
文之丞

★地名・寺名

江戸城・寛永寺・輪王寺宮隠
居所・吉原・浅草寺・蔵前・
日本橋・靈巖島

江戸は、江戸城を中心に発展
陸路・海路を軸として武家屋敷
寺院・神社、やがて町家が起立
浅草寺周辺には、やきもの造り
また娯楽機関が発達する。
商業は隅田川を基盤に、日本
橋・京橋・靈巖島など、絵画・
やきもの造りの材料店が軒を連
ねる。大坂からの船便が発着
便宜が計られていた。

(二) 隅田川流域の窯業

江戸在地の窯業は、基本的に家康の入府とともに開始される。建築に伴い瓦造りを第一に、初期においては陶磁器製作の窯はみられない。大規模な江戸城造営、大名屋敷、神社・仏閣、町家造りなど、瓦は屋根瓦、地下貯蔵施設・穴蔵などに大量生産が求められた。

平成一四年、大坂城の発掘調査が行われた。三の丸外側・惣構堀の内側に豊臣時代の瓦窯を発見。形態は中央に燃焼室、窯両側に焚き口のある達磨窯であったが、小判形、瓢箪形の二形があり、生産には大坂城築城に当たり瓦師として活躍した寺島家の可能性が指摘された。寺島家は紀州粉河の出自、天文年間(一五三二―一五五)に三郎右衛門が大坂において瓦造りを生業とした。大坂城はのち家康が修復するが、その折担当した瓦師も寺島家であり、二代惣左衛門はやがて徳川幕府御用達となり瓦屋町に屋敷を拝領、初期江戸城の瓦は専ら寺島家、大坂産の瓦が納入される。三代宗左衛門に至り大坂・京都・江戸の三家に分派、二男三郎兵衛が江戸へと移るが、安永三年(一七七四)『大名武鑑』には「御瓦師本所よこ川丁寺島宗次郎」とある。一方、土器師には「御土器師十五俵二人ふち下谷坂入谷松井新左衛門」の名も残り、松井家は天正年間(一五七三―一五九二)岡崎城主であった家康に従い松井弥右衛門が入府した。『増訂武江年表』(正保二年―四年)には「寺嶋氏某、中氏彦六といふもの、江戸瓦師の元祖といふ」とあり、さらに彦六なる瓦師の存在もあるなど、各々それらの集団が江戸住となり、やがて関東に窯業の根付く土台となる。瓦産地は江戸城東隅田川沿岸を中心に、多摩地域、埼玉地域からも遺物が出土、搬入された瓦に加え、江戸在地製

の瓦が混じる。元和二年(一六二六)二代將軍秀忠は江戸城増築、水害防備のため平川(神田川)の流れを変える。川岸北部には新たに浅草平右衛門、瓦町などが作られたとされ、明暦大火後貞享年間(一六八四―一八)には瓦師は隅田川沿岸地域に集約されるが、防火、土の獲得、運搬などの地の利に従い、浅草、今戸周辺に瓦・土器・陶器造りが本格化する。

1、浅草瓦・土器造り

元和二年、秀忠による町作りに従い浅草に瓦造り・瓦町が成立する(『御府内御考』)。浅草瓦の生産地として最も古い記録であるが、金龍(竜)山下にも瓦町が起こり、金龍山下瓦町も活動する。

瓦造りは大量生産である。大規模経営が基本となり、建築上の需要に伴い発展するが、瓦造りは中国堯・舜時代に始まるという。日本へは朝鮮国百濟(百濟)より伝来。が、飛鳥寺・法隆寺など神社仏閣、宮殿、城郭ほか、久しくはそれら大規模建築に限られていた。平安期には貴族の邸宅などにも使われたが、瓦を敷き詰める瓦葺(かぶせ)は平瓦に丸瓦、軒瓦(のき)を併せて使用。かなりの重量が土台に掛かる。耐え得る支柱・基盤が必要であり、堅牢な建物でなければ適わなかったことが理由である。安易に一般化するには至らなかつたが、信長時代、畿内において瓦師を養成、明人の指導によつて煉(ね)し瓦も造られたという。江戸では一つに建設の進む初期、二つに明暦大火後の大移動期、三つに享保時代吉宗による防火対策などを節目とし、瓦の生産は変動する。

一、家康時代は、大坂城の復元及び江戸城普請に尽力した摂津国天王

浅草周辺の土器・瓦生産 出版物を中心として

一、浅草周辺

①元和二年(二六二六)『御府内備考』(文政八年・焼失した)『御府内風土記』編集に備えた史料・

浅草瓦町起立(浅草蔵前地域)「瓦焼職人有之候に付名付申候由」云々

②寛永一七年(二六四〇)『徳川実記』・『寛永日記』・『寛永一七年三月二日浅草瓦口屋敷より火起り』・『浅草瓦屋敷より出火』

③元禄二年刊(二六八九)『角田川紀行』(隅田河紀行)・
「あさくさ川にのほしけるに岸ちかく舟とめて色黒き男腰たけ川に入つつふけになりて水底の土を抱あげ舟に積るしむあはれなりければ 土とりよなほと冷る秋の水」
「瓦焼けふりは霧にまじるかな 滄波」
「今戸には土をこね 瓦造並べてほしければ やかぬまは露やいと はん下瓦 杉風」
「尚今戸以外に箕輪附近でも土焼のものをつぐ」

④成立年代不明『御府内備考』・
金龍山下瓦町成立「往古当所は瓦焼候場所にて町名に相成候由」
⑤元禄五年刊(二六九二)『萬買物調方記』・
「かはら師浅草門前」
—土器・陶器—
①承応二年(二六五三)『御府内備考』(文政二年成立承応二年撰津国茶碗師高原平兵衛 江戸下向屋敷を拝領窯を開く
②延宝五年刊(二六七七)『江戸雀』・
「前の通廣小路より右之道金輪寺につづきて町 高原やき物有 左も同町」

③元禄三年刊『増補江戸惣鹿子名所大全』・
「諸職名匠諸商人 土器師 浅草竹町 彌左衛門」
「土人形 問屋 浅草かや町 一目ひなや七兵衛」
「江戸外町 一浅草橋通 南は浅草はしり北へ追分まで 此町筋諸職賣物土人形類 瓦屋」
「瀬戸物や 一靈巖島 常盤橋前 御成橋前 浅草まつち山此所に金龍山茶碗焼くなり かやび町」

④元禄三年刊(二六九〇)『人倫訓蒙図彙』・
「土器師 昔賀陽親王作り始め給ふとかや 此の御子細工に妙まるよし古物語に記せり都は嵯峨 簾枝 深草里に作る 大内に捧ぐる時は 烏帽子装束して参るなり 江戸浅草竹町作手弥左衛門 誠に上古よりの器物なり」
⑤(同書)に土器師と焼物師の別がある

⑥元禄九年刊(二六九六)『本朝武林系図鑑』・
「御茶わん師 あさ草門跡まへ 高原平兵衛」
⑦享保二〇年刊(二七三五)『續江戸砂子温故名跡志』・
「藤四郎焼 茶碗水さしの類 浅草聖天」 高原藤四郎 瀬戸助焼 茶碗水さしの類すきやかし 瀬戸助」

二、今戸周辺
①元禄三年刊『増補江戸惣鹿子名所大全』・
「今戸橋 曉かたにハ瓦焼の松葉の匂ひに目さむるやうにおほへて少しは」云々
②享保一七年刊(二七三三)『江戸砂子温故名跡志』・
「今土橋 此片瓦作多し」
③享保二〇年刊『続江戸砂子温故名跡志』・
「今戸 今戸 橋場 本所 中ノ郷瓦師多し」
「器」下谷坂本箕輪 金杉邊にて製之土火鉢 瓦燈 土風呂 土燈籠等の土焼ものいづる 京都稻荷前が」とし
④土器(土器・人形に施補したものを含む) 明治一〇年刊

①天正年間(一五七三—一九二)『工藝志料』(黒川真頼著
「下総国千葉家の族某略」、其の家臣数輩 石浜或いは今戸村に土着し 瓦及び土器を造り以つて業と為す者十

余戸ありしと 而れども其の姓名詳かなず」

②貞享年間(二六八四—八八)『工藝志料』・
「貞享年間 土器の工人白井半七と云う者あり 今戸に始めて点茶器に用いる所の土風呂を製し 又火鉢等の種々の瓦器を造る」
③元禄六年刊(二六九三)『西鶴置土産』・
「思はせ姿 今は土人形 揚屋町の眞砂を 金龍山の眞土に交せて 今は薄雲 高尾が姿を造りて 土人形の水あそび」
「今戸周辺 一文人形を商う店があつたという」
④享保年間(二七一六—一三六)『工藝志料』・
「享保年間 二世白井半七という者 始めて瓦器に釉水を施し樂焼と等しき者を製す」
⑤宝暦二年(二七五二)・
「狛犬一對台銘文「火鉢屋 土器屋 燧煙屋」今戸神社」
⑥宝暦三年刊(二七六三)『風流志道軒傳』・
「今浅草の志道軒 江戸に一人の名物といふべし 故に一枚絵、今戸焼を始とし」

⑦寛政二二年刊(二八〇〇)『風俗通』・
「ちやうど今戸焼のあねさまといふつらだは」
⑧天保五年—七年刊(二八三四—三六)『江戸名所圖會』・
「瓦師 中之郷の辺 瓦師の家多く 是を業とするもの多し」
「今戸には甕(瓦)者陶匠多くありて今戸焼と稱す」
⑨「川柳江戸砂子」(明治五年刊・一八七二)「今土橋 金龍山のみもと入堀にわたす 此邊瓦工多し」
⑩成立年代不明『本道樂焼唐物業秘方全』・
「今戸すへ物土・今戸土器師一瓶」

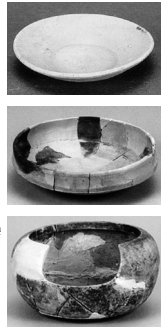
三、その他
①延宝五年刊(二六七七)『江戸雀』・
「左金杉新堀かはらけ町三田臺町へ出る 右西の久保へ道」
②元禄三年刊『増補江戸惣鹿子名所大全』・
「西久保通北は天徳寺前より南へ本札辻まで 西久保かわらけ町貳丁 赤羽三田町 通新町」

③元禄五年刊(一六九二)「萬買物調方記」…「かはらけ西ノ久保かはらけ町」

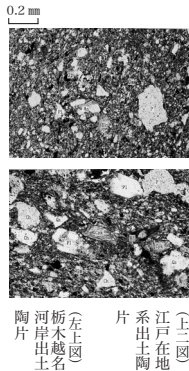
関係事項

- ①「増江戶惣屏子名所大全」(元禄三年刊・一六九〇)…「繪具屋 南傳馬町一丁目 稲野 信濃」「京橋北一丁目 繪具屋惣兵衛」「同所 ゑのぐや市兵衛」「唐物屋 靈巖島長崎町 大平五兵衛」「同所 海老庄兵衛」「同所 片岡與兵衛」
- ②「彩画職人部類」(明和七年刊・一七七〇)…「土器 落の東山深洲の里に多く是を業となす者居れり最上品とす 東都は箕輪金杉のわびしさ 土の軋軋の音かすかに さすがに陶作りといふほどにもあらで あるほどの日雨に並べ在り うらくと陽炎もゆる雨上りの朝景色 鶯の声 なよ竹のまばら垣に そこ窺びたる住居こそ何とやら哀れ深し」
- ③「今様職人尽歌合」(文政一八年刊・一八二五)…「此の頃は素人の樂焼がはやりて 誂へなき 焼き継ぎは窯塞げにてうるさや」
- ④「武藏」日本國誌資料叢書(天田亮著 大正一四年刊・一九二五)…「藤四郎焼 茶碗水さしの類 浅草聖天町 高原藤四郎」「瀬戸助焼 茶碗水さしの類 すきやがし 瀬戸助花林尺八一流の細工古類なし兩國元町花林清兵衛」
- ⑤「江都近在所名集」(安永三年刊・一七四四)…「小梅 竹やのわたしより三めぐりの間 蚊柱の中に小梅の涼臺」「待乳山 聖天宮 見晴しの能き所也 景地 涼しさや船を見おろす待乳山 意和久」橋場 神明宮 今戸の續き 近所北野天神勸請 傾城も交る橋場の生姜市」「浅茅原 總泉寺境内 三谷より橋場へ出づるところ昔しは繁花 傾城の夢は浅茅を駆けまはる」「箕輪 吉原の別荘多し 句體により戀也 梅が香や雪の箕輪に女駕 機夕」「金杉 箕輪の續き 日本橋より千住へ出づる所 奥州海道也」「上野 東叡山寛光寺 元三大師 三日 十八ひ參詣多し 戸の建たぬ駕に吾妻の比叡おろし」

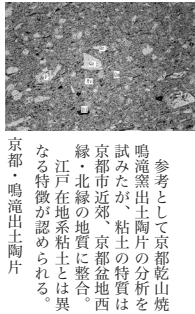
江戸在地系土器…(江戸遺跡発掘調査報告書所収)



カワラケ
ホウロク
風炉
江戸在地系 栃木越名河岸出土陶片
(三六頁参照) 胎土薄片顕微鏡写真



これらは関東地域、江戸出土陶片の胎土薄片顕微鏡写真である。江戸在地系・越名系粘土は火山系岩片の特徴を示し、砂質関東ローム層に関係するなど、隅田川系の河川粘土と考えられる。



京都鳴滝窯出土陶片 胎土薄片顕微鏡写真
参考として京都乾山焼鳴滝窯出土陶片の分析を試みたが、粘土の特質は京都市近郊、京都盆地西縁・北縁の地質に整合し、江戸在地系粘土とは異なる特徴が認められる。

土器は、縄文式土器・弥生式土器・土師器(古墳時代)、黒色土器(奈良・平安前期)・瓦器(平安後期・室町期)など、日本では時代を追って儀式、実用器ほかが造られた。手捏ね、ロクロ成形。基本的には採取した土をそのまま使用、やがて砂・岩石の粉末などを混入、技術・焼成の進歩に伴って変化が生まれる。

瓦は屋根瓦を主体に敷瓦・塀など、百濟の瓦博士の指導に始まるという。地域、時代によっても異なるが、江戸においては家康の入部に関係。江戸城、大名屋敷、寺社、町家の建設など、瓦は大坂からの搬入を第一として、在地 大名家元からの移入もあるなど、文様、刻印ほか特色をもつ瓦が出土した。

土器類も京都・金沢・伊勢・利根川流域などの移入品が出土。それら他国産土器に対し、江戸には在地系土器と呼ばれる一群があった。市中の需要、消費に応え、周辺で生産された土器であるが、隅田川西岸地域を中心に、しだいに東岸地域へと移動。瓦・土器・焙烙・灯明具・人形・植木鉢などが造られた(上図参照)。文化・文政期「江戸名所図絵」には今戸焼の瓦焼成・達磨窯(たまるまろ)土器を焼く煙管窯が描かれたが、達磨窯は左右に焚き口があり、還元焼成、多くは瓦の焼成に使用。いくらか小さな煙管窯は焚き口が一つ、酸化焼成で土器の生産に用いられた。

粘土の分析は、元素成分の比較、江戸都地埋文化財研究所、瀬戸・美濃・京都系と比較、江戸在地系土器の胎土は酸化珪素、酸化アルミニウムの含有量の少ないこと、鉱物片・岩片の顕微鏡観察からは(パリノ)サツウエイ考古学研究室・ウィルソン、江戸在地系・越名河岸系胎土には火山岩石が多く含まれる特徴が示された。参考として京都鳴滝窯出土の乾山焼陶片も分析したが、鳴滝陶片は長石・石英・雲母を多く含み、西日本における花崗岩帯の特質を示す。火山岩石の多い江戸系粘土とは明らかに異なる。

江戸在地系 糸出土陶片(左上図) 栃木越名河岸出土陶片

これらは関東地域、江戸出土陶片の胎土薄片顕微鏡写真である。江戸在地系・越名系粘土は火山系岩片の特徴を示し、砂質関東ローム層に関係するなど、隅田川系の河川粘土と考えられる。

参考として京都乾山焼鳴滝窯出土陶片の分析を試みたが、粘土の特質は京都市近郊、京都盆地西縁・北縁の地質に整合し、江戸在地系粘土とは異なる特徴が認められる。

寺住の御瓦師寺島家。家康に従い三河より下向した「三州瓦」の松井家の活躍がある。一部を除き瓦御用は専ら大坂において製造、舟を以つて江戸へ運ぶなどの手法が取られていたが、時とともに工人らは徐々に土着、やがて江戸のやきもの産業を支える基盤となる。

二、明暦三年（二六五七）、本郷丸山本妙寺から出火した火は江戸城本丸・二の丸・三の丸・天守閣、また市中の大半を焼き尽くした。新たな町作りが必須となり、大名・旗本屋敷、神社、町家、吉原、火を扱う土器師などが大移動を促される。建築資材・部材の需要は一期に高まり、復興には二年余の歳月が費やされたが、市中の六割強は武家屋敷であった。

三、享保時代は大名火消に加え、自衛のための町火消制度が発足する。建築資材、屋根葺きにも燃え易い木材・柿葺に代わり瓦葺が奨励される。瓦葺は従来平瓦と丸瓦、軒先に軒丸瓦と軒平瓦、鬼瓦が使われる。重量のある瓦葺に代わり享保期新たに棧瓦の使用が促されるが、棧瓦は延宝二年（二六七四）近江の瓦師西村半兵衛の工夫と伝承。平瓦と丸瓦を一体化、左右の一方に棧をつけ、表面をうねらせて重ね合わせることを可能にしたが、三都を中心に広く普及。江戸では町人にも拝借金制度が運用され、市街化する都市計画に合わせ、棧瓦の需要は急速に高まってゆく。瓦生産は活気を呈するが、火を扱う仕事である。しだいに市外地への移動を余儀なくされ、土は浅草待乳山（真土山）、運搬は隅田川、窯地は浅草界隈へと、隅田川沿岸に集中する。新たに開く、合併する、いずれにしても窯業は隅田川を中心に発展。元和二年（二六二六）、浅草瓦町が起立、「瓦焼職有之候」（御府内備考）とあり、年代は不明であるが、「あさくさまつち山此所にて

金龍山茶碗やくなり」（『買物調方三合集覽』元禄五年刊・一六九二）とあるなど、金龍山下瓦町が活動。安永年間（一七七二—一七八二）には以下のようにある。

待乳山 聖天宮、見晴しの能き所也。景地、涼しさや船を見おろす待乳山
金龍山 浅草寺観音、三月糺市の市、蘭菜掃いて居わる並木の煮賣廊
力出せ年の市人仁門（『江都近在所名集』安永三年刊・一七七四）

在地瓦は浅草瓦町、金龍山下瓦町（起立年不明）の活動が早く（落合則子著「江戸今戸焼史に関する一試論」、浅草瓦町は豊島郡峡田領のち浅草寺領鳥越村、今日の蔵前辺りとされ、現在の浅草橋一、二丁目、柳橋二丁目に当たるという。金龍山下瓦町は浅草北部、隅田川沿い待乳山・真土山の丘陵地域とされ、聖天宮（金龍山本龍院）、現浅草七丁目を生産地とし、元禄初期の製造が確認される。新たに中ノ郷瓦町、小梅瓦町なども起こるが、江戸の土器産業は浅草一帯に始まり、元禄五年には「かはら師浅草門跡前」「かはらけあさくさま竹町」（『諸国・方買物調方記』・『買物調方三合集覽』）など、瓦師、土器師は別れて生産に当たったことが推測される。

2、今戸焼

「今戸ハ古ヘ今津ト書シ後今ノ字ニ改ム」とある（『新編武蔵風土記稿』）。正保、元禄頃に今戸村とあり、土器産業の盛んな土地であったと記されている。

土器は素焼、釉薬のない低火度焼成のやきものである。縄文から弥生時代に煮炊き・貯蔵用、神饌を盛る器・食器などが造られ、朝鮮から須恵器の技術が伝播し、高坏・瓶・壺、祭祀具・日常飲食器・灯明具などの硬質土器が生産された。一二世紀には瓦造りと分化し、土師器窯に土器生産

が盛んになるが、一四世紀、日本各地へと拡散する。山城国深草・嵯峨・幡枝辺りに土器師集団が居住、朝廷、幕府、神社仏閣の需要に應えるが、東海地方では須恵器を製した窯に近畿産出の土器造りの模倣が起こる。家康の入部以来、江戸には大名・家臣、それに伴う商人・職人らが集住。土器は需要に伴って京都・金沢・南伊勢・利根川流域などからも搬入されるが（梶原勝）、在地では初期、必要に応じ所々において焼成、明暦大火もあり中期以降、防火対策の一つとして隅田川沿岸に集中する。

同沿岸の窯業「土器」には三つの意味が含まれる。土器造り（日常品、瓦造り（建築用材）、陶器造り（茶道具など）である。土器生産は大きく浅草周辺、今戸村に分けられ、陶器は摂津国・大坂から江戸へ下向、浅草本願寺辺りに屋敷を拝領、幕府の御用を勤めた高原焼が挙げられる。高原焼は天明六年（一七八六）水害が起こり窯を閉じ、宝暦年間（一七五一―一六四）向島小梅に沼波弄山が萬古焼を開始、寛政期（一七八九―一八〇二）浅茅が原に萬古堂三世三阿窯、文政三年（一八二〇）向島に佐原菊塙のすみだ川焼、天保一〇年（一八三九）大坂十三からは吉向治兵衛（一七八四―一八六二）が下向、吉向焼が陶炎を上げる。

今戸における瓦・土器生産は、天正年間千葉家臣を創者とする。が、実態は不明であり（『工藝志料』）、今戸焼の名称も元禄期にはいまだみられず、初期においては浅草瓦造りの範疇に入る。

近年二〇カ所及以上今戸焼の発掘調査が行われた。土器・焙烙・瓦などが出土（二六頁図参照）。寛延・宝暦頃から植木鉢・焼塩壺・灯火具が多くなりみられるが、硬質瓦質の火鉢・焔炉、今戸神社に奉納された宝暦二年（文

政五年再興）の狛犬台座（阿型・呷型）銘文には「火鉢屋・土器屋・炮烙屋」「白井善次郎・岩本多郎吉・永嶋伊之吉」「浅草新堀」などがあり（関口広次著「隅田川沿岸の窯業」）、今戸及びその周辺の生産者、生産品目が確認される。

『角田川紀行』（杉山山風著・元禄二年・一六八九）には、

あさくさ川にのほしけるに岸ちかく舟とめて色黒き男腰たけ川に入うつふけ
 になりて水底の土を抱あげ舟に積 世のわざといひなから秋の風身にしむ
 比水にひたりくるしむあはれなりければ 土とりよなにはと冷る秋の水

今戸には土をこね瓦造並べてほしければ やかぬまは露やいとん下瓦 杉風

とある。陶工・人夫が腰まで水に浸かり隅田川の土を採取、それを用いて瓦を製したことが窺われるが、今戸村では天正年間（一五七三―一九二）瓦・土器生産を業とした十余戸の存在があり（『工藝志料』）、貞享年間（一六八四―一八）には白井半七（生没年不詳）が土風炉を製し、享保年間（一七二六―一三三）二世半七が薬焼を始め、工人らがそれを倣い食器を製するという。都市の拡張に伴って需要も増加。土器・焙烙・瓦造り、一八世紀後半には土人形が人気を集めるが、器種別の專業化が進行、窯場は今戸村、中ノ郷瓦町へと集約される。

二〇一〇年、入谷遺跡の調査結果が報告された。入谷焼の胎土分析は今戸焼にほぼ同一（小俣悟著「第4章総括」『入谷遺跡下谷二丁目1番地点』）、粘土は亀戸辺の荒木田土（『下谷區史』）、浅草付近の七つの丘中待乳山（真土山）土などの説があり、荒木田とは三河島村の字、荒川に沿う荒木田原に産する赤色粘土。粘着力があり、壁塗り、瓦葺きの下地に用いたと伝承する（のちには煉瓦の原料になる）。待乳山は「真土山」、真の土・本物の土を意味するとされ、瓦生産には隅田村・木下村・四ツ木村・若宮村の粘土が使われ

たという。明治期、人形造り尾張春吉の話によれば、同一五年頃今戸橋付近の粘土は濁湯、川向かいの隅田村辺の土、金町、柴又辺り、古くは岐阜多治見の土の使用もあつたとされる(安芸種子著「掘り出された土人形」)。

土器造りは皿・鉢・壺、また焙烙・植木鉢・塩壺などを主とし、個人経営、在地における製作が基本である。他所から運び込まれたものもあるが、土器は消耗品、多用されることもあり、地域粘土の使用が一般である。厳しい土の選択はなく、江戸では家康の入府を契機として同地に発展、中世近畿土器の伝統を継承したものではないとされる。神供具・日常品が主体であり、成形は手捏ね・ロクロ・型の使用のほか、焼成は低温による酸化焰焼成を基本とし、短時間で焼き上がる小規模窯、焼き口一つの煙管窯が使われた。持ち運びのできる内窯も使用されたが、瓦生産には還元焰焼成窯の両側に焼き口を設けた達磨窯が用いられた。

3、高原焼

土器・瓦造りの一方、浅草では陶器造りが開始された。

藩御用、陶工の移動は、寛永中頃(一六三四—三八)尾張徳川家に仕え、御深井焼に関与した陳元寶(生没年不詳・元和七年頃渡来、福岡藩黒田氏関わりの高取家が早い例である。幕府御用の高原焼には諸説があるが、

一、創始者は肥後国山本郡高原郷出自の高原平兵衛(のちに藤兵衛『武鑑』)。肥前三川内窯の陶工、大坂・摂津国に赴き高原五郎七の弟子となり、五郎七没後高原を名のる

二、同じく高原郷出自の藤兵衛(茶碗商人高原伊十郎先祖)が慶長末期に

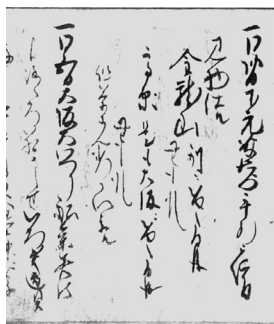
摂津能勢において高原焼を創始。承応二年(一六五三)、普請奉行・四代将軍家綱茶道師範片桐石州(貞昌・一六〇八—七三)の推挙によって江戸へ下向(『工藝鏡』)。浅草本願寺辺りに七七四坪余の屋敷を拝領、領内二間半×五間半に窯を築き、御本・呉器・半使などの高麗茶碗を製し、幕府の御用を勤める

三、慶安年間(一六四八—五二)、高原市左衛門が摂津国末吉橋辺りで作陶。二代平三郎が承応年間(一六五二—五五)江戸へ下り、二年後には摂津に戻るが、招請によって市左衛門が江戸へ下り、御茶碗師を勤める

などがある。判然としないが、久右衛門・五郎七・市左衛門など陶工名も残り(大橋康二著「高原五郎七から江戸高原焼と瀬戸助焼、そして本遺跡出土の主要な陶磁器」)、茶会における使用は『隔莫記』『三菩提院御記』に茶碗・香炉・皿など、『森田久右衛門江戸日記』(全図参照)には延宝六年(一六七八)十月四日、金龍山窯とともに高原窯の見物記が認められる。

金龍山・高原焼見物記

『森田久右衛門江戸日記』丸山和夫著『東洋陶磁』第五号(一九七五—一九七八)



(延宝六年十月四日)

一 同四日下元藤右衛門手引被仰付見物仕ル

金龍山 別二替たる儀

無御座候

高原 是も大坂二替たる儀無御座候

但茶碗三式つかい参ル

『江戸雀』（近行遠通著・延宝五年刊 一六七七）は「浅草廣小路より右之道金輪寺につづきて町、高原やき物有」と記し、浅草広小路周辺に屋敷のあったことを伝えるが、天明六年（一七八六）水害に遭遭、窯は破却し、摂津国へ帰国したと記している。高原町、高原屋敷として知られ、現在の台東区寿二丁目辺りと推測されている。

貞享から享保・元文年間、隅田川を挟み寛永寺・浅草側に今戸焼（今戸村）、高原焼（浅草広小路辺）、乾山焼（入谷村）。元文年間（伝承）川向こうに小梅村の萬古焼（宝暦年間ともいう）、寛政期（一七八九—一八〇二）浅茅が原に萬古堂三世三阿窯、文化文政期（一八〇四—一三〇）に向島百花園に隅田川焼が起こる。

元禄期、將軍綱吉は御庭焼を試みた。瀬戸の陶工を招き城内吹上苑に窯を築いたとされるが、時移り、武家、富裕町人を中心として、江戸では即興を妙味として席画、席焼などが流行する。職人仕事に数寄者・文人らの趣味・趣向が入り込むが、やきものでは絵付・釉薬掛け、窯入れから火加減、窯出しなども体験できる。経済力を手にした町人らは自らの知識を顯示、折からの庭焼・席焼、翫事がその後押しをするが、楽焼は慰焼と『百工秘術』にある。秘技・秘伝、陶技・陶法、その他の蘊蓄は暴露も始まるが、大衆文化の交流も盛んな折柄、材料屋、絵具屋なども活躍、書・画・陶、各々に素材や用材、手本を揃えて店頭に並べる。親方の傍らにあり修業を積む必要もなく、即席に作者・製作者の楽しみを得るなど、オランダ人に製法を学ぶビードロ・ギヤマン（ポルトガル語）の応用も成果を發揮。小規模な内窯は持ち運びも可能、素人間に低火度焼

成、楽焼が盛行する。「此の頃は素人の樂焼がはやりて詠へなき 焼き繼ぎは窯塞げにてうるさや」（『今様職人尽歌合』文政八年刊・一八二五）とあり、素人陶芸が人気を集める。

4、入谷窯

入谷窯の実体は不明である。土地の産物として土器造りが知られるが、乾山入府以前の記録は乏しく、詳しいことは解らない。が、安永三年（一七七四）『大名武鑑』には「御土器師十五俵二人ふち下谷坂入谷松井新左衛門」。文化文政期『新編武藏風土記稿』には、

土俗村内ヲ樂シテ入谷ト唱ヘリ 農隙ニ専ラ土器ヲ造ル 是ヲ入谷土器ト唱ヘ土地ノ産物トス 村内ニ土器ヲ御用ヲ勤ル松井新左衛門ト云モノ住シ 又日光御門主ノ職人仁右衛門ト云モノ居リテ 専ラ土器ヲ造ル

とある。幕府御用を勤めた松井新左衛門は、家康に従い江戸入り後、御用を勤め三州瓦を製した松井家と推測、当時は上野長者町から入谷に移転をしたか、変わりなく幕府の御用を続けていた。日光御門主御用の職人仁右衛門も入谷住。文化文政期、乾山没後も入谷村では御門主御用を勤める工人が活躍していた。

乾山時代には久作（『陶器傳書』）の名が知られる。

元文二年九月佐野における庭焼に際し、素焼の皿、筒形・杉形茶碗、香合・火入（左頁想定図参照）、白粉、内窯などを大川頭道に調達した陶工である。久作が乾山と同じ窯場の工人かは解らないが、遺跡からの出土品に「山」に「久」印のある陶片がみつかった。

下谷二丁目1、2番地の発掘調査では、一九世紀前半の地層からは変

『陶器傳書』(大川顯道著)・入谷村久作への素焼下地注文想定図

「元文元年巳九月乾山初而在野へ罷り下り候節すやき下地 江戸入谷村久作方へ誂候」



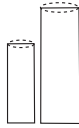
筒方茶碗
(大小四六)



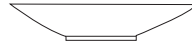
こかし入
(八)



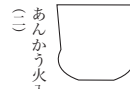
杉形茶碗
(三三)



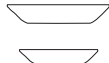
かづら立
(同小五)



大丸指見皿
(四二)



筒型火入
(二)



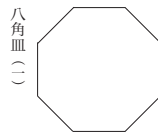
中土器(五〇)
小土器(三〇)



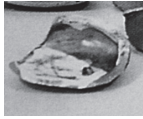
水次(一)



こうぼ(七)



八角皿(一)



鮑貝形変形皿・実測図



白化粧掛碗蓋
(玩具)



白化粧掛徳利(玩具)

形皿が出土した。佐野における乾山焼色絵松桜図鮑貝形皿に類似、同種の皿はさらに千駄ヶ谷五丁目遺跡、旗本小林家屋敷地土坑内からも出土するなど(中野高久著「入谷遺跡2―2地点出土の施釉土器について」、乾山の得意とした色絵具、白化粧の掛け分けがあり、その名残りを窺わせる。

乾山焼二代には入谷村次郎兵衛の名が記録に残る(乾山世代書)。入谷村の庄家・窯主の一人であったが(推定、乾山の死を懇意の医師(立林可昂か)を通じ寛永寺坊官進藤氏まで伝えた人物である。「初代口述二代筆記」とする乾山陶法を書き残すが、同陶法書は請われて三代乾山宮崎富之助へと渡る(同書奥書・古画備考)。富之助妻「はる」は酒井抱一へ、そこから西村貌庵、三浦乾也へと伝世するが、文化文政期、抱一筆の大沢永之宛書状によれば入谷村の陶工に多三郎の名が認められる。乾山は枇杷が好きであったことも判明するが、以後、入谷窯の消息は途絶えてしまう。

享保二〇年、下谷・坂本・箕輪・金杉辺りの窯場では火鉢・瓦燈・土風炉などの土器を製していた(『続江戸砂子温故名跡志』)。浅草寺界限は寺を中心に、高原焼、入谷窯、今戸窯が活躍、互いに徒歩で往来可能な距離にあった。享保一七年乾山は、佐野庄大川顕道へ絵具の秘伝を傳達、「白繪具一主薬拾五匁 高原白土也」と記している。乾山自慢の白絵具であるが、京都時代は豊後赤岩村白土を使用。江戸では高原白土を選択したか。

幕府御用を勤める高原焼は高麗茶碗の製作にすぐれていた。高麗茶碗に白土は不可欠、土の吟味にも長じたものと推測するが、素地は自作・他作に拘わらず用いるとした乾山は、現存作品に照合、顔料、素地ほか種々の顔料を江戸においては入手のし易いものに変えている。高原窯と

は往來のあったことを推考する。

入谷、坂本に關し『江都近在所名集』（安永三年刊）には以下のようにある。

入谷 坂本より大音寺前へ出づる所、土器師あり

掛箱の下に入谷の土轆轤

早乙女の中を入谷の豆腐賣

坂本 上野の下 入谷の手前

百姓もある坂本の町はづれ

俳句には「土器師」「土轆轤」の語がある。入谷村の日常、上野の下・坂本村の町外れの百姓家など、まさしく入谷村は同地域において最も発展の遅れた地域であったことが想定される。入谷村は坂本町に挟まれていた。今戸焼、高原焼、入谷窯があり、時代を追って川向こうに萬古焼小梅窯（伊勢土が基本）、浅茅が原に萬古堂三世三阿窯、向島百花園に佐原菊塲の隅田川焼（東龜）が陶炎を上げる。他国からは陶工らも入府、近在には傾城吉原があり、下谷地域は文化人・趣味人、教寄者陶芸の発生の地となった。好事家・素人陶芸が流行、乾山焼陶法も知られてゆくが、文政期『今様職人尽歌合』（文政八年刊）には「此の頃は素人の樂焼がはやりて」などと詠じられている。商売として、教寄者陶芸として、乾山の目指したやきものほどもに功を奏すが、京都では猪八が商いに励み、乾山焼を続行する。土産物にもなっており、東山の諸窯においても模倣が盛行。世上に出廻り、多くは乾山焼として流通するが、今日残る玉石混濁の作品群が結果である。初代乾山は江戸に住し光琳二世として絵画を描き、やきものを造る。個人作家の領域であるが、乾山晩年の生き方を伝え、教寄者・文化人陶芸の魁としてその役割を果たしたこと

が認識される。職人仕事に興味者へと歩を進める。芸への道、近代の足音が聞こえてくる。

乾山の入谷窯時代は京都時代の総復習である。

猪八に後を托し、京都出張店の意気込みはあるとしても、新たな様式、利益を上げるなどの目的はなかったものと考ええる。経験を活かし自ら造り、自ら愉しむ。粘土も工人の居処近辺の土を良しとするなど（『陶工必用』『陶製方』）、気負った所は少しもない。生産を案ずる必要もなく、時に応じ、事に従う工夫を説くが、求められて佐野にも赴き、陶法書も認める。

八一歳、最後に残した作品は、和歌十躰・鳥丸光廣卿の和歌短冊皿である。書を得意とした乾山の真髓を伝えるが、成形は手造り、歪みもあり削りも不充分。が、書の力強さと呼吸の正しき、乾山八年の思いを陶工として考案した白・黒・色絵具、これらの要素こそが次代に來たる教寄者陶芸に引き継がれるものであったが、まさに後世、乾山焼の特色として記録されるなど、色彩への関心も高く、陶工でありながら、陶工で終わらなかつた誇りが伝わる。

文人は別して書を大事とした。心の発露、書は自らを律する所から磨かれるが、独照禅師の公案はここにおいて完結。自ら飛び込み、心底深く潜む神龍を手中に修める。人中の龍、非凡の人の意にもなるが、形式ではなく、技術の巧拙でもない。自由人、のちの教寄者が継承しながら、受け継ぐことのできなかつた部分である。様式上の模倣にとどまらない。

乾山入谷窯・高原焼・今戸焼の位置関係 地理院地図を原作作成



上段図は、今日の東京都台東区である。やきもの産業は、江戸期江古城界隈の需要を中心に発展したが、やがて寛永寺、浅草寺、隅田川を控えた浅草及びその南方へと移行する。大雑把には一七世紀末期迄は武家中心、一八世紀には町人中心、一九世紀にはさらに個人の求めも加わり、隅田川焼・浅草が原三阿茶など、活発化。乾山時代は土器・瓦生産のほかに幕府御用の高原焼、今戸焼、入谷窯など、やきもの造りには浅草寺周辺、ほぼ三角形に位置して陶煙を上げる。下段図は、入谷遺跡調査一次・二次、下谷一丁目・二丁目の簡略図である。「やきもの屋敷」とされた位置を想定、幕府御用を勤めた、御土器師松井新左衛門「屋敷ではなかろうか」と推測坂本・入谷村周辺・乾山碑



東都下谷絵図(文久二年・一八六二)をもとに作成

乾山焼を会得するには乾山にならなければならない。少なくともその精神に触れることが求められる。作品は作者の表徴である。後世の乾山焼に書のない理由に結びつくが、書を陶器に表すことはむづかしい。書家の書ではなく、その人物の筆である。作者個人が剥きだしになる。乾山模倣の困難さが立ちほだかる。

出土品の胎土分析によれば、入谷土器の粘土は今戸焼にほぼ同じである。江戸在地系土器の類いであるが、江武の土は所によって性弱く本焼には適さない。乾山は京都・瀬戸・信楽・志戸呂焼の土を求めよと述べるが、内窯焼は元来火勢柔弱、器物の破却も無く、何国の土も使用可である。土質により成形後に高台内など亀裂が生ずるが、それを防ぐ手立として京都では山科藤尾石を混入、江武では房州産の砂を混ぜることを勧めている。南京・阿蘭陀・肥前様式など、本焼物に彩色・絵付を施す場合は素地は自作・他作を論ぜず応用するが、書・画を描くための拘りもあり、自己発明と誇りをもつ絵具を用いる。伝統的な孫兵衛伝・内窯絵具にはビードロ(白玉)が入らない。一流として乾山は白・黒、一部の色絵具にビードロを加え、紙絹同様、陶面の書・画、地塗りなどを自在にする。白を基盤に桃色・鼠色・薄柿色・薄萌黄色・薄浅葱色なども創案するが、江戸・佐野作品には惣地塗りの技法がみられ(惣地塗りは猪八作品に多く残る)、紺に緑を加えた二藍絵具、緑色に白緑を混ぜた濃緑色にも工夫を施し、絵画用の顔料にも注意を払う。上葉は伝統的な孫兵衛伝に終止。それを薄く掛けることこそ乾山焼の秘伝であったが、絵画の風趣を損なわず、色絵具の落ち着きを計るなど、これも乾山という細工・

焼方上手の孫兵衛あつての技であった。

乾山焼の特色は形状にも現れる。床の間にあり、意義を正し鑑賞する書・画作品は、畳の上、手の上へと移されたが、掛物・巻物・帖物などの体裁は、角皿・額皿・筒茶碗・火入などの特殊な形態となつて趣を変える。書画に適した釉薬・絵具の考案。陶面を紙絹に見立てる上葉の調合調整、如何に紙・絹に近づくか、如何にしたら陶面の書・画の効果を高められるか。白化粧を施すことはその工夫の根本であり、土色を消し、ざらつく表面を滑らかにする。何より裝飾を引き立てるための最上の工夫であつたが、のちの陶法書が証左となり、これこそが教寄者陶芸の関心事となる。顔料の調和と独自の配合、白絵具は惣地塗り、画面の仕切りや部分塗り、絵具としては文字書き、彩色として花卉などにも活用される。作品の種類と趣向、技法上の見事な融和が乾山焼の特色である。書・画・陶一体の妙味を実現。京坂における文化人らの興味を招くが、やきもの師として茶の湯の盛行にも心を留める。異国・本邦の写しものに関心を払い、当時流行していた兄光琳の意匠文様、古典を基調とした文様を転用する。裝飾・表現上の概念に捉われず、大胆かつ繊細、思う所、好しとするものに心を向けるが、それを可能にした技術技法こそ鳴瀧窯の二大陶工、仁清焼二代仁清、押小路焼孫兵衛の熟練した技と経験であつた。

乾山は仁清家より同家の秘伝を譲り受けた。孫兵衛からは口授を受けた。それを伝える乾山焼陶法書は後の陶法書類の先駆けとなるが、私見・私案を交えたその見識は、内容・形式・書法において別途の風格を具える。

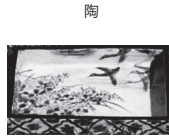
江戸における乾山の活動 — 絵画とやきもの —

① 絵画と乾山焼

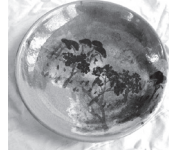
乾山は、晩年、江戸に住した。享保中頃からのことであるが、土器製作を専門とした入谷村ではやきものを造り、俳諧仲間と交流。光琳二世を名のり、絵師としても活躍する。門人には立林何吊(生没年不詳)があり、光琳三世を継承するが、光琳人気は正徳から享保期へと継続。みやこの風趣、軽妙な連筆、減筆による象徴的な光琳画は、江戸においても興味をもって迎えられた。

乾山焼の主要装飾の一つであったが、江戸では読本・戯作、浮世絵、歌舞伎などが流行していた。俳諧・茶会・能鑑賞会ほか、寄り合いには席画、席焼、自らそれらの作業を愉しみ、技や知識を披露する。周囲には、俳句を作り、画を描き、やきもの造りを試みるなど、吉原名主、本所の俳諧仲間などが顔を揃える。輪王寺坊官らとの交流は如何であったか。

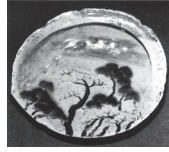
一つに光琳への興味と人気、二つに文化人らの趣味と実技、江戸の乾山は、京都とは異なる歩みに特色をみせる。



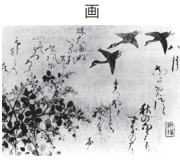
定家和歌四月皿



夏木立皿



松桜図鮑貝形皿



定家和歌四月図



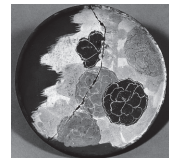
秋山図(部分)



梅松図



夕顔図茶碗



立葵図皿



夕顔図



立葵図(部分)

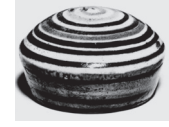
② 絵画・陶における色彩の活かし方

絵画は席画、やきものは席焼が中心である。専門絵師ではない乾山画は、陶器の絵付を基礎とするが、鳴滝時代の代表作「定家十二月和歌花鳥図」は江戸において二カ月の画帖となる。総体として小作品が中心であり、書と画、同じ図様・構成・色彩など、多くは陶からの応用とも云える(上段図)。

立葵図は光琳画から乾山画、乾山焼の装飾へと繋がるが、席画様式は夕顔図にもみられ、古典『源氏物語』「夕顔巻」茶碗は、和歌を伴い、古典の風趣を捉え、闇夜に緑葉、白絵具による夕顔花を描く。色彩への関心は、装飾の色調に顕著。文様は簡潔、誇張、最小の描写にして最大限の効果をねらう。素地は入谷村ほか他窯の下地の活用が考えられる。

③ 本所長崎町と佐野越名河岸の作陶

独楽香合(数点伝世、模倣作品含む)は、白化粧地に黄・黒・赤・緑・青絵具が使われた。高台底には「於長崎寓居」とあり、地名を記した一例である。長崎町は本所にあるが、乾山は晩年六軒堀筑嶋屋坂本米舟の長屋に独居したとある(古画備考)。入谷村はその避難先と推定するが、晩年芭蕉の栖となった場所でもあった。梅蘭水仙図火入は、乾山佐野滞留中、大川頭道庭焼における作品である。白素地上に緑・黒・青・紫絵具、窓紙、緑文様、釘彫りを施すが、京都「平安城・華落」を写し、江戸入谷村に落ち着き、本所・佐野を巡るが、松尾芭蕉は旅こそ活きる道と定めていた。年齢とともに人はその終息所を考える。



独楽香合・白化粧上、黄・黒・赤・緑・青絵具による装飾。「於長崎寓居」



梅蘭水仙図火入・白素地上に、緑・黒・青・黄・紫絵具を用いた絵付・装飾。「佐野天明留連日」



梅蘭水仙図火入・白素地上に、緑・黒・青・黄・紫絵具を用いた絵付・装飾。「佐野天明留連日」

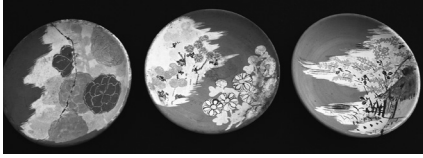


梅蘭水仙図火入・白素地上に、緑・黒・青・黄・紫絵具を用いた絵付・装飾。「佐野天明留連日」

陶工のこだわり
白化粧・口縁・縁文様

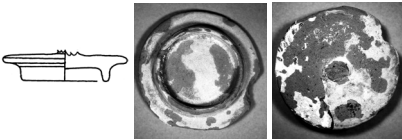
① 白化粧

栃木県佐野市越名河岸は、明暦年間
完成という(鈴木泰浩他著『越名西遺跡・
越名河岸跡』。時には二〇〇隻以上の船
が停泊した河岸と伝承。大川氏、松村氏
とともに乾山を佐野に招いた須藤氏は、



①赤土素地上の白化粧

蓋部分(赤土素地に
白化粧を施し、上に絵
付) 栃木県越名河岸
跡遺跡

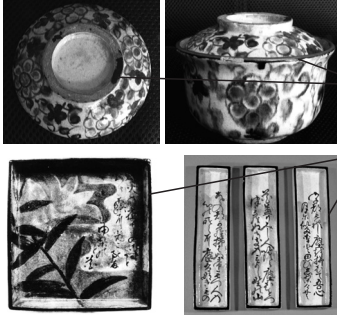


鈴木泰浩他『越名西
遺跡・越名河岸跡』
栃木県教育委員会
一九九六年刊

古く同所の船代官を勤めた家柄であった
という。元文二年(一七三七) 乾山の訪
問時には酒・醤油の醸造業を営むとある
が、須藤杜川は乾山から「三十六歌仙和
歌集」を贈られた。俳句入りの夏木立図
歌集も作製し、ともに庭焼を楽しむが、
当地における作品は窯の不具合か、調節
の不手際か。焼成に難がみられ、素地は
赤色(入谷土器)、白化粧を施すが、絵具
の発色に不十分さが残る。

未焼成の作品には、白化粧土、苔屋に
萩・菊・立葵を描いた皿が伝世する。色
絵具は桃・緑・黒・赤・紫色など、図様
は京都時代の装飾に重複するが、白化粧
に変化があり、月・梅花・山道などに掛
け分けた装飾は、惣地塗り・刷毛塗りな
どに限定、意匠・文様との繋がりもみら
れない。

②「黒上葉」の口縁

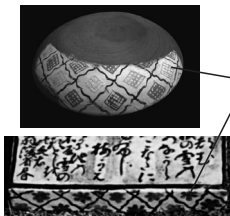


② 口縁と縁文様

乾山焼か否かは不明であるが、越名
河岸跡遺跡からは白惣地塗りに色絵具
の残る陶片が出土した。口縁は口紅
もいるが、乾山焼では碗・皿などの口
縁に黒絵具を塗る。が、袖下ではなく、
袖上黒絵具であり、乾山焼の特徴とな
るが、素地との密着は悪く剥げが生ず
るなど、火の調整に問題のあったこと
を推測する。

縁文様も、新たに立湧格子文様を加
えるが、格子内は梅か楓か、手描きで
あり、時として土器皿、火入を飾る文
様となる。二代仁清、孫兵衛ほどの優
れた陶工がおらず、江戸の乾山焼は自
作自筆、多くは乾山一人の手に懸かつ
たろう。京都時代の総復習、が、八一
歳、最後に残した作品は書が中心、得
意の和歌を書いた短冊皿であった。

③「網目」縁文様



寺院との関わり

乾山自筆書状は別として、寛永寺門跡・輪
王寺宮公寛法親王と乾山を直接結びつける資
料は見当たらない。が、公寛法親王後継者・
公遵法親王には宝暦二年(一七六二)三月四
日八つ頃(午後二時頃) 浅草寺に御成、御土器
師新左衛門ら数人を召して靴を上覧、夜食後
還御したと記録が残る『浅草寺日記』。身分・立
場を越えた自然な交流が窺われる。

蕎麦図茶碗は旧毘沙門堂蔵である。「於東
叡肇寺」とあり、上野寛永寺、輪王寺宮との
関わりを証するが、坊官進藤氏は毘沙門堂坊
官も勤める家柄、進藤勝任は『陶工必用』
の受理者と推測、陶芸への興味を考える。
浅草寺には享保年中、乾山造一〇〇個の数
茶碗が伝世した(如電箱書。乾也、乾哉の模
作もあるが、詳細は不明である。



浅草寺数茶碗
浅草寺蔵



大槻如電箱書
三浦乾也模作



四、乾山陶法の拡がり

(一) 陶法書・伝書の行方

真の意味における乾山焼模倣は困難である。技^{わざ}のみが問題となるのではなく、書を用いたことにより、様式模倣のみに留まらないことが明白になるからである。「書を装飾に活用する」、容易なようであるが、筆の心得、陶法技術、意匠化するセンスが求められる。書は人間性を如実に表す。試みるほどに困難さに気づき、それ程の技量があれば自らの作陶に専念すればよいのではないか。終局其処に行き当たると、趣味人は違うのである。過程が愉快、造ることが面白い、結果はそれなりの出来で構わないのである。模倣をする、試みる、秘伝とするものを入手する、そこに密かなよろこびを見出すのである。

乾山焼陶法の初の伝播、数寄者陶芸を試みた人物は栃木県佐野の素封家大川顕道ではなかつたか。手控『陶器傳書』には「乾山焼秘傳武^{しん}ぶち申来ル」とあり、乾山焼の釉薬（上薬）と絵具の調合が記されている。上薬は基本的な唐土と日の岡石、絵具は赤・黒・白・紺・緑・黄色・紫・薄赤・藍・濃緑色の一〇色であるが、元文二年秋乾山を佐野に招き、内窯焼成・庭焼を試みる。材料を誂るの必要もあり、手控には江戸在の絵具・材料店、両国橋吉川町鴻池や吉右衛門、としま町式丁目北がわ鏡や次郎兵衛、遠江屋文之丞、びいどろ細工所などの名がみられる。出版物『樂燒秘箋』、『百工秘術』、『和漢語道具古今知見鈔』などの抜萃書写もあり、知識を積み上げさらにそれを実践。書を書き入れたものは見当たらない

が、巻末の記録「京都本家樂燒黒薬之法」によれば、乾山の避けた黒薬茶碗の陶法を突き止めるほどにやきもの執心、興味の深さを窺わせる。乾山陶法を用いた数寄者陶芸家初の人物かと推定する。

陶法書は京都において二代乾山猪八も書き残した。写本『陶器密法書』が伝世し、跋文によれば弟子清吾へ与えたもの。清吾はそれを乞われて萬古焼の創始者沼波弄山に譲渡するが、本焼関連の事項はなく、内窯・樂焼を主体とし、初代乾山の記さなかつた成形・寸法・吹子などが語られる。色絵具にビードロを入れることも特色であり、交趾風・物地塗りの技法が多くみられる。（初代乾山にも内窯用として錦手絵具の改変がある）

乾山関係の陶法書は、大きく初代乾山、二代猪八、その他乾山焼として上薬・絵具を記したもの、乾山名を記さず伝としたものに分別できる。

1、初代乾山系陶法書

江戸後期、文政頃、乾山の内窯陶法は古いものとみなされていた（『樂燒傳好古樂記』他）。伝統的な孫兵衛伝による釉薬・絵具の調合であるが、ビードロを用いないことを古いと表した。古物に見せたい時には好いともあるが（『樂燒藥方』）、のちの乾山風陶器に書のあるものは少なく、絵画的描写も稀である。流れやすく、明度の低い絵具の使いにくさ、即興・即席には不適であったことなどが判断される。時代の需め、江戸という新興都市の風潮、甞ぶ人々の修得困難な技法であったことも関係しよう。が、一体に乾山の内窯陶法は、好事家・素人陶工には格好の技法であった。低火度焼成、色絵具の新鮮さ、阿蘭陀写しほか異国趣味が興味の対

象。乾山は江戸に数寄者陶芸の基盤となる技術、風趣を持ち込んだ最初の人であろうが、流行にはすでに刊行された『樂燒秘囊』に手懸かりがあり、読後にはその実践へと誘導される。材料店には粘土・材料・顔料が揃っていた。問えば手本も、師匠の縁も手に入る。江戸後期は文化、芸術、娯楽が一つに結合、情報網の進歩もあり、居ながらにして欲するものが手に入る。寄合・集会、多くの同好者が顔を合わせ、彼らは粹を超えて互いに知己、瞬時にして事態は他者へと伝播する。批評眼も旺盛であり、書物に学び、知識も豊富。大名家でも句会・詩会、庭焼・席描などが流行、各々その道の専門家が参上する。余波は全国へと波及するが、西鶴は元禄期に、はや俳諧などは下女にも及ぶと述べている。町人文化は江戸が中心、都市では簡便・簡潔、「手っ取り早い」ことを第一に、やきもの造りも土捏ね・成形・裝飾も手間が掛からず、短時間に焼き上がる内窯陶法が求められた。数寄者陶芸は、公家・武家・町人へと及び、秘伝・秘薬として甦び、「極秘」もそれらの娯楽の内に秘められていた。

今日明らかになる陶法伝書は、寛文八年「上々御樂帳次第」（高取焼）、色絵では元禄三年「酒井田柿右衛門家伝書」（有田焼）が早い。乾山陶法はそれに次ぐが、元文二年二冊の陶法書が著された。京焼の祖押小路焼、京焼に典型を築き上げた仁清焼に遡るが、「みやこ」の陶芸を伝え、土・釉薬・絵具の原料・調合・活用方法などを公にする。好事家らは出版物を買い求め、陶法書を探り、財力は知識の蓄積、技法の伝播に貢献するが、自ら愉しみ、窯を設けて実践する道が開かれる。

乾山の陶法書は久しくひっそりと姿を隠した。が、入谷村には二代乾

山次郎兵衛がおり初代の口述を筆記する。三代へと渡り、やがて人の知る所となつてゆくが、『陶工必用』もやがて趣味人・俳人（推定）『陶煙居』水上蘆川の手へと渡る。他方、京都でも二代乾山猪八が陶法書を認めた。弟子清吾から萬古焼祖沼波弄山のもと、猪八伝書も江戸へと向かうが、江戸では初代乾山、二代猪八の陶法がともに出廻る。秘書・伝書は自己・自流の正当化には必要であろう。が、内窯陶法は素人間に流通、秘伝は言葉、技は経験、ともに語られるものの一つとなつて伝承する。

①『陶工必用』（乾山自筆・大和文華館）…元文二年（二七三七）三月五日成立。乾山自筆。仁清伝本窯・押小路孫兵衛伝内窯・乾山一流の陶法を纏めた一冊。受理者は不明。印「勝任」により上野奥御用人輪王寺宮家坊官進藤周防守勝任、同じく印「矢田陪氏」によつて同家坊官矢田陪豊前守へと渡り、水上蘆川の所持となつたか。

②『陶磁製方』（乾山自筆・鐵竹堂瀧澤記念館）…元文二年九月一日・二二日成立。乾山自筆。仁清・孫兵衛・乾山一流陶法を纏めた一冊。宛名はないが、同年ともに庭焼を行った佐野の素封家大川頭道へ与えたものと推考。頭道へは享保一七年内窯釉薬・絵具の調合を伝え、庭焼はその五年後のことである。

③『陶器傳書』（大川頭道筆・鐵竹堂瀧澤記念館）…享保一七年（二七三二）九月廿二日（乾山書状日付）。大川頭道著。武州より届いた乾山の内窯陶法、上葉・絵具の調合を書写した頭道手控。乾山自筆伝書二冊とは同じであるが、分量の配合に微妙な相異。江戸における絵具屋・材料屋の住所、その他出版物からの書写が認められる。

④『内竈秘書』（合冊本『樂燒秘傳・好古樂記』筆者小林源兵衛・『内竈秘書』筆者乾山省古か・近藤安治郎写・東京都立中央図書館加賀文庫（冒頭図参照）…合冊本表題は『樂燒秘傳・好古樂記』である。『樂燒秘傳・好古樂記』：「色藥代銀積」・「智術全書之内磁工門之部十器秘傳書」・『内竈秘書』以上四部から成り、筆者は藤垣爐扇・俗称小林源兵衛。「好古」なる人物に陶法を学び、自ら記して秘書としたが、好古老人は俳諧、書・画の妙手、樂吉左衛門隱宅手代紋右衛門に樂燒陶法を学ぶとして、以下のように記している。

好古樂記

好古老人二道を聞 学ひ 俱二燒試たるおもむき左にしるす

好古ハ京都五條烏丸通り下ル町 樂燒師家元吉左衛門隱宅 手代紋右衛門と申ものより傳を得て燒始 夫らさまく工風して妙を得たり 是を好古金といふ

最終に編された「内竈秘書」が「初代乾山口述三代筆記」とする陶法書写本である。二代乾山次郎兵衛から三代宮崎富之助、富之助妻はるから酒井抱一、西村貌庵、三浦乾也へと渡り、関東大震災に遭遇、焼失したとされる江戸・乾山焼内竈陶法（上葉・絵葉の調査を纏めたものである）

末尾に「明和三丙戌年七月廿四日近藤安治郎写之」とあり、明和三年（二七六）近藤安治郎が書写。後方別紙には「干時宝曆十年（二七六）七月乾山省古花押」とある。年紀・筆跡などから推測、二代筆記と考えるが、内竈掛葉・絵葉は凡そ大川顕道筆③『陶器傳書』に一致。乾山の趣味者向け低火度焼成の秘伝であるが、内容・年代・花押の形状などを『古画備考』、次郎兵衛の名を「乾山世代書」に確認、「乾山省古」とは初代乾山を意識した二代次郎兵衛の意か。「初代口述二代筆記」の書者と推定、初代乾山の陶法を伝えるものと判断する（當紀要五一号、二〇一九年刊）。

2、二代乾山猪八系陶法書

①『陶器密法書』（萬古堂三世三阿跋文・国立国会図書館）…乾山焼二代猪八陶法書の写本（筆写は喜之か）。寛政四年（二七九）五月萬古堂三世三阿（生没年不詳）の跋文があり、内竈陶法を中心とし、上葉（釉葉・絵具、初代乾山の語らなかつた成形・寸法・樂燒に關する事項が中心。弟子清吾に与え、清吾から萬古燒沼波弄山、三世三阿へと伝来。猪八は京都聖護院門境に工房を設けていた。清吾は猪八晩年の弟子と推定するが、伝書の内容、説明から陶工ではなく、趣味者に属する人物かと考える。

三阿はやきもの間屋萬古堂三世。萬古燒三代目であつたが、陶工、俳人でもあり、俳諧仲間の記録によれば趣味・教寄者の陶器造りが窺われる。安永・天明・寛政頃には隅田川を挟み、小梅村に萬古窯、今戸村淺茅が原に隠士三阿が窯を設けた。至玄（乾山秘書）と称し、俳号は梅山居・三阿亭。向島花屋敷すみだ川焼の佐原菊場とも知己であり、『墨水遊覽誌』（佐原菊場著）には三阿のやきもの、淺茅が原に關し、以下のようにある。

安永の頃（中略）此となり萬古燒の三阿住て、風呂の小板を燒て、藜太へおくる云々（中略）淺茅が原といへる所にて、人めさへかれてさびしきゆふまぐれ、あぢがはらの霜をわけつ、

三阿から風炉用小板を贈られた大島藜太は、芭蕉追悼・顯彰などに力を尽くした夏目成美（二七四九—一八一七）の俳諧仲間。成美は「俳諧独行の旅人」を自負、「夏目成美年譜」（石川真弘著）天明・寛政頃に次のように認められる。

淺草末三阿亭に遊ぶ、梅山居にて浙江追善の茶会が催され手向けの吟を寄せる。
三阿和上の幽扉をおどろかす、三阿法師のわび住まいに終日遊ぶ

三阿は和上・法師などと呼ばれていた。俗を離れた一面をみせるが（作品

は藍絵水指など)、『陶器密法書』跋文にも「浅茅生隠士」とある。

②『乾山秘書』(筆者不明、推定佐野宗達・針生乾馬家)・成立年代不明。内容は猪八伝書『陶器密法書』に同一。末尾に但書と「佐野宗達真義・花押」。別紙を貼り付け表紙には「他傳不許乾山秘書、裏表紙内側に「三浦乾也門人杉山陶古千年竈乾馬」とある。両者の筆跡は相違し、表紙・裏表紙内側の書は針生乾馬筆、伝書と但書は佐野宗達筆ではないかと推考する。従来の乾也所持の陶法書とすれば、今回発見した二代次郎兵衛筆記の内容とは同一でなければならない。が、猪八伝書に同じくし、伝書模写の巻末には佐野宗達真義筆・花押がある。佐野宗達は初め「根津傳心庵」に師事、師の没後、「萬古三阿至玄」に習うとあるが、傳心庵が誰なのかは不明、「三阿」は『陶器密法書』跋文を書いた萬古堂三世三阿であろう。地理的にも近く今戸村浅茅が原に窯を設けており、佐野宗達は「御教寄屋坊主」にその名がある(『文化武鑑』六)。同一人物か否かは確認できないが、「宗達」は初代と子息の二代があり、初代は寛政一年教寄屋坊主となり寛延二年没。二代は嘉永四年教寄屋坊主見習(三六歳「由緒書」、元治元年(二八六四)まで奉公しその後の消息は不明となる。三阿との関わりは父子ともに可能であるが、「根津」は姓か地名か、地名とすれば下谷の内、三阿とは近在であり、さらに俳諧仲間との関わりは如何であったか。針生乾馬(二八二一九五)との関係では二代宗達ということになる。御教寄屋坊主は「御城坊主」(幕府の役人。表向の御用に当たる「表坊主」、奥向「奥坊主」、道具関係・城内、大名の世話に当たる「御教寄屋坊主」、將軍の靈廟管理などを担当する「紅葉山坊主」)に分かれていた。身分は武士。法昧の必要はなく、制限

のある江戸城中を自由に往来。代々の家職、世襲であったが、御教寄屋坊主は茶事関係の専門職。茶道具管理、將軍の飲茶、溜問たまりのまなど大名の詰所における世話、喫茶御用、茶壺道中の責任を負う。大名家への出入りもあり、推定ながら宗達はその一人、茶道具類に造詣深く自らも作陶経験を積むなど、当時同じ下谷であった根津に住し、師とした傳心庵の没後は三阿に師事。三阿からは伝書の書写を許されたものではなかったか。同じ俳諧を趣味とした乾馬はそれを入手。乾也所持の伝書ではないことが判明する。

③『乾山樂燒秘書』(筆者不明、国立国会図書館)・成立年代不明。岡山文庫(埼玉県大里郡吉見村字青山)旧蔵、昭和六年、青山根岸家から国会図書館に寄贈された。内容は①『陶器密法書』②『乾山秘書』に同一、書風も『乾山秘書』に近似し、同手、同時期と推測する。貌庵筆「乾山世代書」とともに乾也門人乾昇が根岸家に残し、「乾山世代書」は埼玉県史編纂委員稲村担元によつて善養寺に寄与されたと伝えられる。

④『本竈井内竈乾山秘法』(筆者不明、元東京美術研究所)・成立年代不明。内容は既述の猪八伝書三冊(『陶器密法書』『乾山秘書』『乾山樂燒秘書』)と同一。脇本築之軒旧蔵(旧東京美術研究所蔵)、東京藝術大学図書館蔵と伝承。が、同図書館に見つけることが出来ず、原本は未見であるが、蔵書印には「静勝文庫」とあり、文化文政期、掛川藩五代藩主太田備後守資始すけもと(二七九九—一八三四)の文庫と推定する(大名と教寄屋坊主、入手経路は如何に)。

⑤『伊八乾山ノ薬法ノ直書』(『すみた川花やしき』)・成立年代、所在ともに不明。佐原菊場きくば(一七六一—一八三三)所持の陶法書であるが、文政三年(一八二〇)五月、向島「百花園」に隅田川焼を開窯するに当たり、道具具商・

目利であった芳村観阿（二七六一―一八四八）から譲られたという。直書であれば『陶器密法書』の原本かとも考えるが、向島は洪水・大震災・空襲に遭遇、陶法書の所在、筆者・内容ともに不明である。隅田川焼に關しては『墨水遊覽誌』に以下のようにある。

小梅村、今戸村、瓦師おほし、瓦の名物也、又寺島村、隅田村の百姓家にて、ほうろく、火鉢のすやきを製し、賣ひろむること年久し、すみだやきといふ。また花屋敷にて、乾山流の陶器を製し、賣ひろむ。都鳥の香合、あるひはさかづき、あるひは茶わん、すみだ川やきといふ。すべて此邊の陶器は、あんこうがまにて製す。

隅田川の兩岸には瓦師が多く、その一村に「寺島村」「年久し」とある。寺島家は家康時代に大坂から下向した瓦師の一族、村名ともなったか、瓦師業を継続、土着、隅田川沿岸の窯業を支えたことが窺われる。すみだ川やきは商標であった都鳥の香合をはじめ盃・茶碗などを焼成、「あんこう窯」を使用したとあるが、あんこう窯は単室、焚き口一つ、天井に煙出しの穴をあけた素焼用の窯である。京都に多く、開窯に尽力した尾形周平・清水六兵衛ら京焼陶工の協力を示唆するか。

菊場は剃髪、観阿も三四歳を以つて出家をしたが、両者の交わりは文化元年、松平不味（二七五一―一八一八）の茶会に同席（『不味公茶会記抄』）。観阿は浅草に住していた。菊場に加え、「浅草村末住」浅茅が原三阿との関わりなどは如何であったか。猪八伝書の入手に何らかの關係はなかったものか。

―「光悦より空中より乾山伝来の陶器製法」（『梅屋日記』）―
例外であるが、乾山所持とある所から加えている。所在、内容ともに不明であるが、文政三年隅田川焼開窯に当たり菊場が所持。光琳百回忌

に際し抱一の命によって上洛（文政二年）、光琳庶子養子先小西家より受理した一冊である。同書を携えて即京焼陶工尾形周平（二七八一―一八三九）の門を潜るが、周平は同書を読み乾山に私淑。菊場とともに江戸へ下向、隅田川焼開窯に尽力する。

3、その他の陶法書

江戸期から明治期まで、手書きの陶法書は五〇点ほどが現存する。年代、筆者不明のものが多く分類はむずかしいが、形式は単冊、単冊を書き纏めた合冊本に大別。総体として伝書は一つに高取焼「上々御業帳」、有田焼「酒井田柿右衛門家文書」など専門的な内容・知識、地域の窯業者・窯元などに受け継がれた陶法、二つに京焼關係伝書のように陶工らが記録し所持、他所へ伝えた技法・調合書がある。

ここでは乾山關係を基準として披見した陶法書類を三系統に分別したが、
一、樂焼系・樂焼秘囊（享保一八年刊・二七三三）など既刊書物を参考にして、
茶の湯に用いる樂焼茶碗などの製法を主とした数奇者伝書
二、木米系・中国様式他写し物の製法を主とし、奥村頼川・青木木米・欽古堂龜祐・真葛長造など後期京焼陶工に關係する伝書
三、その他・赤膚焼など藩御用などに關係する奥田家の伝書ほか

内容に重複があり、共有する技術・技法は内窯・錦窯、掛葉（上葉・袖葉・繪葉（絵具）の調合、器形と色彩・その変化、歴史・背景、賞翫する特色）についての興味に絞られる。陶法書を蒐集、書写した人物、茶の湯者・趣味人らの関心事を反映するが、乾山陶法以外の書にも乾山名は現れ、

乾山と称し全く異質のこともあり、どのように乾山が理解され、受け入れられたか。伝統的な内窯焼成は樂家と乾山家の二系統に絞られる。

樂焼は低火度焼成、軟質の施釉陶器をいう。桃山期、茶の湯の用に適うべく創られた樂茶碗に代表されるが、利休没後に急速な広まりをみせ、焼成方法・陶芸技法の名称ともなる。手捏ね、素地は厚く多孔質、唐土・日ノ岡石・白玉を合わせた釉薬を基本とする。

一、乾山名のある陶法書

①『錦齊集』（筆者大塚白鷺齋宗貫・書写信政齋信爲か・文政七年一八二四・合冊本の成立明治三〇年・東京国立博物館…『白鷺齋』流傳、樂焼極みつの法）「樂焼藥秘方」を含む。炭を用いた窯、焚き方、乾山略伝、阿蘭陀様式への興味が示される。

②『樂焼秘傳』（筆者大塚白鷺齋宗貫・成立年代不明・都立中央図書館加賀文庫…白鷺齋は不明。原本は玉水焼陶法書であるが、玉水焼は樂一入庶子一元に始まり、加賀大樋焼などと同じく脇窯として山城国玉水村に開窯した。当書はその三代任土齋弥兵衛から白鷺齋へと伝えられた陶法を基盤とするが、樂焼窯図、葉法、乾山焼では白絵具に注目。生がけ・素焼後、その他乾山の指摘した「ちぢみ」に関する注意がみられる。

③『樂焼藥秘方』（筆者朝比奈・内一冊は寛保三年銘記・明治二年一八六九・東北大学図書館狩野文庫）…『本籠樂焼之法赤樂』『本燒樂燒上藥合様秘書』『樂燒藥秘方之書』『今燒合樂之次第』を含む。朝比奈氏の詳細は不明。

④『樂燒藥法家々之傳書寫 なんきんいまり焼付繪具藥法集書』（筆者・成

立年代不明・東北大学図書館狩野文庫）…『七寶樂傳』『別家之法』『いまりなんきん焼付藥法』『窪田傳上繪藥法』『二俣樂藥別法』『遠山傳』を含む。

⑤『樂燒秘傳』…（筆者難波雜喉場樂燒師李兵衛・成立年代不明・国立国会図書館蔵）…『難波樂燒秘書』『樂燒口授秘書』を含む。雜喉場は雜魚場・魚市場とされ、堂島米市場・天満青物市場と並び大坂三大市場の一つであったが、雜喉場（誤読か）と樂燒師李兵衛との関わり、李兵衛に関してもよく解らない。『樂燒秘囊』の抜萃書写、樂燒系釉薬とその調合、名家として光悦・乾山・宝山（粟田口焼）「手紙の写」として作陶者の問いに対する返答を記すが、上絵具、白地と紺絵、雪白などの乾山事項、売買されている日ノ岡石に関する注意・見解も示される。

⑥『千家樂燒古實附陶器出処書完』（筆者・成立年代不明・東京国立博物館）…『今燒合樂之次第』『樂燒藥法』『千家樂燒古實』『陶器出処附』『本籠樂燒之法赤樂』『本燒樂燒上藥合様秘書』を含む。窪田助左衛門・小高文貞・小幡佐五郎の名がある。

⑦『樂燒方書完』（筆者・成立年代不明・東京国立博物館）…『樂燒方・圭齋傳』『樂燒之方書・常吉兵衛』『樂燒秘囊上』（樂燒樂并諸道具）抜萃書写を含む。

⑧『繪藥・釉薬配合帳』（筆者・成立年代不明・三田市教育委員会）…『繪手本控』『呉州赤繪下繪帖』とともに三田焼資料の一冊である。乾山焼に関しては釉薬・絵具、その他欽古堂龜祐、尾形周平伝など一二項目から成るが、成立は天保頃か。

⑨『陶工秘囊』（筆者不明・大正四年刊一九一五・『雜藝叢書』第二所収）…筆者不明。大正四年刊。朝倉無聲・三田村鳶魚編『雜藝叢書』所収。樂焼は茶

の湯に必須のやきもの、陶工以外に雅致ある楽焼を志す人のためとある。

二、乾山名のない陶法書

- ① 『樂燒秘書電圖附』(筆者飯塚宗助・文化三年一八〇六・ピーボディ・エセックス博物館)・樂吉左衛門判、樂家の秘事・秘伝を記す。赤・黒二法は殊の外秘するべく理を述べるが、押小路伝、樂焼伝は根源を同じくすることも分明する。
- ② 『樂燒諸傳』(筆者渡邊政挙^{また}・原本一部松田秀徳・文政六年一八二三・天保七年一八三六・京都府立京都学・歴彩館)・『樂燒秘囊上』抜萃書写・「尚友齋」心庵樂燒傳法」・「樂燒田邊弥三郎傳來樂法」・「石野佐次右衛門樂燒法」を含む。
- ③ 『樂燒藥方』(筆者・成立年代不明・京都府立京都学・歴彩館)・小高文貞蔵。江戸川区天台宗最勝寺には小高文貞碑があるが、同一人物か否かは不明である。樂燒、唐物業の調合があり、古物の風趣には白玉を入れずとあるなど、孫兵衛・乾山焼内窯陶法は古いとみなされていたか。
- ④ 『本竈樂燒唐物業秘方全』(筆者・成立年代不明・京都府立京都学・歴彩館)・「井上氏傳書」・「深川江戸記」・「加藤氏書拔」・「國勝傳書」・「榊原玄順ノ留」を含む。
- ⑤ 『秘術巻』(筆者成立年代不明・京都府立京都学・歴彩館)・『樂燒藥之法傳』・「極秘傳」を含む。絵具一色につき数種の調合例を記載。幕末の特徴を示す。
- ⑥ 『友古樂燒』(筆者友古・成立年代不明・都立中央図書館加賀文庫)・「友古」とあるが、詳細は不明。窯図を大きく扱い、ふいごを用いた黒樂燒成を基本とする。
- ⑦ 『陶器燒附画工秘傳新書全』(筆者江藤時太郎・明治一七年刊一八八四)・維新後西欧を手本として日本には種々の分野に西洋思想・理論・技術が流入。

政府は他国の技術・技能を知り、自国の実力を試すべく博覧会への出品を試みるが、バリ(一八七八年)では日本陶器が世界一等の評価を獲得、此一書を学ぶことにより「瀬戸の藤四郎たらん」とある。編者江藤時太郎、叙は作家梅亭鷺叟(金鷺・一八二二―一九三)、明治一七年の刊行。

三、専門陶工による陶法書・その他(乾山名は木米関係にある)

素人陶芸、趣味者・数寄者に伝承した陶法書ではなく、専門陶工の記録である。多くは手控形式であり、製作に関する原料・顔料、それらの試作も含めるが、具体的かつ専門的な内容に特色がある。欽古堂亀祐など指南書として著したものもあるが、基本的には筆者の知識、経験を披露。主体は当時流行の煎茶趣味に基づく中国陶磁の製法、居所である「みやこ」の陶法が基盤となる。陶工は求められて江戸、地方へと指導に向くが、それも特徴の一つであり、陶法書の伝播に大きく関わる。

① 『陶器手録』(筆者青木木米^{もと}・文政元年一七七八―一八二四・神奈川県立歴史博物館)・青木木米(二七六七―一八三三)著、真葛家に伝来した木米陶法書(手控)であり、同家における加筆、封印の跡があるという。木米には古器を模写した図帖、刊本『天工開物』『佩文齋書畫譜』などを書写した抄録なども残るが、真葛長造(一七九七―一八六八)は真葛焼の創始者。木米窯の陶工としても活動し、知恩院宮門跡から「香山」号を受理、同号は長造四男虎之助が継承し明治期横浜に香山窯を開く。

当書は木米の伝える所、異国・和物写しに関する土、釉薬、絵葉の調合例が中心、原料の製造方法、型物成形に関する技法を記述する。乾山関係

では「乾山青花畫釉日本乾山明爐所燒倣西洋之畫釉」「赤繪釉仁清乾山」他、野紙欄外に「乾山黒藥」「仁清乾山所燒之紅色釉法」「乾山生瀬石云々」などとなり、京焼仁清、乾山に触れる。木米は「僕モト陶人ニ非ズ」と述べ、南曲も描き、中国初の陶磁専門書『陶説』（朱琰著）を読み陶工を志したと伝聞。中国陶磁器・知識に刺激を受けて陶への道を進むとされるが、高芙蓉、寶山文蔵、京焼磁器の祖奥田頼川（二七五三—一八一二）との子弟関係が伝承。文化二年（一八〇五）青蓮院宮御用を勤めて「粟田陶工」となり、紀州、翌三、四年、加賀藩の招請を受け、春日山中卯辰山に新窯を築き作陶指導に当たる。金沢では大火が起り、窯は藩宮から民営へ移行するが、木米は帰京、春日山では陶工松田平四郎（元寧・馬末）が窯主となり青磁・染付・赤絵・色絵などを製作。平四郎は木米陶法を『陶器總録』に纏め、文政年間には、木米も陶法を集成、『陶法手録』はその一部である。

②『陶器總録』（筆者松田元寧・文化五年一八〇八・追加同二年一八一四・『平安名陶傳木米』所収…表紙に「文化五年戊辰中夏改控」、裏表紙に「金陵陶工松田元寧懷書」とある。木米門下松田元寧（天保五年没）著、元寧は字、名を平四郎、号を馬末・帝慶斎と称し、本来の職業は筆屋であったという（脇本十九郎著『平安名陶傳』）。金沢城二の丸を焼く大火に遭遇、民営となった同窯元として活躍するが、文政初年頃には廃窯。当書は松田家伝来、写し物の調査を中心とし、「古赤繪九谷之方」「金審イマリ寫赤繪ノ方」「火二入ル心得之事」他、「乾山」「仁清」の窯話め、乾山の白・紺青絵具に関する事項がある。

③『陶器指南』（著者欽古堂龜祐・文政一三年刊一八三〇）…欽古堂龜祐（二七六

五一—一八三七）は文化・文政期の京焼陶工。本名中村龜助、伏見人形を造る「丹波屋」に生まれ、奥田頼川に師事。摂津三田焼・丹波篠山藩王地山焼・南紀男山焼・瑞石焼などにおき作陶指導に当たる。「染焼を試みるもの、その精を得る者少なし」（可亭道人識）とあり『陶器指南』を刊行するが、自らの体験を集成。盛行していた中国文化、文人趣味に鑑み、中国磁器を中心にと土・絵葉・釉薬、形状・装飾、窯と窯入、用具に関し具体例を図に表し解説をする。『茶道指南』を書写したものに『陶器樂草』（茶館庵主人）がある。

④『陶器樂草』（原本黒川巢、茶館庵筆者義方・天保三年一八三二・嘉永元年一八四八・国立国会図書館蔵原文庫）…原本は天保三年（一八三二）、書写は嘉永元年（一八四八）。著者茶館庵・黒川巢、友人馬淵市右衛門所持の写本『陶器指南』を借りてそれを書写。龜祐・仁阿弥（二代高橋道八）木米に学び、当書には「予が力に非ず。秘して家蔵とするべきもの」とある。幕末の国学者雨森（櫛原）芳野家蔵、蔵書印「櫛原家蔵」は雨森芳野家、写者の義方は不明である。

⑤『彩色繪具皆傳』（尾形空仲子相傳）尾形周平伝・加集家・天保五年一八三四）…著者尾形周平（二七八—一八三九）は空仲（中）を号とした。文政三年（一八二〇）、佐原菊庵の江戸向島隅田川焼開窯に尽力するが、菊庵所持の二冊の伝書「光悦より空中より乾山伝来の陶器製法」「伊八乾山ノ藥法ノ直書」を承知しており、尾形姓は尾形乾山、号空仲は本阿弥空中を心を留めた故の号であったか。珉平への陶法伝授は清水焼五条坂の彩色絵具である。珉平（二七九六—一八七二）は文政六年島内池之内村に白土を発見、珉平焼を創始。やがて周平を招き作陶訓練、周平より「彩色絵具皆傳」を伝授された。

⑥『本多佐兵衛所持日記』（筆者本多佐兵衛・天保七年一八三六頃）…京焼百年の

歩み」所収…本多佐平（佐兵衛）は五条坂の陶工。天保年間の活動が知られる。五条坂は栗田口と並び当時京焼様式を二分する窯場であったが、同記には木米古赤画・周平古赤画・道八仁清黒など、清水周辺五条坂の陶工名がみられ、周平が珉平に伝授した彩色絵具も五条坂の陶法である。佐平、周平は同時期の陶工である。

⑦『樂焼之口傳控帳并二石焼』（筆者奥田木白・天保六未五月ヨリ同八西五月改）・『家傳覚書』（木白口述子息佐平衛筆記・嘉永三年一八五〇―慶応元年一八六五頃まで）・『樂焼之口傳控帳并二石焼』は天保六年（一八三五）同八年改。奥田木白の自筆伝書（縦二〇、二寸、横一六、二寸）である。釉薬の調合、土の配分、焼成方法などを具体的に記すが（高橋隆博著「赤膚焼奥田木白の陶法書」、嘉永三年から慶応元年頃（一八五〇―一八五頃）にはそれを原本とし、木白口述、子息佐兵衛筆記『家傳覚書』が纏められた。

木白（一八〇〇―一七二）は屋号柏屋から「木」「白」、炭間屋・質屋を業とした大和郡山藩の御用達商人であった。名は武兵衛、天保六年（一八三五）頃から樂焼を始め、幕末から明治初期にかけて赤膚焼の陶工として活躍する。

赤膚焼は遠州七窯の一つであった。奈良市西郊五条山に始まり、鎌倉末期には土器火鉢を生産。南都興福寺を中心に、火鉢座・十器座・瓦座が結成されていたという（『多聞院日記』）。今日の赤膚焼は、寛政年間（一七八九―一八〇二）京都から移住した京焼陶工治兵衛らの陶法を基盤とするが、京焼風趣を継承、能楽の舞手を図柄とした奈良人形絵・奈良絵が評判を得る。⑧『赤繪師南』（著作・筆画福原播舟・天保五年刊一八三四）…筆者福原播舟は俳人と推定。内窯陶法・樂焼に関する釉薬・絵具、絵付の手本を掲載する。

⑨『南條治郎左衛門相傳陶器秘傳』（陶器秘傳考録）…筆者不明。

むすび

近世日本の陶磁器は、生産の拡張ばかりではなく、関係する情報を拡大させたことにも特色がある。一つに陶法書・伝書の広がりがあり、陶家はもとより広く素人陶芸家・趣味者の興味を呼び起こす。

陶法書・伝書は陶家に伝承するものを基本とする。早い例では一七世紀、陶家による『上々御藥帳』（高取焼）、『酒井田柿右衛門家文書』（有田焼）があり、技術と知識を中心に父より子へ、師から弟子へと相承される。殖産事業、藩による規制も厳しく、他者に洩れることを恐れるなど、家伝を守ることは必須のことであった。一八世紀頃から情報は専門家・陶工以外にも広まり始める。近世社会では「知識」も商品である。公家は権威・名誉・字問を売り、武家は武芸、寺社は神仏を売る。師匠が出現、茶の湯、能・謡、書・画、詩・歌などの文化・芸能も趣味として広められるが、やぎもの造りもその一つ。専門陶工から素人作陶家へ、陶器製作のための粘土・釉薬・絵具の調合や配合法などが呈示される。

作陶法は一八世紀から広まり始める。手引書として、『百工秘術』（一七二四）『樂焼秘囊』（一七三六）が出版された。私的には手書陶法書、尾形乾山の『陶工必用』『陶磁製方』があり、両者は対象者を部外の人物、趣味者・素人においたことに共通性がある。『百工秘術』は江戸、『樂焼秘囊』は大坂において出版、乾山陶法は江戸、佐野において纏められ、同地における趣味人らの手へと渡された。京都では二代猪八も伝書を著すが、手書の陶法書は、

仁清家秘伝 …… 二代仁清から乾山(『陶工必用』)

『陶工必用』 …… 乾山から進藤勝任・矢田陪(推定)・水上蘆川

『陶磁製方』 …… 乾山から大川顕道(推定)

『内竈秘書』 …… 乾山から二代次郎兵衛・三代宮崎富之助・酒井抱一・西村貌庵・三浦乾也

西村貌庵・三浦乾也

『陶器密法書』 …… 猪八から清吾・沼波弄山・萬古堂三阿

『樂焼秘書竈圖附』 …… 樂吉左衛門(九代了入)から飯塚宗助常秀

『樂焼秘傳』 『錦齋集』 …… 玉水焼三代任土斎から大塚白鷺齋宗貴

など、各々に以上のような経路を辿る。基本的には陶工から部外者、素人作陶家へと伝承するが、他方、窯業地京焼陶工から地方の陶工へと伝播した道程もあり、背景には文化・文政期における藩窯・御庭焼の広がりがある。

『陶器手録』 …… 京焼陶工青木木米の加賀国春日山行と陶法

『陶器指南』 …… 京焼陶工欽古堂龜祐の摂津国三田行と陶法

以上を一例とするが、京都五条坂に青木木米、欽古堂龜祐が現れた。御庭焼、藩窯拡大、煎茶ブームに起因、陶工から陶工へと技術の情報が伝播する。木米著『陶器手録』は上葉・絵具の調合が主体、龜祐著『陶器指南』は図を活用、明確な陶法情報を組み込むなど、窯業地から地方窯・地方の陶工へと作陶秘伝が伝えられる。時代の求めもあり、趣きは煎茶趣味、中国明末清初期の陶磁器へと移行するが、一九世紀、江戸には独自の变化が認められる。文芸の風潮は韻文に流れ、全国的に俳諧が流行。門流として貞門・談林・蕉門などが生じ、俳人たちは「系譜と組」、属する系統と同好会を形成する。絵師酒井抱一も俳諧に執心、生涯俳諧を伴侶とするが、光琳頭

彰・光琳画を江戸に復興、弟乾山に関しても墓所の発見、記念碑設立、『乾山遺墨』の刊行など、伝書・書物・作品類を蒐集、乾山系譜作成の糸口をつくる。吉原の名主西村貌庵はそれを継承、相伝の一部として陶法書『初代口述二代筆記』を加え、『乾山世代書』を著した。一方、やきものを主題として俳句・漢詩を添えた『赤繪指南』なども刊行、情報の集積を主体として、相伝の意識は徐々に遠ざかる。

幕末・明治期には複合伝書、単冊を独自に集成するなど合冊本が多くなる。陶法書は手控形式、情報は内容より量を重視する傾向に転化するが、素人から素人へと「素人伝」が始まり、資料の収集には江戸後期の「好古家」活動の影響を推測。好古家は古い器物、事物に関心を寄せる武家・町人・国学者らの集まりであった。使用如何に関わらず、珍しく興味深い調査・配合(かやり・キズ隠し)を収集。伝書からは「伝」とする陶工・作陶者の名は消え、代わってブランド銘、樂家歴代・光悦・仁清・道八などが現れる。絵付陶器の道標には乾山焼が立てられるが、専ら素人間では樂焼製作。専門陶工は中国陶磁器・交趾焼など、内窯用絵具に白玉(ビードロ)を入れ、それらの調査・配合を記した陶法書が流通。明治期は海外との比較によって技術・様式を顧みるなど『陶器燒附画工秘傳新書全』が一例となるが、大正期は個人主義の萌芽もあり、伝統芸能の復活とともに再度素人陶芸が注目。近代陶芸の先駆者バーナード・リーチ、富本憲吉らが活躍する。

陶法書に共通する内容は、本窯・内窯釉薬、限定された上葉・絵葉の種類と調査である。技術は単純、何ゆえ多くの同類書が書かれたのである

ろう。価値は技術のみにあるのではないことに気づくが、一八世紀、やきもの造りは陶工ではなく部外者・著者から、読者・素人へと技術の「報道」が活字化された。窯業地ではなく、江戸、大坂からの刊行に示唆があり、楽茶碗に心を寄せる多く茶の湯者らの関心が呼び起こされた。

が、乾山の陶法書は、専門陶工から素人へと向けられた初の伝書である。一つに京焼本流を受け継いだ乾山焼、二つに尾形乾山個人の表現とその陶法を完成したこと。職人として、文化人・数寄者として、その両域に旗印を掲げるが、提供された情報は多く後世の作陶者らの指針となり、併せて二代乾山猪八も陶法書を著すなど、乾山焼の内窯陶法は趣味者・素人間へ大きな一歩を提供する。江戸後期、武家、富裕町人らは京都、陶業地から専門陶工を招き、数寄者・素人陶芸を愉しみとした。乾山は仁清とともに京焼の陶祖とされたが、陶器に絵画的表現を可能にし、創案した色絵具の活用を第一として、白絵具こそが彼らの興味の対象となる。白・黒・青絵具、様式では阿蘭陀模倣が注目されるが、

(一) 乾山の白絵具(白絵土)は、良質白土の入手困難な状況下、素地の色調を変える・陶面及び絵付面の調整・装飾の効果を上上げる・絵具として使用するなど、絵付・装飾において如何に白色が重要であるかを呈示した。技術面でも焼成における白絵具の盛り上がり、素地との剥離を防ぐ工夫、着色顔料を混合しブレンド色を考案するなど、のちに作陶者はそれらをアレンジ、乾山名を冠する否に問わず、これらの調査・配合・活用・塗り方までを相承、乾山焼の大きな遺産の一つとして残る。

(二) 黒絵具も同様である。留葉(釉葉)を用いずして直接器面に書・

面を描き入れることを可能にしたが、青・藍・緑色絵具にも独自の試み、気づかずして後世の趣味者は多用するなど、これも乾山焼の遺産である。

(三) 日本の阿蘭陀様式は乾山創案。二代猪八が継承する。白絵具を基調として多彩な色調・意匠様式・形状他に乾山焼の特異性が発揮される。一流として錦手絵具の改変もあるが、乾山は内窯絵具にビードロを用いることは白・黒絵具を専らとした。基本の調査は孫兵衛伝、伝統的な上葉・色絵具に限定、絵画的風趣とそれに適した絵具の調整、乾山考案の陶法は後世の作陶者らの注目を集める。

「乾山焼」には初代、二代猪八の陶法がある。

初代乾山は茶の湯に親しむ時代、伝統的な大和絵・和歌の風趣、水墨画・漢詩の世界を描き出す。古典の風趣を意匠とし、色彩の変化と図柄の意外性、兄光琳の創り出した光琳様式を陶器に表現。本窯・内窯、両陶法を駆使、中国・朝鮮・阿蘭陀他の写しものなど、日本に新たな装飾陶器の風致を伝える。一方、猪八も乾山様式を踏襲する。が、多くは工芸意匠の域に留まり、楽焼などの手捏陶芸の台頭する折、楽焼に白・青絵具を入れる装飾を考案。色彩に興味の示された時代、鮮やかな青絵具を強調、阿蘭陀様式、惣地塗りの交趾様式に独自の工夫を試みる。

晩年の乾山は江戸に住まいし兄光琳を強く意識。色彩に対する関心も高く、内窯陶器を主体として絵画用顔料にも中を広げる。人々の交歓も活発な折、茶会・句会・謡会など、ともに造り、ともに鑑賞。芸と遊との領域がしだいに狭まる。プロ意識、が、心は数寄者。乾山の陶芸はこれらが一つとなった風趣を伝える。

— 乾山焼と陶法書 —

陶法書・伝書の理解は、実地経験のない場合はむずかしい。

茶道具・懐石道具・趣味道具など、使用、鑑賞し、やがて興味は製作・造り方へと移行するが、やきものは筆一本、用紙一枚には終わらない。道具・場所・焼成のための窯も必要であり、それらの準備にはそれ相応の知識、経験が求められる。

やきものは、生まれるために各々条件を背負っている。

土・砂・石には個々の素質があり、形造るためには土の可塑性（粘土質）、熱によつて焼しまり、硝子質を造る性質がなければならぬ。

手捏ねは多く楽焼の意に用いられるが、日本では桃山時代茶の湯が大成、茶を喫するための茶碗として楽焼茶碗が造られた。茶笥を用い茶が点て易く、手に取り扱い易いことを始めとして、色・形・焼成の折の変化など、茶の湯者らはそれらの一つ一つに心を向けた。

楽焼は中国明代に造られた河南三彩を基盤とする。日本では押小路焼、樂家に始まり、押小路焼は京焼に吸収されるが、樂家は今日までも継続。ざつくりとした土を用い、鉛質（炭酸鉛）と珪石質を混合した釉薬をかける。鉛質は珪石（石英）を溶かし硝子化させるが、光沢を与えるなどの役割を果たし、乾山は、鉛質は唐土または白粉、珪石質は日ノ岡石と記している。内窯焼成は上薬（透明釉薬、絵薬（絵具））ともにこれがすべての基本となる。上薬に着色顔料を加えて色絵具を作るが、江戸後期にはそれにビードロ（白玉、硝子粉）を入れ、光沢を工夫、絵具の密着、安定度を高めるなどの技法に執心、素人間には必須の絵具として重用された。

江戸後期の陶法書によれば、押小路焼孫兵衛伝・乾山焼内窯絵具は古式とされた。使いこなす能力の不足、裝飾に絵画的要素を必要としないことなどが考えられるが、伝書類には古物、古く見せたい時には

よろしいとあり、乾山の真意、陶器に絵画的な表現を試みることのむずかしさが反映される。

乾山焼は、画期的なやきものであった。様式・陶法ともに新機軸となり、従来の技術、工芸意匠をのり超えるが、火気の試練をくぐり抜け、和漢の画譜様式が現れた。丁子屋町では古典を脚色、琳派様式の意匠を軸に一般化にも力を入れるが、晩年には絵画活動にも執心、作陶にも色彩への関心が強くみられる。が、八一歳最後に残した作品は乾山の最も得意とした書作品、和歌を中心とした短冊皿であった。

後世の模倣者は乾山焼の真の把握には至っていない。如何なる模倣も真似ごと（まねごと）に過ぎないが、普遍性を貴ぶやきもの、が、作者の表現に変わりはなく、「陶冶」の意識、造る者の内面は如実に滲む。専門絵師、陶工の助力があったとしても乾山焼は乾山の相である。乾山焼の陶技における特色は白絵具・白絵土に代表されるが、惣地塗り、掛け分け、絵具としての活用他、黒絵具は書・画、青絵具は阿蘭陀様式に顕著となる。成形も新趣向の角皿・額皿・筒型火入などの形態は難しい。背後にあつた二代仁清・孫兵衛ら熟練陶工の実力を認識させられる。

「顔料」は顔に塗る材。原始日本の先祖たちは顔に色を塗っていたという（鶴田榮一著「顔料の歴史」）。顔料の始まりであるが、古来人類のはじめに意識した色は赤色とされる。縄文時代の土器に始まり、『魏志倭人伝』には大人も子供も顔・体に入れ墨をしていたとあるが、赤色はべんがら（良質の丹土）、青色は墨・藍、黄色は薑（はじかみ）を使用したと伝承。色料は土からの土壌採取、植物からの草木採取が主体となるが、八世紀になり銅系顔料が現れる。江戸期使用の顔料は大方平安初期には揃うとされるが（鶴田榮一）、桃山時代の濃絵・紺碧画には紺青・緑青を多用。顔料は海外貿易に頼り、大坂道修町には輸入品

を扱った絵具屋、薬種屋が集合、『樂焼秘傳』（白鷺齋）にも道修町三丁目小西与兵衛などの名が認められる。

乾山も銀のカラムを求め多田銀山を訪れるが、ここでは土・石・丹土も扱うなど、鉱物を産する地域ではとも顔料になる土石が産出。丹土は当時日本においては輸入禁止の一品であったという。

顔料は絵具として『倭名類聚集』に「圖繪具」とある。「染繪具」とある染料とは別であるが、赤絵具は赤土が原料、黄土を用いる。焼いて丹土、インド・ベンガラから輸入した弁柄丹土、乾山使用の緑礬を焼き返した綠礬もまた同じ役割であるが、白色顔料は鉛白（白粉）が基本。足利時代に明人に学び鉛白・鉛丹などが作られたという。元和年間（一六一五—一四）、需要に伴い長吉丹・勝吉丹・乗久丹などの区別も生じ、『内電秘書』（二代筆記）には乾山焼カボチャ色として長吉丹の使用が認められる。白粉は奈良朝以来使用された鉛粉である。中国より渡来、唐土とも呼ばれていた。

— 乾山以後の陶法書の特徴 —

乾山の陶法は京都と江戸・佐野に伝播した。京都では猪八、江戸では次郎兵衛、佐野では大川顕道へと伝承するが、猪八伝『陶器密法書』は清吾から萬古焼、江戸の小梅・浅茅が原へと波及。陶法は内窯焼に絞られるが、初代伝、二代猪八伝ともに江戸へ向かう。のちに両者は混同されるが、多く楽焼陶法の範疇に入れられる。

被見した伝書からは以下の諸点が指摘できる。

(一) 陶法書・伝書の内容は楽焼主体

江戸中期から後期にかけて素人間に親しまれた陶法は楽焼である。後世、伝統的な内窯陶法は樂家、乾山焼の二流に限定。陶工の域を超え、「陶芸」の芸域まで高められるが、素人間の楽焼は作陶するこ

と、個人の愉しみが第一であった。『百工秘術』には「慰焼」とある。『百工秘術』は享保九年、元文元年『樂焼秘囊』が刊行された。両書は貴重な手本・手引書となるが、やがて素人陶芸間には銘柄意識（ブランド）が成立、一つは釉薬、二つは作者・作風への拘り（樂家代々・光悦・空中など）となり、秘伝・伝書の入手に腐心する。単冊から合冊本へ、作陶の愉しみは知識の蒐集へと移行。絵具一色に対して種々の異なる配合・調合が述べられるなど、根源には絵具屋・材料屋の存在を認めるが、原料・顔料、やがて手本・指導者・専門家の紹介へと及ぶなど、組織・人脈の強さを發揮。寄合、趣味会などを媒介として領域を超えて相互の交流が保たれる。

(二) 専門陶工と地方の関わり

陶工はそれを以って生業とする。常に世上の需要に応ずる姿勢が求められる。仁清伝にも呈示されたが、伝書の前半は時の茶の湯者らの嗜好に随い、高麗茶碗・茶入製作など、写しもの技法に尽くされる。木米・龜祐時代も同様に文人趣味と煎茶の流行、明・清代の写しものや阿蘭陀様式などが専らとなる。有田焼の磁器生産も追風となるが、仁清焼、乾山焼は一時的にせよ時代遅れの道に入る。

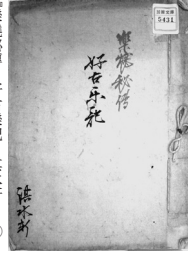
(三) 磁器の発展

当時富裕層は白く軽く創意ある意匠の有田焼、一般は瀬戸産磁器に傾倒するなど、有田焼は京焼を凌ぐ勢いとなる。京焼風趣、ブランド・銘柄の影は稀薄となり、やがて京都も磁器生産へと転換するが、遡って乾山も磁器製作も試みた。比良の白土を求めており、鳴瀆窯跡からは染付磁片も出土した。が、本格的な製作には至っておらず、京都における磁器生産は文化年間頃、奥田頼川によつて始められる。

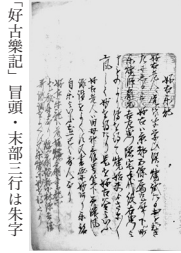
陶工の陶法書は「素人の心得に見るにはうとし」（『本朝陶器攷證』）とした言がある。陶家の家伝・秘伝は専門陶工の生きるための術であった。趣味者の翫びごととは一線を画す。

一、初代乾山系陶法書（『樂燒秘傳 好古樂記』中「内蔵秘書」―「初代乾山口述二代筆記」―都立中央図書館加賀文庫）

『樂燒秘傳 好古樂記 淇水軒』

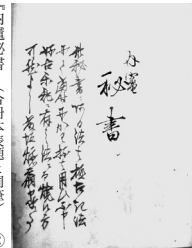


『樂燒秘傳 好古樂記 淇水軒』①
合冊本表紙（都立中央図書館蔵・加賀文庫）

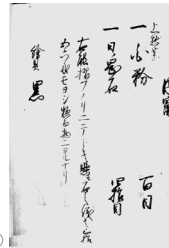


『好古樂記』冒頭（末部）三行は赤字

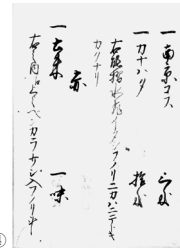
「好古樂記」
好古老人二道を聞学ひ、俱二燒試たのおもむき左にしるす
好古ハ京都五條烏丸通リ下ル町 樂燒師家元吉左衛門隱宅手代紋石衛門と申ものより傳を得て燒始 夫らさまく工風して妙を得たり 是を好古釜といふ好古老人ハ田母神三作号笠下員濃風之俳諧をよくす 又書面に妙あり 樂銘自樂といふ 尤



『内蔵秘書』（合冊本表題と同筆）②



③



④



⑤

「初代乾山口述二代筆記」―都立中央図書館加賀文庫

① 『樂燒秘傳 好古樂記 淇水軒』
② 「内蔵秘書」

此秘書二ある法は 極古記法にて 當時にかく様は用ひ不申 好古樂記二有之法二而燒候方 可然よし 藤垣爐扇申付候事

③ 上懸藥
一 白粉 百日
一 日ノ岡石 四拾目
右能指 フノリニテトキ懸ル 石の儀は三拾五六匁モヨシ 惣而物ニヨルナリ

④ 一 南京コス 三匁
一 カナハタ 拾匁
右能指 水飛イタシフノリニカハニテトキカクナリ

一 土朱 一味
右之内江上々ベンカララシ入フノリ半

⑤ 一 白粉 拾匁
一 日ノ岡石 四匁
一 録（懸）青 式匁五分余
右フノリニカハニテトキカクナリ

一 白粉 拾匁
一 一目石 四匁
一 録（懸）青 式匁五分余
右フノリニカハニテトキカクナリ

一 白粉 拾匁

初代乾山には江戸で認めた『陶工必用』、佐野において著した『陶磁製方』がある。

さらにここに初代乾山の陶法を伝える一冊（写本、宝曆一〇年一七六〇・明和三年一七六六）を見出したが、江戸入谷村において乾山を支え、その死を輪王寺宮坊官進藤周防守に伝えた（推定二代乾山次郎兵衛の著した陶法書の写本である。乾山口述を筆記「初代口述二代筆記」として記録されたが、このたび加賀文庫（都立中央図書館）にその写本を発見。内容、奥書、年紀・書者の花押型などから二代筆記の写本であると判断した。合冊本『樂燒秘傳』中、樂燒陶法・色葉代銀積・百工秘術・磁工門」抜萃書写の後に編まれ、素人陶芸樂燒陶法に加えたものと推考する。

冒頭、乾山伝は「極古記法」と記されている。乾山伝は京都押小路焼孫兵衛伝の内塗釉薬・色絵具である。それには媒液剤として白玉・ビードロが入らない。上薬を薄く掛けるなど、乾山の目指した絵画的表現を巧みに彩った釉下色絵具であるが、使いこなせる者は孫兵衛・初代乾山迄のこと、二代猪八も凡そ半分の色絵具にビードロを加えている。仁清伝錦手絵具、乾山一流白・黒絵具及び錦手絵具の改変、白絵具を合わせたブレンド色にはビードロが交じるが、孫兵衛伝の釉下色絵具に用いることはなく、やまと絵調の絵付も江戸では時代遅れの感があった。

絵具の溶解を助け、耐火度を高めるビードロは、江戸後期の趣味者陶芸・陶法書類に現れる特徴である。絵具の安定、素焼素地にも無理なく密着、失敗を防ぐためには樂燒、アマチュア陶芸には必要不可欠の顔料であった。

一己之奇人なり(以下朱字) 好古樂記ハ藤垣爐扇書記にして尤秘書なり 爐扇俗稱小林源兵衛 哥詠□(譜か)をよくす 又樂焼に妙を得たり

以上は『好古樂記』冒頭の言である。好古老人は樂古左衛門隱宅手代紋右衛門から樂焼技術を習得、書・画・俳諧に妙ありという。

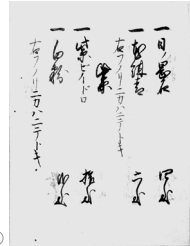
(先考「乾山焼陶法伝書とその伝播」では「好古」を小林源兵衛としたが誤認。訂正いたします)

爐扇は姓藤垣、俗名小林源兵衛、天保時代の俳諧人。「好古老人は俳諧・書・画に妙、自樂と稱し一己之奇人なり」と述べ、ともに俳諧、樂焼を好み、同書を纏めたものと考え。乾山焼に關し「内籠秘書」冒頭には朱字にて次のような爐扇の言がある(本文とは異筆)。

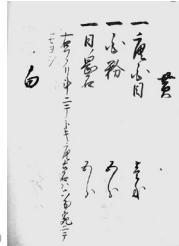
「此秘書ニある法は極古記法にて、當時に可く様は用ひ不申好古樂記ニ有之法ニ而燒候方

可然よし 藤垣爐扇申付候事」

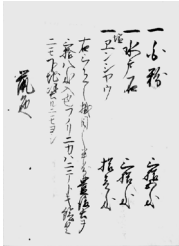
此の秘伝は極めて古く、今日用いることはなく。代わって当『樂焼秘傳・好古樂記』に記載した別法を勧めるとした意であるが、乾山焼内籠竪具は押小路燒孫兵衛から伝授された調査で



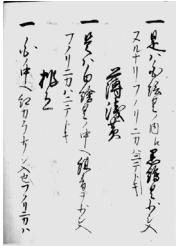
⑥



⑧



⑨



⑨

一日ノ岡石 四匁

一花紺青 六匁

右フノリニカハニテトキ

紫* 拾匁

一紫ビイドロ 貳匁

一白粉 貳匁

右フノリニカハニテトキ

黄*

一唐白目 壹匁

一白粉 五分

一日ノ岡石 五分

右フノリ斗ニテトキ唐土石ハ六分宛ニテモ

ヨシ

白*

一白粉 三拾五匁

一水戸石 三拾匁

一塩 エンシヤウ 拾壹匁

右三色の掛目の半分 豊後土ヲ三拾八匁入也

フノリニカハニテトキ繪具ニモ下地塗ルニモ

ヨシ

鼠色*

一 是ハ白繪具ノ内江黒繪具少シ入

ヌルナリ フノリニカハニテトキ

薄浅黄

一 是ハ白繪具ノ中へ紺青ヲ少シ入

フノリニカハニテトキ

桃色*

一 白ノ中へ紅カラ少シ入也

フノリニカワハ

江戸における乾山の陶法は二冊の自筆伝書、佐野大川氏『陶器伝書』が伝える。当伝書は大方それらに一致するが、厳密には孫兵衛伝と乾山一流陶法を合わせた調査であり、一つに江戸における入手可能な原料・顔料、二つに次郎兵衛による工夫も加えられたものと推考する。

*上懸薬…懸薬は掛薬、上葉・透明釉薬のことである。『陶工必用』『陶器傳書』(天川頭道手控)ともほぼ一致。なかでも頭道手控「日岡石三十五匁より三十七八匁迄」とは同じである。

*黒…『陶工必用』とはほぼ同じ。とくに『陶器傳書』黒絵薬の割合とは全く一致。

*赤…『陶工必用』『陶器傳書』と同一。「土朱」は黄土と同じ役割であるが、色深紅朱ともあり、赤土の意、絵画でも陶磁器でも用いるとある(本朝画法大傳一六九〇刊)。

*萌黄…「緑」に代わり「萌黄」とある。割合は『陶工必用』『陶器傳書』「緑」の割合とほぼ同じ。*紺…『陶工必用』『陶器傳書』の「緑」の割合とほぼ同一。乾山は「唐紺青」を用いるが、当伝書及び『陶器傳書』は「花紺青」とする。

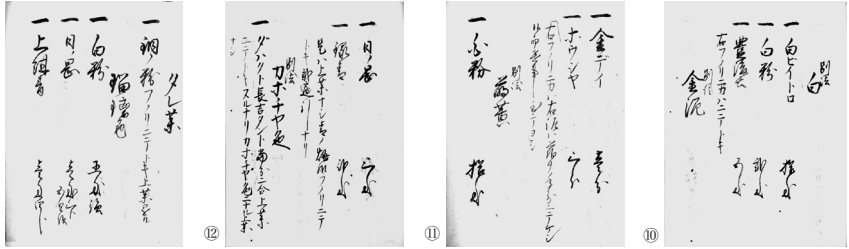
*紫…『陶工必用』に「白粉十匁 日岡石四匁 異洲薬の内色赤ク見へ候ヲかけぬ五分」とある。*黄…割合の割合に關し表示分と匁が反対か。*白…『陶工必用』白絵具略方に「水戸石出候火打石三十匁・白粉三十五匁・えんせう十一匁」とある。当伝書と全く同一である。

*鼠色…『陶磁製方』に「白鼠のく薬へ黒ノ合鼠のくヲ交候・フノリ・ニカワ等分」とある。*薄浅黄…『陶磁製方』に「白鼠のくニ紺ノ合鼠のくヲ少交申候・フノリ・ニカワ等分」。

*桃色…『陶磁製方』に「白鼠のくニ弁柄丹土ノ上ヲ少交申候・フノリ・ニカワ等分」。

上ヲ少交申候・フノリ・ニカワ等分」。

ある。媒溶剤に白玉・ビードロを用いない調査であるが、これは最早古式とされたことが分明する。時代とともに技術、装飾様式の簡略化、やきものは席焼などの影響もあり、素人陶芸が流行。ガラス玉・ビードロを入れ、絵葉を素焼・素地に密着させるなど絵具の安定、失敗の少ない技法・調合が盛行する。内窯陶法は、低火度焼成、素焼の素地と絵具、上薬さえあれば、持ち運び可能な小窯を用いて難なく作陶。本焼素地に絵付を施す錦手絵具の智慧を融合、簡便な製陶方法が工夫されたが、釉薬・土の調合を記した秘書・伝書などが盛行。作陶上のレセビーが寄せ集められた。繰り返し同じことを記録。実際に造るか否かは別として、人から人へ、素人陶芸はその知識を愉しむとした傾向を示す。乾山自身、江戸では数寄者の一人であった。調合書は秘伝としながら、乾山焼陶法は秘伝とすること無用だと考えていたことが推測される。



13

12

11

10

- 別法 * 白
- 白ビイドロ 拾匁
- 白粉 貳匁
- 豊後土 五匁
- 右フノリニカハニテトキ
- 別法 * 金泥
- 金デイ 壹分
- ホウシヤ 三分
- 右フノリニカハ右泥ハ箔ヲ手前ニテケシ候而遣事ニ至テヨシ
- 別法 * 萌黄
- 白粉 拾匁
- 日ノ岡 三匁
- 緑(懸)青 貳匁
- 是ハ上薬ナシ青ノ焼如フノリニテトキ貳遍引ナリ
- 別法 * カボチャ色
- ダハクト長吉ト當分ニ合上薬ニテトキヌルナリカボチャ色ニナル上薬ナシ
- * タレ薬
- 銅ノ粉フノリニテトキ上薬懸ル
- 瑠璃色
- 白粉 五匁強
- 日ノ岡 壹匁三分五厘強
- 上紺青 壹匁四分

*別法白…「陶工必用」白絵具とほぼ同一。白絵具(白絵土)において豊後土を扱う調査は乾山の切り札であるが、江戸では豊後土の入手は困難。そこでここに「別法」と記したか。

*金泥…「陶工必用」では「金泥一匁 ほうしや 貳分」。「陶磁製方」では「金の消泥壹分 上々透ホウシヤ三厘」とある。

*別法萌黄…先の「萌黄」と大方同割合であるが、「石・緑青がやや少ない。」「上薬ナシ。」「貳遍引」とあり、これは素地塗りの調査か。

*別法カボチャ色…「陶磁製方」に「又カバ色トモ可申候歟。白粉五匁。日岡石貳匁七分。弁柄丹土三匁」とあり、カボチャ色の割合をいうか。

*「ダハク」は「陀白」か。蜜陀僧とも称されるが、一酸化鉛には黄・白色があり、それをいうか。

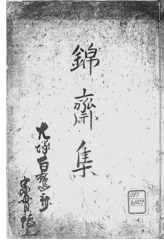
*長吉タン…鉛に硫黄・硝石を加えて焼いたもの(「天工開物」。鉛の酸化物で鉛丹ともいうが、黄色を帯びた赤色。絵の具、また薬用とされる。一七世紀頃から分類が始まり、絵具類の種別品目(品位)に長吉・勝吉・乗久・市兵衛・勝久・正兵衛・光明・菊丹などの銘があつたという(「顔料の歴史」)。長吉)は人物名、菊丹は菊印があつたところからの銘であるが、製陶場で産する長吉丹は上等とされ、伏見人形の製造法を記した文獻によれば、所用の絵具としては「丹・長吉丹か勝吉丹を用うべし」とある(「日本地誌略物産考」巻四)。

*タレ薬…還元焼成であれば含まれる銅粉は赤色にみられる。この現象は黒茶茶碗など釉薬の二重掛けにみられる。

*瑠璃…孫兵衛伝「紺」である。「白粉十匁 日岡石四匁 唐紺青六匁」とあるが、乾山も瑠璃色とはせず、仁清伝・本窯に「るり薬」とある。

二、乾山名のある陶法書

①『錦齋集』…『白鷺齋一流傳』『樂燒藥秘方』
筆者大塚白鷺齋宗貫・書写信政齋爲政・文政七年(一八二四)
合冊本の成立明治〇年 東京国立博物館



白鷺齋一流傳樂燒極みつの法
面の外より沈み清き水にて
入るに注ぎ
水は僅かに注ぎて流し
新玉土に調信の如く
神佛を土に敷き
やも他信化を同云一札と
使へば
五月晴日傳之 大塚白鷺齋宗貫

錦齋集大塚白鷺齋宗貫傳之表紙①
任土齋威彌兵衛より傳來
けん山・おりべ・仁清
②
③

任土齋威彌兵衛より傳來
けん山・おりべ・仁清
②
③

樂燒藥秘方
明治三十年六月石原策次郎口授
⑧
⑦

① 『錦齋集』 大塚白鷺齋宗貫傳之 樂家略史

② けん山
尾形氏にて弟・光琳と申名画人有 けん山三代有 初代伊エ門 武代伊兵へ 三代伊左衛門也 初代ハ高名書家にて けん山の書入とう二有 筆位さかん二して事也 薬もりる薬 其外色おきて書画するに 其色ばつくんと也 二代目ハ又書入すこしおとれり 三代目ハ書入流かりてま口し 其後出来ハ色薬にじみてあし、
おりべ
古田氏のごみの薬にて 元來ハ唐焼の一傳也 地白ニすこしあかみさしてサミの出来有 尾わりにて焼有又ハ京二にて焼有 何れ手づくねとてろくめなくもへき薬かりたるハたばんもへきと申て ためて色の中ニすこし白ミ有 黒薬にて書たるもやうハ あかみと知るべし

仁清
清水の元祖にして仁右衛門と申人也 後に入道して仁清と申清水焼の人物なぞ 金らん手のもやうなぞ書初メたる名人也 しかし一代ざりて書ものなし (仁清印) 此如仁清と俗書に此位の大きサの印と二有 茶わんなぞ有と知るへし

③ 任土齋
任土齋威彌兵衛より傳來する所 他家無類の一傳也 其後唐人白龍子來朝の時 唐焼の極密を傳來す 其二流を相合しておき 我等工夫する所あらゆる色敷焼出し 白龍子外傳に錦手赤繪金欄手の傳授し 日本無類の傳法 一子相傳の所也 親龍兄弟たりとも一子の外無傳の暗流たり 此度段々の類によつて神佛書言の上傳授する所也 穴賢一書之表堅相守つしミ可申之所也

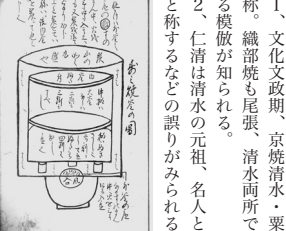
④ 『白鷺齋一流傳』樂燒極みつの法
すやきのうハ
もへぎ 唐土拾苴日目の圓三瓦五分塩き緑青三瓦 此薬下地ハ左の白薬うすく一遍引置可申候(以下略)
右の條々極みつの一流二して外ニ無類の一法也 此度願によつて傳授申所 其御元一子相傳のやくそくにして神佛ハ誓言一子の外親兄弟たりとも他傳他言いたす間敷 一札の上傳へ可申上ハ 萬一他傳他言の事有候候時ハ 此方存より二まかせ候のよし 堅やうと二候間 慎しく可上申候

⑤ 秘伝の約定(奥書 文政七申曆 五月晴日傳之 大塚白鷺齋宗貫)
⑥ (下段目) 文政七申曆中 五月晴日傳之
大塚白鷺齋宗貫藏(花押) 信政齋爲政(花押)

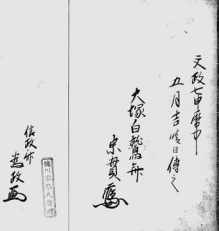
⑦ 樂燒藥秘方 白繪具・赤繪具・黒繪具・青繪具・黄繪具 以上五種(以下略)

⑧ 明治三十年六月 石原策次郎口授
『錦齋集』ハ『白鷺齋一流傳』(文政七年信政齋爲政写)・『樂燒藥秘方』(明治三〇年石原策次郎口授)の二部から成る。玉水焼伝來の陶法、唐人白龍子の伝える薬法、二流を融合、日本無類の伝法とあるが、同書に記された赤絵金欄手の伝授、唐人白龍子とは誰なのか。乾山焼も三代続くとあるが、初代は伊エ門・二代伊兵・三代伊左衛門、光琳は乾山の弟。乾山は書に高名ともあるなど、真否が混淆、出処はいずれにあつたものか。伝承とすることの不確実性が認められる。

1、文化文政期、京焼清水・栗田口は清水焼と総称。織部焼も尾張、清水両所で作陶、京焼に於ける模倣が知られる。
2、仁清は清水の元祖、名人とあるが、仁右衛門と称するなどの誤りがみられる。



③ (最上段の継続) すみ焼釜の圖



⑥ 文政七申曆中 五月晴日傳之 大塚白鷺齋宗貫藏(花押) 信政齋爲政(花押)

④『樂燒藥法家々の傳書寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』…『七寶藥傳』…『又別家之法』…いまり南京焼付藥法』…窪田傳上繪藥法』…『保樂藥別法』…『遠山傳』…筆者・年代不明 東北大学図書館狩野文庫

入別家法

赤樂上藥 唐百日 石四拾目式者(又は)三拾七目
青樂法 青ノ事 唐百日 石三拾目 録三拾目
黃樂法 唐百日四 玉五拾目 石拾五九 唐五拾目
黒繪藥法 黒ノ玉各同目 録貳匁
紫樂法 紫ノ又四匁 唐百日 録青三匁
乾山法蘭波白下塗ノ法 白繪土百目
玉五拾目 石貳拾目 唐五拾目

③ 又別家法
乾山法蘭波白下塗法
左図は拡大図

一 乾山法蘭波白下塗法 白繪土百目 玉五拾目 石貳拾目
唐百日 白繪土蘭波白下塗ノ法 乾山法蘭波白下塗ノ法 左図は拡大図

一 清地藥法 唐百日 石三十目 録三匁
一 漆燒藥法 唐百日 黃土十七匁 石十七匁
一 尼燒藥法 玉百目 録鑊三十匁 唐五十匁
一 同尼藥法 唐三十匁 石四十目 鉄弁少し入(略)
一 大槌焼船藥法 下地黃土三扁引 素焼して其後黃藥を三扁引燒ハ餉藥となるなり

④ 又別家法
乾山燒の法
左図は拡大図

一 乾山燒の法
下地黒谷土ノ白カ 又ハ白繪土ニ而造り上ケ 素焼して其後白繪藥を三扁引引て 其上へ何成とも繪藥ニ而繪を書焼なり 尤 繪を書たる上へ 又上引壹扁引もよろしく 上引ハ唐百日石廿八匁位よろしく
一 『又別家之法』
一 いまりなんきん焼付藥法
一 赤繪法拾色・鉄皮製法・同焼付藥法・黒樂繪具合方法・黒樂法ハ色・同焼付黃繪藥之法・同焼付繪藥法・金合様法・銀合方法・いまりなんきん焼付藥法・繪樂法
一 『窪田傳上繪藥法』…但焼付藥也
一 右はたき金なり 炭釜之節ハ石をひかへてよろしく候
一 『二保樂藥別法』(靱藥と炭釜) 一 『遠山傳』 一 白下引藥(白地塗り)・白下引ノ上へ・青・黃・紫・青磁(以下略)

①② 『樂燒藥法家々の傳書寫
なんきんいまり焼付繪具藥法集書』

③ 『又別家之法』
赤樂上藥 唐百日 石四拾目式者(又は)三拾七目
青樂法 青ノ事 唐百日 石三拾目 録三拾目
黃樂法 唐百日四 玉五拾目 石拾五九 唐五拾目
黒繪藥法 黒ノ玉各同目 録貳匁
紫樂法 紫ノ又四匁 唐百日 録青三匁
乾山法蘭波白下塗ノ法 白繪土百目
玉五拾目 石貳拾目 唐五拾目

④ 『又別家之法』
清地藥法 唐百日 石三十目 録三匁
漆燒藥法 唐百日 黃土十七匁 石十七匁
尼燒藥法 玉百目 録鑊三十匁 唐五十匁
同尼藥法 唐三十匁 石四十目 鉄弁少し入(略)
大槌焼船藥法 下地黃土三扁引 素焼して其後黃藥を三扁引燒ハ餉藥となるなり

一 乾山燒の法
下地黒谷土ノ白カ 又ハ白繪土ニ而造り上ケ 素焼して其後白繪藥を三扁引引て 其上へ何成とも繪藥ニ而繪を書焼なり 尤 繪を書たる上へ 又上引壹扁引もよろしく 上引ハ唐百日石廿八匁位よろしく
一 『又別家之法』
一 いまりなんきん焼付藥法
一 赤繪法拾色・鉄皮製法・同焼付藥法・黒樂繪具合方法・黒樂法ハ色・同焼付黃繪藥之法・同焼付繪藥法・金合様法・銀合方法・いまりなんきん焼付藥法・繪樂法
一 『窪田傳上繪藥法』…但焼付藥也
一 右はたき金なり 炭釜之節ハ石をひかへてよろしく候
一 『二保樂藥別法』(靱藥と炭釜) 一 『遠山傳』 一 白下引藥(白地塗り)・白下引ノ上へ・青・黃・紫・青磁(以下略)

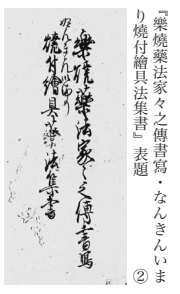
乾山焼には面誦・琳派・写しものの三つの基本様式がある。これは写しもの阿闍陀様式であるが、『陶工必用』には、「異域本邦二不依其國々ノ土ヲ取寄」云々とあり、以下の作品が伝世する。

国内陶磁器…志野焼・織部焼・唐津焼・伊万里焼・京焼
異国陶磁器…絵高麗・古染付・南京赤絵・呉須赤絵・安南・宋胡録・高麗茶碗・阿闍陀様式藍絵・色絵
当伝書『窪田傳上繪藥法』は「千家樂燒古實附陶器出処書」…『今焼合樂之次第』と同じく大坂の窪田助左衛門の伝える所、乾山の阿闍陀様式を主体とする。

『二保樂藥別法』は、薪窯と炭窯。薪窯は薪炭窯は炭を燃料に用いる内窯であるが、炭は山の如く丸く盛るとあり、炭窯は多く京焼・九谷焼、絵樂の調合において日の岡石を控えて良いとある。薪窯は有田焼にみられる。遠山傳に関してはよく解らない。



① 『樂燒藥法家々の傳書寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』表紙



② 『樂燒藥法家々の傳書寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』表紙

乾山後傍湯の具
 一 付青八匁 一 留り玉水テ 十匁五分
 一 上白粉六匁七分 一 日岡石水テ 三匁五分
 一 右四品定式の通り 尤 紺青一味を升三味入
 一 布苔入 能摺後前仕方同断 紺青八摺
 候へバ色アシク成故 跡ち入ル也

乾山黄繪藥
 一 唐白め式分 一 黄玉三五匁
 一 唐土四匁五分 一 日岡石水テ 五匁五分
 一 弁柄四匁

乾山赤繪藥
 一 唐土六匁 一 留り玉水テ 十匁五分
 一 上白粉六匁七分 一 日岡石水テ 三匁五分
 一 右四品定式の通り 尤 紺青一味を升三味入
 一 布苔入 能摺後前仕方同断 紺青八摺
 候へバ色アシク成故 跡ち入ル也

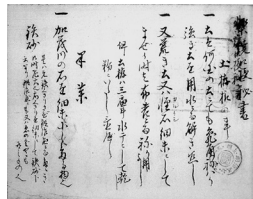
乾山黄繪藥
 一 唐土六匁 一 留り玉水テ 十匁五分
 一 上白粉六匁七分 一 日岡石水テ 三匁五分
 一 右四品定式の通り 尤 紺青一味を升三味入
 一 布苔入 能摺後前仕方同断 紺青八摺
 候へバ色アシク成故 跡ち入ル也

乾山赤繪藥
 一 唐土六匁 一 留り玉水テ 十匁五分
 一 上白粉六匁七分 一 日岡石水テ 三匁五分
 一 右四品定式の通り 尤 紺青一味を升三味入
 一 布苔入 能摺後前仕方同断 紺青八摺
 候へバ色アシク成故 跡ち入ル也

手紙の写
 乾山黄繪藥の具・乾山黄繪藥・乾山
 萌黄繪藥・乾山赤繪藥・赤薬上薬⑬

乾山黄繪藥
 一 唐土六匁 一 留り玉水テ 十匁五分
 一 上白粉六匁七分 一 日岡石水テ 三匁五分
 一 右四品定式の通り 尤 紺青一味を升三味入
 一 布苔入 能摺後前仕方同断 紺青八摺
 候へバ色アシク成故 跡ち入ル也

乾山赤繪藥
 一 唐土六匁 一 留り玉水テ 十匁五分
 一 上白粉六匁七分 一 日岡石水テ 三匁五分
 一 右四品定式の通り 尤 紺青一味を升三味入
 一 布苔入 能摺後前仕方同断 紺青八摺
 候へバ色アシク成故 跡ち入ル也



「薬焼口授秘書」⑬

- ⑮ 乾山藥の方 紺繪の方
 - 一 紺青八匁
 - 一 留り玉水テ 十匁五分
 - 一 唐土六匁七分
 - 一 日岡石水テ 三匁五分
 - 右品々之内 玉石白粉三品能摺其後布苔 紺青を合せむ
 らなきまようこして書へし 尤 紺青八すり候へハ 色あしく候
 也
- ⑯ 乾山黄繪藥の方・赤繪藥の方（以上調合略）
 - 一 紺青八匁
 - 一 留り玉水テ 十匁五分
 - 一 上白粉六匁七分
 - 一 日岡石水テ 三匁五分
 - 一 右四品定式の通り 尤 紺青一味を升三味入 鉢にて摺候
 而 跡（後）ち紺青入 布苔入 能摺後前仕方同断 紺青八摺
 候へバ色アシク成故 跡ち入ル也
 - 一 唐白め式分
 - 一 黄玉三五匁
 - 一 唐土四匁五分
 - 一 日岡石水テ 五匁五分
 - 一 弁柄四匁
- ⑰ 乾山萌黄繪藥
 - 一 岩録青四匁
 - 一 唐土六匁
 - 一 萌黄玉粉水テ 五匁
 - 一 日岡石水テ 式匁八分
 - 一 右四味仕方前同断
 - 乾山赤繪藥
 - 一 白玉五匁
 - 一 日岡石三分（匁か）
 - 一 右四味仕方前同断

此赤繪藥ハ口とうぐ焼上のうへにていろよしほんの
 りとしたる火にて焼上ケベし（略）

⑱ 手紙の写
 然ル所 乾山白地之答の所 薄黄青く色付申所 御
 焼加減にては御座有間敷 薬悪敷と筆取候 地薬の内
 日の岡石と申ハ口御座候故 哮喘だいご遣方出候を
 を 日野岡石と申多賣買仕候 右の類の石を邊方出候ハ
 兎角色薄黄青色ニ出来仕候 右二付搥成日の岡石
 少々宛差上申候 乍俣 此薬ヲ以 御調合 御焼 御
 續可被下候

一 紺繪藥之儀 是又色能出来仕候段 承知いたし
 候 是も紺青の宜からざる故にて 色あしく 紺青の
 内二何いろかまざ買買いたし 右何いろかの交り候紺
 青遣い候得ハ 紺繪中くよろしく出来不申候

一 薬御壁被成二而 指起候儀も御座候様被仰下
 知いたし候 是ハ金案不乾上へ御塗被成候と拝見し候
 素焼の上へ付候故 上乾いたし徳と不乾ものにて御
 座候 殊更二へんもぬり候へハ口かわき候様と相見へ
 申候 下塗能乾き而も上塗乾不申候へは指起申候 其
 段徳と御考能々ニテ候而 能乾きたる時 又御ぬり可
 被成候

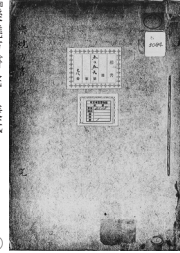
一 黄赤青繪藥三種ハ宜出来仕段大慶

一 白繪藥之儀被仰下承知仕候 是ハ先塗而申上候 乾
 山藥 則白繪藥にて御座候 何二而も石塗にて三べん
 御書被成候而 二味の上薬御塗 徳と乾き候而御焼可
 成候 雪白出来仕候 此外ニ雪白と申 白薬傳二無
 御座候

⑳ 「薬焼口授秘書」
 一 土拵候の事 黒薬・赤薬・白薬・地薬上薬之
 事 焼用傳 北久寶寺町繪具屋兵衛藥よし 傳授・
 地薬傳・上薬傳・布百傳・澄泥硯の法（此傳傳も也）・
 焼従之傳・同法

*北久寶寺町繪具屋吉兵衛・現大阪市中央区北久寶寺
 町一―四丁目 小間物屋が密集 堺筋には繪具屋・紙
 屋・木綿屋などの商人がいたとされる。

⑦『樂燒方書完』…『樂燒方』『樂燒之方書』『樂燒藥并諸道具』
筆者・成立年代不明 東京国立博物館



①

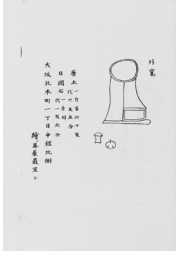
『乳山燒』
下作黒谷白土ニテ作ルシ、于ニ成テロクロニテ削ル下塗白繪土ニ通程塗リ其上阿ニテモ色繪ヲ画キ上塗ヲカケ焼上テ水ニツケル

乾山燒

② 以上大坂常吉兵衛傳書也
京都智恩院古門前 茶碗屋長兵衛
樂燒藥并諸道具

大坂常吉兵衛傳書 樂燒藥并諸道具
大坂北本町一丁目中程北側
繪ノ具屋最宜シ

③



④

『樂燒藥并諸道具』

① 『樂燒方書完』

樂燒方・圭齋傳
黒早燒(緑青七匂・鉄皮二匂・長吉丹十四匂・真綠死十五匂・別方・瑠璃燒・青磁・赤染法・上藥・地藥・青藥・白藥・黄藥・黒藥・嘉藥・乾山燒)

② 乾山燒

下作黒谷白土ニテ作ル シラ干ニ成テロクロニテ削ル 下塗白繪土ニ通程塗リ 其上何ニテモ色繪ヲ画キ 上塗ヲカケ 焼上テ 水ニツケル
交趾燒・三島燒・瀬土燒・白繪藥・茶繪藥・瑠璃繪藥・錦手ノ赤繪藥・高色繪藥・赤繪藥・黒繪藥・青繪藥・淺黄繪藥・紫繪藥・樂藥早藥赤・輕石其外土カケタメノ

以上圭齋傳ナリ

樂燒之方書・常吉兵衛

赤藥之法・黒藥之法・白藥之法・繪畫之法・形入之法・再ヒ電ニ入ル法・ヒスミヲ直ス法・黒藥掛目之法・黒藥ニ白画ヲ上ル法・銘印ニ藥ヲ不掛法(以下略)
燒物画ヲ写ス法
紙ハ西ノ内力又杉原力字田紙 先ス紙ヲヨクモエハ荒キ粉落ナリ

③ 以上大坂常吉兵衛傳書也
京都智恩院古門前古橋町 茶碗屋長兵衛

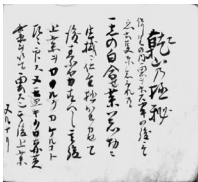
④ (製土之法以下内案陶法・藥・窯圖)
大坂北本町一丁目中程北側繪ノ具屋最宜シ

樂燒方圭齋傳、大坂常吉兵衛傳である。

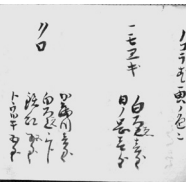
繪具・諸道具商茶碗屋長兵衛は真葛長兵衛であり、「石野佐次衛門樂燒法」にも現れる。

黒藥ニ白画ヲ入れる法は、乾山燒二代猪八工夫ノ陶法。「珉山燒青藥」。黒早燒藥は台黒藥釉、黒色顔料に加茂川石を使わない黒藥釉。

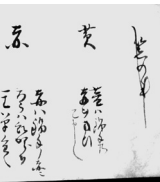
⑧『繪藥・釉藥配合帳』…筆者・成立年代不明 三田市教育委員会



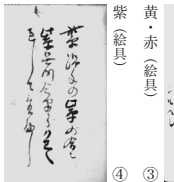
①



②



③



④

① 乾山の極秘
但し生の内画ヲ書ス ヤキの後ニてニ書夏東然なれ共
一しの白合せ藥 器物ニ生掛ニ仕置 極かわカコ
て後 素ヤキすべし 其後上藥ヲカクカケルコ
ト 左ニ印ス 又モエギクロ赤黄紫ヲ以て画ス
也 其後上藥スナリ

② ノコラす画ノ色也

モエギ 白ろく色也 日ノ圓老匂
加茂川老匂 白ろく三分 鉄紅五
クロ

③ 黄

黄ハ錦手ノ赤ヲ用ト申也
錦手ノ赤ニシテハ紅からト天草
くわへ用ル也 ざも無く而ハ黄ニ
むく糸トシルヘシ

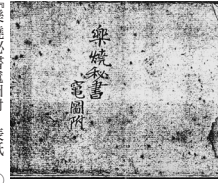
④ 紫

錦手ノ紫の合也 紫呉州合やふ分
色々過して置へし

『繪藥・釉藥配合帳』は、「金燒附傳」「金古堂口傳写」「大西友三良デン」「樂燒藥傳」「本窯藥」「樂燒藥調合」「乾山の極秘」「石燒キクスリ」「土燒調合」「尾賀田周平傳」「今里相傳」以上、一二篇によって成立。乾山に關しては極秘とあるが、繪具の調合を中心に素地上・素焼上、白下地は「ししの白合せ藥」、上藥は輕く掛ける」とある。欽古堂龜祐口伝、尾形周平伝などを含み、成立は文政・天保以後と推定される。三田燒は兵庫東三田市のやきものである。宝暦年間(一七五一〜一六四)小西金兵衛が開業、白化粧を用いた製品に始まり、内田忠兵衛創始の青磁が知られる。文化末・天保年間を最盛期とし、京都から欽古堂龜祐も指導に訪れ、型物製作にすぐれる。

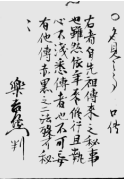
三、乾山名のない陶法書

①『樂燒秘書電圖附』…筆者飯塚宗助常秀(花押)

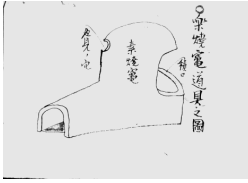


『樂燒秘書電圖附』表紙 ①

樂吉左衛門判文化二五(二年)年
二月飯塚宗助常秀(花押)



○望燒電通具之圖
右青目見知傳來之秘書
思辨然後手未修行且熟
之不及來傳者不可每
看他傳其果之誤不可
樂吉左衛門判
以上
文化二五(二年)二月飯塚宗助
常秀



① 『樂燒秘書電圖附』

樂燒藥方之書

○彩色藥

青藥之方 綠青八拾目石二百目 唐土五百目

右調合メ用ユ 綠ハ松印ニテモ板流ニテモ吉

塗上六反程ヨシ 綠減スレハ交趾藥トナル也

紫藥之方 紫胡須式分石參匁 唐拾匁

右調合メ色薄時ハ胡須加ル 色見シテ可用

胡須二匁傳

黃藥之方 唐白目三分石三匁 唐土拾匁

右調合シテ弁柄少加ル 白目ハ極細末ニテ可用

瑠璃藥之方 紺青五匁 石極減五分 唐土五匁

右紺青ハ花紺青直シ 極細末ニス

黃瀬戸藥之方 弁柄二匁五分 日野拾五匁 唐五

拾匁 右調合メ若色惡キハハ弁柄ヲ減ス

赤藥之方 辨柄三匁 信樂拾匁 日山三匁式分

唐土五匁 右調合メ色惡キハハ信樂減ス

黒藥之方 若白緑三拾目 日野岡三拾目 唐百目

右ハ白緑ニ口傳アリ 是ハ本寢ノ唐藥ナリ

鉛色藥之方 加茂川石式拾五匁 唐百匁

右調合メヘン塗 上エ三拾目ノ留藥

濃ク色ハニ塗テ吉

茶藥之方 信樂土・弁柄當分ニ入見合 綠青

石三拾匁 唐土百匁 右調合シテ石式式分

桃色藥之方 信樂土調合 辨柄五リシ 石式式分

唐土三分 右之割合調合也 惡時ハ信樂

減ス

淺黃藥之方 信樂土五分 紺青三分 山(大日出)

四分唐壹匁 右調合色見シテ用 留藥懸

ル事法ナリ 以上

右は畫ノ彩色藥ニ用ルナリ 何邊も色見して

相用 留ヲ懸て色出ル法ナリ

○地藥

白地藥之方 信樂土百匁 石三拾匁 唐土八拾匁

右調合シテコシテ相用ル 信樂ハ亦ミ無

處ヲ用

青磁地藥之方 綠青五匁石三拾匁 信樂土百

匁 唐土八拾匁 右地色薄時ハ綠青増ス

赤地藥方 黄土水 右は下地ニカ、ハラス

赤ニ燒上ルハ 下地乾タル時分 二反ス

リテス燒ス 下地赤也トナルナリ

黒地藥之方 白緑四匁 弁柄五匁五分 石六分

唐土五分 右は綠ヲ書ても亦ハ無ても留藥ハ三

反ツ、塗燒上ル

○秘傳五箇之方

赤畫 水テ黃土

右は彩色用ル朱ノ如ニ相成 素燒之節エ(繪)

ハ 下二白繪ヲ用ル

黒畫 紫胡須 右極細末シテ 随分濃ク用

本寢赤繪之方 弁柄三拾匁 白玉百匁 唐土

三拾匁 右ハ極細末ニシテ 玉ハ極白吉

青磁藥 紺青六匁 若白緑壹匁 石二百匁

唐土五百匁

右は調合シテ七反塗也 下地ニヨリ地藥懸

ル 亦上エ彩色も相成ル口傳有

金燒付 金泥 礬砂二味

右燒付後 ハウノハカマニテ光澤出ス

○極秘傳

赤藥藥 石三拾五匁 唐土百匁

右ニ味 是ヲ合セテ留藥ト云 元來光澤藥ナリ

此藥ヲ塗テ燒時ハ 光澤出スコト妙也

下地ニ画ヲ書 是ヲ上エ()塗リテ

地色迄も引出 諸色藥ヲ押テ落サス故 留

藥ト云 此一方ヲ以テ 諸色ノ藥加減シテ 出タ

ル者也 諸藥之根本也 可秘々々

黒藥之秘方 加茂川百匁 白玉五拾匁方八拾

匁 込入六十匁吉 礬砂拾五匁 是ハ不入トモ吉

右赤黒之ニ法ハ 藥家相傳之秘法ナリ 樂燒根本之

藥ニテ 極口ノ秘トスル処ナリ 古來名物ハ皆此ニ法

ニテ燒タル者ナリ 代々ノ藥是ニ少々加減ノ已也

可秘々々

○火加減之事 口傳

○色見之事 口傳

② 右は白先相傳來之秘事也 雖然其色も

依年々變衰 日熟シテ淺ク悉傳者也

不可妄有他傳 赤黒之ニ法 殊可秘 々々

以上 樂吉左衛門判

文化三十五年二月飯塚宗助常秀(花押)

○樂燒電道具之圖

素燒電 積口・色見ノ穴

火插 挾 電ニヨリ長短アリ 柄長三尺・三尺

五寸 柄長壹尺五寸・二尺五寸

樂燒外電 此電ヲ金電臣云 色燒カマ也

方形内蓋 蓋 トチン 長トチン 隔小板

席電ノ外カマ内カマ 蓋 色見穴

五德(土二匁作) 居輪軸 臺口口 同標本

当伝書はエドワード・モース蒐集の一冊

である。英字の書き込みがあり、モースは

京都において陶工より受理したものと推測。

陶法を伝えた樂吉左衛門は樂家九代了入

(二七五六一三四)と考える。「了入は七

代長入の二男惣次郎、兄弟入が若くして隠

居。一五歳で当主となり、以後六〇年に及

ぶ陶師が知られる。表千家々々齋より」¹⁾

を得るが、号は都土老人。天明大火に罹災。

陶土・印章、多くものを失うという。樂

家秘伝の「授色背景には諸々の事情が考えら

れる。冒頭「彩色藥・青藥之方」では綠青

を減らせれば交趾になるとあるが、「反」は

「返」、繰り返す意である。

一九八五年一月二十四日、翌一九八六年五

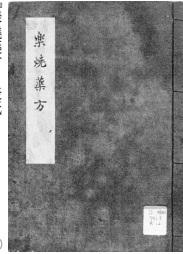
月一日、ポスター郊外セラム、ピーボディ・

エセックス博物館を訪れた。晩秋の当地は冷

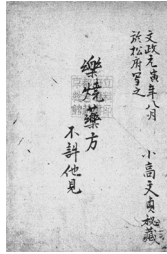
たく、魔女伝説を彷彿させる霧に包まれてい

た。作品調査の思い出である。

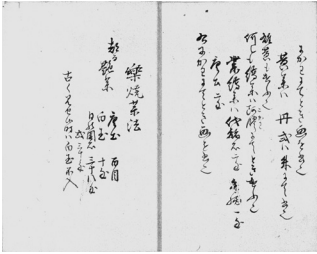
③ 『樂燒藥方』…小高文貞藏・文政元年（二八一）・成立年代不明 京都府立京藪孝・歴彩館



① 『樂燒藥方』表紙



② 文政元貞年八月於松府写之 小高文貞秘藏 樂燒藥方 不許他見



③ 樂燒藥法

① 『樂燒藥方』
文政元貞年（二八一）八月於松府写之
小高文貞秘藏樂燒藥方不許他見
燒もの薬選ぶ品々

唐土・白玉・日の岡石・豊後土・緑青・丹・朱・鉄粉・
代赭石（酸化第二鉄）・雄黄・白緑青・黄土・加茂川石・
花紺青・蓬砂・弁柄
唐薬ハ・黒ゴス・青ゴス・紫ゴス・鼠ゴス・黄ゴス・
白ゴス・この外何色にても色よき石ハ一週良く焼き
粉にいたし候へは薬に相成候 然とも何薬にても唐土
を和し申候へは 薬に流れ不申候 此御心得第一に
御座候

樂燒の方・青磁の方・黄色薬の方・同黄薬の方・赤薬
の方・餡色薬・黒薬の方・黒墨薬の方・白薬の方・艶
薬の方
繪薬の方・赤繪薬ハ弁柄二匁 唐土五分 阿膠・青繪
薬ハ岩緑青とにかわ 黒薬ハ黒ゴスとにかわ又鉄粉・
白薬ハ地薬 又浮出しには日の岡石一匁 唐土一匁
にかわ 黄薬ハ丹朱 雄黄・紫繪薬ハ代赭石二匁 弁
柄一匁 唐土二匁 略

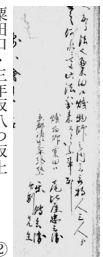
③ 樂燒藥法
都而艶薬 唐土百目 白玉十匁 日の岡石三十八匁 或
三十匁 古く見せ候時ハ白玉不入 地薬・赤下地・黄・
青・黒・青磁・萌黄・ゴス黒・白緑青青磁・土ノ煉様・
金ノ圖 略

小高文貞秘藏とあり、全文は「千家樂燒古實附陶器
出処書」と同。文貞傳は江戸川区天台宗光福寺に
「小高文貞」とあるが、同一人物か否かは不明である。
乾山工夫の豊後土の使用を記述。江戸に於ける初代
陶法の活用には二代次郎兵衛伝書の流布を推定する
が、「古く見せ候時ハ白玉不入」とあり、古物の風趣
には白玉を用いないことが知られる。
乾山・孫兵衛、伝統的な京焼内窯絵具は、文政期
はや古式の細法とみられていた。唐土・白粉は釉薬の
流れを促進、活用には心得が必要である。

④ 『本電樂燒唐物藥秘方全』…井上傳・『深川江戶記』加藤傳・『國勝傳』阿蘭陀
製薬院僧油 筆者・成立年代不明 京都府立京都孝・歴彩館



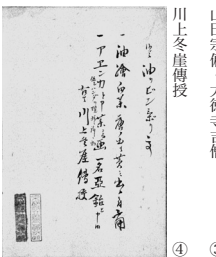
① 『本電樂燒唐物藥秘方全』表紙



② 栗田口・三年坂八つ坂上



③ 山田宗備・大徳寺吉備



④ 川上冬庵傳授

① 『本電樂燒唐物藥秘方全』
本電并樂燒唐物一番電燒付藥秘法
— 南京土・井上氏傳書 —
南京土足は作土なり、白薬下地引（以下略）

② 此燒物の法は先年御同連之御茶碗師九右衛門と云
者拵らへたる法也 栗田口燒物師之内二而取持人三人
方外二無之 何れにても此法ハ出来ズといふ事なし
燒物師栗田口 尾比屋忠兵衛
京都清水三年坂八つ坂上樂燒傳無別先生（略）

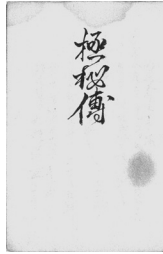
別法樂燒五色繪の具の法、深川江戶記
別法樂燒五色繪の具の法（略）

③ 甲黒薬之事 尾黒薬とも言（加茂川用石 略）
山田宗備 大徳寺吉備茶碗 此黒薬ヲ用ル也
— 別法色繪樂燒台方、加藤氏より書抜くる —
青・黄・赤・白・黒・萌黄・紫・白地薬（以下略）
白キチ焼付繪具・國勝傳書 —
猪口・茶碗・トクリ・小皿の類

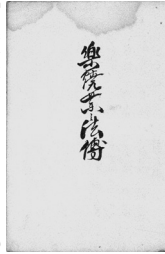
覺…とうかん堀越前守中屋敷燒物師粉裂所小川子平・
麻布廣ろふ燒物電師 今并燒物師二而毛造る電（略）
浅草駒形繪具問屋近藤、今戸すへ物土、今戸土器師一
瓶・通油町新道伊勢屋吉兵衛、又の問屋 繪具樂師
阿蘭陀製薬院僧油、辨原玄順ノ留一

別法蜜陀僧 同製法・詩繪の法 略 油繪油法
④ 一油繪白薬唐ノ土も黄ミ出候二付不用
— アエシカと申樂二面画一亞鉛（今す）ト申候但シハ
ンダラ燒様二致し候物 右ハ川上冬庵傳授

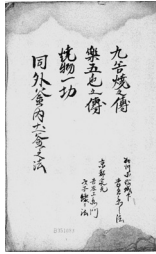
茶碗師九右衛門 尾比屋忠兵衛 樂傳兵衛は不明。
*山田宗備（一六二七—一七〇八）は宗旦門下の茶匠、
元禄二年から江戸深川に住す。
*大徳寺吉備とあるのは宗備悪意大徳寺一九五世
翠巖宗取（一六〇七—一六八四）と推定。翠巖は津田宗及
息江月宗玩物、大徳寺守松庵に住した。
*辨原玄順は江戸の蘭方医。
*川上冬庵は画家。南面も描くが洋画の普及に尽力、
下谷の文人らとの交流が知られる。



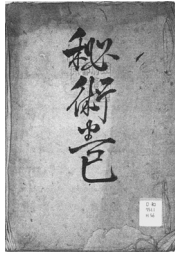
『秘術巻』表紙



九谷燒之傳・樂五色之傳云々



九谷燒傳
樂五色之傳
花物二功
同外釜内土釜之法



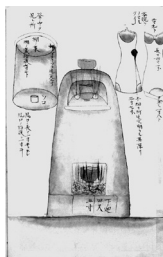
九谷燒傳
樂五色之傳
花物二功
同外釜内土釜之法

⑤ 『秘術巻』…『樂燒藥之法傳』『極秘傳』
筆者・成立年代不明 『樂燒藥之法傳』 明治廿二年二月紀銘 京都府立京都宇・歴影館

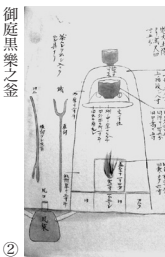
「秘術巻」『樂燒藥之法傳』『極秘傳』の三部から成る合冊本。乾山名はみられない。
*吉兵衛は、青木木米に従い加賀春日山窯、のち若杉窯へ移動した本多貞吉門弟、小松城下ハシハ夕町住鶴屋吉兵衛であろう（九谷陶磁史鑑）。
一つの色絵葉に対し、数種の調合例を記述するが、江戸期幕末の特徴の一つ。

- ① 『秘術巻』—
九谷燒之傳 加州小松城下吉兵衛之法
樂五色之傳 京都家元吉左衛門弟子譲り法
燒物一切 同外釜内土釜之法
加賀国九谷燒之法
同國小松城下ハシハ夕町吉兵衛ト申ス者ニ受
青之法・紫之法・赤七藏傳・燒接藥之法傳・同アトヒ
キ業・平助傳・鬼手赤傳・地赤之法・樂燒之法 墨之法・
赤之法・青之法・黄之法・紫之法・白之法・九谷赤之
法・飴青之法・紫之法・黄之法・青之法・茶碗早接之法・
樂燒カノ村々傳有之法 紫之法・白色之法・青地之法・
地ニ黄土ヲ引テ・燒接ノ傳・諸色早接ノ法
右之品々ハ京都松原御寺町西へ入ル所 大和屋六兵衛ト申所ニ有之候 藥何テモアリ
樂燒藥口傳法 黒藥之法・繪葉茶之法 (以下略)
- ② 『樂燒藥之法傳』—
紺青法 青之法、又青之法・黄之法・紫之法・赤之法・上引藥之法、白繪下地之法 (以下略)
明治廿二年二月本改之合分
上藥・又法、又法
- ③ 『極秘傳』—
陶器本焼上藥之法、繪葉之法・又法・又法・上藥之法・樂燒藥之法 醜口藥之法・青藥の法 (以下略)

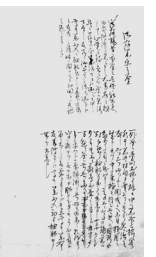
⑥ 『友古樂燒』…
筆者友古・成立年代不明 都立中央図書館加賀文庫



御庭黒樂之釜



御庭黒樂之釜



『友古樂燒』表紙



「友古」とは誰であるのか、不明である。
『陶器考』著者田内梅軒は米三郎「友古」と称したが、同一人物か否かは解らない。
ふいごを用いた炭窯における黒樂茶碗の焼成に応え、友古の法を以つてすれば高価な釉薬を用いずして釉肌の生ずることを説く。釉肌とは焼成によつて陶器面に釉の裏の表皮に似た細かな凹凸の現れることをいうが、楽焼などやきもの鑑定の見所として珍重される。

- ① 『友古樂燒』—
外之釜内釜圖
御庭黒樂之釜
御庭燒 昔ハ本釜モ是程ニ能出来候處 傳統と見え申候 大方名々秘して 心寛ニ致置候第 釜ハ矢張是ニ候得共 金樂法ヲハ 遠候事ニて有し 友古ノ傳處之法モ違申候 高キ樂不入ニ 袖肌出申候 御口(遙)達カ之御法も 友古之法 此間ケルト 不開トハ天地之臺ニ有之候
- ② 外釜ハ 壹町土椀ニ拵ル 中ハ黒谷ニて拵候 同形 若干黒メニ 村内方御買上ケニ候へ共 更ニ強クなし ニ二三ツ吹候で開 或へハ口付損用ニ成申ツ中 御茶碗モ同上ニ候へハ 同斷ニ而多分ニ御用ニ成不申 其の上ニ今の御焼ハ 黒ハ前而懸リ袖肌間違ニも出来申候 十カ十ケシタキ 其上ニ 疵旁不益ノミ有之候 右カマニテ百懸リ釜ハ二三ツ吹キ
- ③ 子ハシ御茶碗漸ク五ツ六モ出来候敷 然共昏疵キツ無キ所ガ 肌ケンタキニテ 不ヒ用候 〇太之御無益ニ有之候 其上高キ樂入申候 友古傳ニテハ 高キ樂不入 初ハ袖肌ヲ帯テ出来申候
- ④ 黒樂焼成の窯と窯底から室内側を見る図

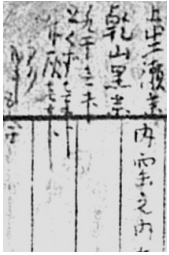
⑦ 『友古樂燒』…
筆者友古・成立年代不明 都立中央図書館加賀文庫

四、専門陶工による陶法書・その他

①『陶法手録』（仮題）（用箋に「米家調書」）
筆者青木米・文政元年（一八一八）頃・神奈川県立歴史博物館蔵（二階堂充）
真葛伝来青木米の『陶法手録』横浜美術館研究紀要 第五号（二〇〇三）所収



① 『陶器手録』表紙（仮題）



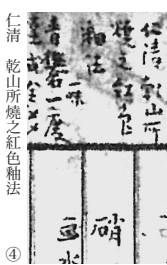
② 乾山黒染



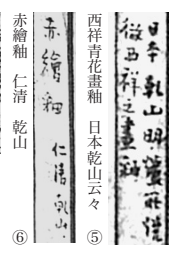
③ 乾山黒・左図は全頁図



④ 仁清 乾山所焼の紅色釉法



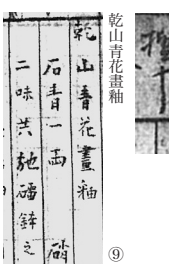
⑤ 西祥青花畫釉 日本乾山云々



⑥ 赤繪釉 仁清 乾山



⑦ 乾山 生瀬石十



⑧ 乾山 生瀬石十

① 『陶法手録』（米家調書）
（用箋折口下部には「米家調書」とある）
欄外書込
② 乾山黒染 *水下滑口□くず（鉄屑か）□
竹灰を升 *アク式升五合
（仁清伝来書調書・鉄釉）
③ 乾山黒 *柿十はいい 白染十はいい 石五はいい
萩染 藁十はいい アク十はいい 青染（以下略）
④ 仁清 乾山所焼の紅色釉法
青礬一味一度焼成金ハタ（か）紫紅二両
鉛粉二両五錢 共合成練之法
其製如紫紅（乾山の云う練礬）
⑤ 西祥青花畫釉 日本乾山明燧所焼做西祥之畫釉
杯上塗白土方
白土百日 俗云白繪土 産江州神樂江田郷 鉛粉百日
未燒ル成生杯 上以羊毛筆白泥三四邊塗 而後口明燧其
上單釉
白釉法 紅毛鏽
○鉛粉五両 硝粉五両 *石粉二両
又方

鉛粉三錢 硝粉一兩三錢 石粉一錢
書画而單釉者 諸器 陶冶之法也 西祥之於燒煉 限單
白釉而釉上以五彩 畫山水人物鳥獸燒成
⑥ 赤繪釉 仁清・乾山
⑦ 乾山 生瀬石十 餅灰か三（透明釉薬）
⑧ 乾山 生瀬石十 餅灰十（高火度焼成極白釉薬）
⑨ 乾山 生瀬石十 餅灰十（高火度焼成極白釉薬）
（難波染紙書）「手紙の写」に乾山白絵薬に「雪白」とある
⑩ 乾山青花畫釉
石青（呉藍）一兩 硝粉同飽釉末 フリット・未だ玉
になつていな）一兩五錢
二味共施備鈔之内 輕研不可 ヲモク研 耐用極艶釉
青用生研 以二味相交 星放キユヲ爲度久研 爲艶釉
則出火後得曇色

⑨ 乾山青花畫釉
石青一兩
二味共施備鈔之内
*竹灰・珪石 *アク・木灰 *柿・柿土・黄土のこと
*鉛粉・唐土 *硝粉・白玉
*石粉・日の岡石・流れ難い固めの釉薬を作る
*単釉・中国では単色釉薬、ここでは上葉・白釉をいう

『陶法手録』（縦二・一・三、横二・二・三）は文化・文政期、青木米米著の陶法書。「戊寅秋日（文政元年一八一八）・「甲申年五月試」（文政七年一八二四）・「文久二年（一八六二）夏改調合也」（別筆）とあり、上絵具の調合とその原料、製作、技法、名物香合などの模写を記録。

乾山焼に關しては白・黒・色絵具、阿蘭陀、画譜様式に興味を示された。阿蘭陀様式は本来白ざと光沢を出すため錫釉に浸し、それに色彩を施すデルフト様式・スペイン伝承のイスラム系錫釉色絵陶器が基盤である。

本米には自叙伝「上奥殿候書」が残る。奥殿は三州岡崎松田丹波とされ、二条城勤番中米米との出会があつたものと推測（船本菜之軒）。
同書には仁清に關し「陶車を能くするが釉曇りて光なく、乾山に關し「学西洋器之細法不能成。而纔得作杯鉢而已」雖然此等數人皆可稱名工」とある。

乾山焼の異国様式には中国・朝鮮・阿蘭陀・安南・宋胡録などがある。阿蘭陀様式は二代猪八も得意とした技法であるが、白塗り・青・黄緑具などに特色があり、当時の流行を加味、文人趣味、異国趣味に乗じて造られた。本米は『陶説』（朱笠亭著）を読み作陶の道に入るといふ。異国文化摂取の盛んな折、中国陶磁器焼成の工程、変化、原料にも興味を示し記録を残すが、晩年（一七八八）のちに真葛焼を興す真葛長造（一七九七〜一八六六）を弟子とした。『陶法手録』は横浜住長造四男宮川香山へと渡り、同所空襲によつて焼失したと考えられている陶法書である（二階堂充著「真葛伝来青木米」『陶法手録』についで（二〇〇三年）。真葛家による封印跡、書き込みもあり、同家には本米遺品が多く伝世。他の伝書数冊、香合土型三〇〇余、『陶説』版木もあつたと伝えられる。

『陶法手録』についで（二〇〇三年）。真葛家による封印跡、書き込みもあり、同家には本米遺品が多く伝世。他の伝書数冊、香合土型三〇〇余、『陶説』版木もあつたと伝えられる。

— 『髹米古瓷譜』 (『古器勸圖帖』)
都立中央図書館加賀文庫他



『髹米古瓷譜』表紙
古瓷譜 鉢・碗・皿など



① 『髹米古瓷譜』

『髹米古瓷譜』は青木木米の中国古陶磁器臨写集の複製本である。『古器勸圖帖』(出光美術館蔵)と題し富岡鉄斎の模本の附属した帖もあるが、木米の中国陶磁への関心を伝える資料として掲載した。

当書序文(今泉雄作)には、原本は角倉氏一方堂旧蔵、大正一〇年その写本を刊行。「髹米」は木米の号、窯焚きによって耳が不自由になった故と伝承。木米窯には轆轤師岡田久太の名が知られる。

② 同書掲載の鉢・碗・皿・壺・火入他の臨写図である。山水・人物・禽獣画がみられ、「永樂年製・大明嘉靖年製・大明成化年製」などの紀録、「五良大甫呉祥瑞造」など作者名、「百子堂・壽・福」などの文字や漢詩が認められる。『平安名陶伝』(藤本十九郎著・大正一〇年刊)によれば同譜は「古器観」とある。『陶法手録』と同じく文化五年頃からの模写と推定されているが、加賀春日山滞在中に始まると推測、古器・名器を目にする機会に恵まれたことに関係するかと考えられる。

中国古陶磁器模写の画帖のほか、『天工開物』(佩文齋書畫譜)など出版物を写した抄録も伝承。調合における原料の試作、宗教・医学・窯業を一つのユニットとした道楽にも興味を示す。

春日山窯時代、同窯陶工のちの窯主松田平四郎(元壺)による木米陶法『陶器總録』も現存するが、詳細は『平安名陶傳』(藤本菜之軒著)に掲載されている。

② 『陶器總録』…青木木米陶法 筆者松田元壺(馬米・文化五年・文化五年戊辰申夏改控・同一〇年・二年戊辰(二八四) 藤本菜之軒著『平安名陶傳』木米 大正一〇年刊所収

— 『陶器總録』 —

日本記神代卷 和名鈔 延喜式 陶土之部…一京三條雜記 岡崎ノ土志斗 大日交四升 一同南京物 一南蠻土(以下略) 一仁清土

セキノ一斗 山ノ上一斗 二俣石四升 クワンノウルモノニ妙ナリ(以下略) 袖之部…青磁輪・人形手・瀬戸釉・澀紙・瑠璃南京釉・紫口俗ニ云口紅・瀬戸青釉(以下略) 金壺(錦壺)…赤繪・金・魁手ノ青緑・萌黄(略) 一仁清黒土釉 赤口押二八ノ日壺瓦増 唐土拾瓦 白玉瓦 呉又瓦 日瓦貳瓦 已上火ニ入ル心得之事…交趾・青磁土窯ニテノ燒方 一乾山仁清ハ 押エカケサヤ(以下略) 文化十年西六月窯甚宜布出来ノ加減也

薬ノ法…袖百日懸切茶碗・黒袖百六拾目(以下略) 三段薬…(窯積の場所に従い釉薬の調合変化) 一赤 高タイ唐土拾瓦 日丘四瓦三分 トウ土拾瓦 丘四瓦 裏土拾瓦 丘三瓦七分 一黒 高タイ白玉拾瓦 カモ六瓦五分 トウ玉拾瓦 カモ六拾瓦 ウチ玉拾瓦 カモ五十五瓦 一白エ 白エ百目 白玉八十目 唐土廿五瓦

右樂乾山ノ白二用ル也 金壺モノ又法 白エ一升 玉七合 日丘貳合 一白エ上葉白粉十瓦 丘五瓦五分 玉三瓦五分 乾山紺青(本窯用調合 内窯は相異する) 紺青十瓦 摺事無用 白玉十瓦 ヨクスル事(以下略) 樂窯寸法…

ウチ窯 金サシウチノ口五寸 立四寸五分 外窯 内ノ口八寸五分 立九寸五分 金陵陶工松田元壺懷書

『陶器總録』(藤本菜之軒著『平安名陶傳』木米 大正一〇年刊)は、表紙には「文化五年戊辰申夏改控」裏表紙に「金陵陶工松田元壺懷書」とある。加賀・春日山において作陶指導に当たった木米の陶技・陶法を、弟子(窯主)であった松田元壺が記録(文化一〇年西六月)であつた松田元壺が記す(文化一〇年西六月)改て文化一二年戊の年より)。同家蔵とした陶法書である。

土、釉薬の調合、楽焼・肥前焼、窯と窯入、寸法が中心、京焼の特質、仁清・乾山の作陶・釉薬に触れるが、仁清は土・金壺(錦壺)・窯入れのサヤ、乾山は絵葉中、白絵・紺絵・サヤについての記述があり、素材・調合の多くは京焼主体。南京・交趾・高麗・南蛮・宋胡録などの記載がある。

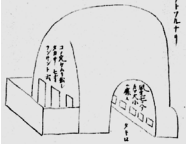
松田元壺は松田平四郎、馬米・帝慶齋と号し、俳諧を嗜み、九谷焼春日山窯の陶工のち窯主となる。文化三年、木米は殖産興業の一環として加賀藩に招かれた。翌年本多貞吉を伴い再度訪れ、金沢卯辰山麓に廃絶中の窯を改良、作陶を始めるが、初窯の後金沢城二の丸を焼く大火に遭遇。窯は藩營から民営へと切り換わり、木米は帰郷。貞吉らは残り、木米様式の青磁・絵高麗・交趾写などを製作。が、同八年貞吉も若杉窯へと移動。文政初年頃には春日山窯は廃窯となる。黄・紫・緑・上葉は押し小使に近く、文化頃までは古式、ビードロ不使用の調合がみられる。原料は全国共通、が、木米には自らの試作・試用の原料もある。

③ 『陶器指南』

陶器指南

子切、陶器、製、多、好、
ノ、備、州、三、田、住、神、田、某、其、功、ヲ、サ、レ、ハ、
遂、ニ、陶、器、ヲ、製、ス、ル、事、ア、タ、ハ、ス、故、ニ、
多、年、其、分、量、始、終、ヲ、試、シ、製、陶、ヲ、好、ム、人、ニ、示、サ、ル、為、細、ニ、
奥、儀、ヲ、記、取、ス、ル、事、シ、カ、リ、文、政、十、三、年、寅、春、洛、南、欽、古、
堂、と、ある。内、窯、の、材、料、給、具、窯、図、交、趾、本、窯、の、地、土、
上、業、窯、図、陶、法、素、焼、と、窯、図、陶、法、が、記、述、さ、れ、た。

陶器指南
文政十三年寅春洛南欽古堂



素焼窯圖



本案内積様略圖

① 『陶器指南』

欽古堂龜祐(二七六一—一八三七)の著した陶法書である。「文政戊子夏日可亭道人信識」「文政十三年寅春洛南欽古堂」、奥書に「諸物藥繕具合所平安城伏見街道一ノ橋下ル欽古堂龜祐文政十三年寅春仲秋焚刻」とあり、序文には、素材となる土・石、諸薬の割合・分量を知るの必要があり、製陶を志す者の手引書となるが、極めて専門的な要素を含み、五〇項目に分別、地土・給具・窯と窯積などを図示・解説をする。素人陶芸を対象としながら窯と窯道具、その調整など専門陶工の必須とする内容であり、筆者龜祐の知識・智慧が披露される。文政一

一年可亭道人(伏見福荷社)は序に、焼法のみならず諸陶器の製悉に盡し、作陶者の黄金の竿と述べる。同一三年自序には、「子幼キヨリ陶器ヲ製スル事ヲ好シニ攝州三田住神田某、其功ヲ試ミン爲ニ陶器山ヲ其所ニ開、連綿タル事已三十年、総テ陶器ハ土石ヲ心トシ銅鉛或ハ塩灰ヲ糲トス、然レトモ、其土石并諸藥割合ノ分量ヲ知ラサレハ、遂ニ陶器ヲ製スル事アタハス、故ニ多年其分量始終ヲ試シ、製陶ヲ好ム人ニ示サル爲、細ニ奥儀ヲ記取スル事シカリ、文政十三年寅春、洛南、欽古堂」とある。内窯の材料・給具・窯図・交趾、本窯の地土・上業・窯図・陶法、素焼と窯図・陶法が記述された。

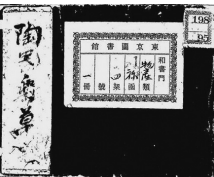
② 素焼窯圖、圖ノタキ口ヨリサシ木ヲ以テヤク、スヤキ一門ニ火ノハリシトキ、風クヨリ風ヲ入、其時至マテキ口ヲ、密セキヲリシトナリ、風穴七ツカマ大小二応ス、タキ口、コノケムリ出シ、タカサツカ(略)

③ 本案内積様略圖、奥天・中天・火天・シノ・大ヌケ・中ヌケ・火小・火中・火地・中地、云々

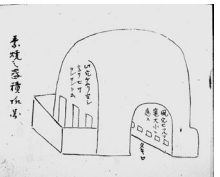
可亭道人(二七九一—一八八七)は羽倉可亭、京都伏見福荷社司。江戸下向、大窪詩仏の門下となる。

④ 『陶器樂草』

陶器樂草



『陶器樂草』



素焼窯圖



本案内積様略圖

此書与刊行陶器指南云々⑤

② 茶館庵(雨森芳野)天保三辰年菊月・嘉永元年申年再寫之、卯月義方花押

一箱上業
二百日
二箱上業
二百日
三箱上業
二百日

此書刊行時、諸君大に賞讃、
詳盡抄書以制筆者、
日對校書、
其、
也

① 『陶器樂草』

『陶器樂草』は、著者茶館庵、写者義方、昭和四年『隨筆文學選集』に公刊された。図書館へは明治一六年(一八八三)国学館(雨森)・芳野が寄贈、同家蔵書印が残る。

村田珠光・千利休を挙げて茶の湯の創始、風流を語り、素焼は交趾焼の写しに始まるとし、玉水焼、二一・空・任土窯にも触れるが、陶技、釉薬の配合・割合は陶工の秘事である。容易に他者の知り得る所ではないが、幸いにも筆者は伏見に勤務中馬術の友人松下堂(馬淵右衛門)所持『陶器指南』の写本を借り、書写をする。次いで伏見住欽古堂龜祐に便りをし指南を受けるが、興味は増すなどさらに五条通建仁寺東に入る仁阿弥(二代高橋道八、四条川東大和橋上ル処木左・青木木米の門を叩き、技を磨き師伝を得る。

② (当二冊は予が)「からにあらすゆめゆめの人に傳ふべからず。秘して家藏とす」さきものなりき。茶館庵、天保三辰年菊月、嘉永元年再寫之、卯月義方(花押)

③ 素焼窯圖、本案内積様略圖、龜祐著『陶器指南』の写しである。

⑤ 此書与刊行陶器指南、大同而較加詳盡抄書以刻彼書者、他日對校盡其、
也

同書を所持した雨森芳野は通称高蔵、号琴州・高斎・櫻舎、江戸期の国学者。

⑤『彩色繪具皆傳』…筆者尾形周平・天保五年(一八三四) 賀集珉平家
『珉平焼とこの系譜 賀集珉平から忘吾園窯まで』淡路島美術館

―『彩色繪具皆傳』―
尾形空仲子相傳

赤繪具皆傳
赤 弁柄巻匁式分 白玉拾文目
赤 白玉拾文目 唐土式文目

萌黄 白玉拾文目 唐土同断 石巻匁
口青三式文目

紫 唐土十文目 白玉同断 石三式文目
唐土三分
唐青七文目 唐土四分目
唐土四分目 白玉拾文目

黄 唐シロメ三分
唐土同断 石式分五リ

黒骨書 吳州拾文目 唐土式匁五分
草柳 モヘギ合セ五匁 キ式拾匁 合法
淺黄 ルリ十匁目 モヘギ式文目 合法

金 泥老分 ホウシヤ式厘五毛
箱 上消 ホウシヤナシ 消椽口伝
右側にも極しごしらし

振箱青 紺拾匁 唐五匁
唐土入 唐土入候而相用候事

南御氏江 甲午秋良日陶工 尾形空仲子(印)

周平は摂津桜井里焼、和泉貝塚願泉寺焼、播磨東山焼、淡路へ渡り加集珉平焼の指導に当たると、授与した『彩色繪具皆傳』は京焼清水五条坂の陶法であり、多くは錦手繪具の調合である。

『彩色繪具皆傳』は京都五条坂陶工尾形周平(二七八一―一八三九)の著した繪具の調合秘伝書である。「甲午秋良日陶工尾形空仲子(印南御氏江」とあり、「空仲子」は周平の号、「南御氏」は賀集分家珉平を表す(賀集珉平と珉平焼)。京焼陶工尾形周平より、淡路島珉平焼創始者賀集珉平が受理した伝授であるが、天保五年(一八三四)、周平は阿波藩(蜂須賀藩伊賀野村の陶工賀集珉平の依頼を受けて阿波に渡る。一年半を滞在、作陶指導に当たると、珉平には陶技を伝授、その旨を証して「珉」の一字、秘伝とする調合書を伝授する。

珉平(二七六一―一八七)は、幼名を豊七、のち三郎右衛門を名のり、学問を修得。芸能に親しみ、殖産興業・淡路の開発に努めた人物と伝承。文政六年(一八三三)島内池之内村浦本に粘土を発見、珉平焼を創始するが、没後、は、珉平弟恒左衛門(男三平)と一八九九が継承。仁清・道八ら京焼様式、交趾・金欄手・染付・青磁他の中国様式、絵高麗・安南・阿蘭陀様式など、多種多様な作品が伝世する。

『彩色繪具皆傳』は、周平の伝えた調合書である。五条坂窯『本多佐平所持日記』の調合にほぼ同一、佐平は同日記に「周平古赤画」と記しており、五条坂の陶工仲間、その往来を推測する。周平は江戸向島佐原菊場開窯の隅田川焼に関与。尾形乾山から「尾形」姓、伝書「光悦より空仲子」を号としたか。ともに乾山に関わりをもつが、授与した調合は五条坂陶家の陶法である。

⑥『本多佐兵衛所持日記』…筆者二代本多佐兵衛(佐平)・天保七年(一八三六)頃
『京焼百年の歩み』藤岡幸三編・一九六二年所収

―『本多佐兵衛所持日記』―
○「天保七年申林鐘吉伴」
○丸屋佐兵衛所持 天保九年戊戌歲林鐘吉伴
○「語曲扣帳」

○繪具の調合
赤画・青・紫・紺青・木古赤画・周平古赤画・紅赤画・黄・黒骨書・ルリ・盛上々・白繪・黄(二種)・青・鶯・水色紺青・キビ色・トケ色・赤染吉左衛門(下地上裏)・道八上葉・黄瀬戸・五合紫・熊川上葉・道八清黒・道黒葉・美の勘・江戸紫・桃色下白・白画合・青磁・土焼黒葉・萩・青磁・鎗葉・瀬戸葉・朝鮮葉・人形手青磁・南蛮ノ内の葉・同南蛮外の葉・松本萩・古萩・真伊羅保葉・真井戸・南蛮土・魚屋土・画唐津・真伊羅保・古剛毛目土・魚屋土・天津土・南蛮土・南蛮土・魚屋土・御本半洲・朝鮮唐津・真井戸・青井・ふるい粉・繪フゴ・熊川・金海・古萩・古三島ふるい

○燒附諸色伝書
赤繪・紫・モヘギ・同・モヘギ・ルリ・黄・黒・モヘギ・紫・赤繪(二種)・桃色合方(二種)・右盛上ヶ葉・紫・青・黄・ルリ・黒繪
○本窯葉伝書
青磁七貫之手 一播陽姫路家御領・同法同領岡村之産

『本多佐兵衛所持日記』の筆者本多佐兵衛(丸屋佐平)は京都五条坂焼の陶工。同書は天保七年頃に纏められたが、寛永一八年(一六四二)清水・五条坂では丸屋庄兵衛が音羽屋惣左衛門の名跡を継承して、丸屋は二代目にして没落、門人であった本多佐平が相承し、屋号丸屋を名のると伝承。京都では寛文年間(一六六一―一七三三)茶の湯が盛行、高麗茶碗とその模倣が評価を得るが、貞享年間(一六八四―一八)を連羽二重)にも山城国名産品として名を馳せ、茶器の使用は『福興記』にも記録が残る。五条坂は粟田口焼とともに京焼主要の窯場であった。高橋道八・仁阿弥・周平など、のちには清水六兵衛・和氣龜亭・水越与三兵衛らが活躍。文化年間には磁器製作にも力を入れる。

当日記は(縦八、〇横一五、〇)、本多家二代佐平(佐兵衛)所持の語曲帳である。天保年間(一八三〇―一八四四)の活躍が知られ、金欄手、色絵などの茶道具類を製作。「諸事控」「語曲扣帳」なども残すことが、勘定書、暮らしを伝える献立などを記す。絵葉書に関しては、赤色には木末古赤画、周平古赤画、赤黒・土焼黒葉・瀬戸黒など、黒葉・道八・清黒・土焼黒葉・瀬戸黒の合方があり、「焼附諸色伝書」には桃色合方、「本窯葉伝書」には青磁七貫手など、陶家・陶工の秘伝が記録。数寄者・素人陶芸家のために記されたものではない。

⑦『樂焼之口傳控帳』・筆者奥田木白・天保六年(一八三五・同八年改)『家傳書』初代木白口述・二代奥田佐兵衛筆記(『郡町史』)



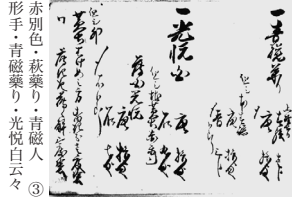
天保六未五月ヨリ 表紙①
樂焼之口傳控帳并二石焼・同
八西五月改



黄いらほ薬云々
②



①



③



高橋隆博著「赤膚焼奥田木白の陶法書」所収



④ 裏表紙
木白・奥田武兵衛裏表紙④
三十八才(陶器異銘) 木々齋・木白(印)

① 『樂焼之口傳控帳』
天保六未五月ヨリ
樂焼之口傳控帳 并二石焼
同八西五月改

② 一黄いらほ薬 日の圓式匂 飴四匁 唐土八匁
上塗調合
同八西五月改

一白樂 石式匂 唐拾匁
但し素焼迄二黄土こゆく塗事
上塗方同断

一赤別色 黄土式匂 赤續藥り五分
上塗藥り前同断

一秋藥り 白地藥り志匂 赤々藥り五リン
下塗り
但し上塗り 唐土拾匁 石三匁

一青磁薬り 下塗り飴三匁 青續藥り五リン
但し上塗り同断

一青磁薬り 上塗り青繪彩分 唐拾匁
但し本青磁 唐拾匁 青三分 右同断

一光悦白 唐拾匁 石九匁
但し地黄土赤薬也

薄白光悦 唐拾匁 石七匁 右同断
但し外
黄土はけめの方こゆき分毫度塗
同 薄き色薄く解三度塗

④ 裏表紙
木白・奥田武兵衛 三十八歳
陶器異銘 木々齋 木白(木白印)

『樂焼之口傳控帳』(縦二〇・二寸、横一六・二寸)は、赤膚焼陶工奥田木白(一八〇〇〜一七)の著した自筆陶法書である。表紙に「天保六年未五月より樂焼之口傳控帳并二石焼同八年西五月改。裏面に「冠山奥田武兵衛三十八才陶器異名木々齋木白(印)」とある。

天保元年から同八年までの記録であるが、「子十一月四日赤膚山において」とあることから、覚書・手控の類と推定される(高橋隆博著「赤膚焼奥田木白の陶法書」)。

釉薬・絵具の調合・粘土・焼成方法などを纏めたものであり、楽家歴代由緒書・周斎傳・奉納茶碗圖・注文表・五条山赤膚焼業方・御用付入用・瓦屋安伝云々の記載がみられる。別書「家傳覚書」の原本となったことが知られ、『家傳覚書』は嘉永三年七月頃から慶応元年頃の成立、木白口述、子息佐兵衛筆記と伝えられる。

赤膚山、五条山には良質粘土が出土した。やきもの産地として古くから瓦・土器を生産。鎌倉末期には火鉢などを造り、室町期には座を設けるなど、南都寺院、その他界限に製品を納めたという。江戸期には茶の湯が流行、奈良土風炉が求められ、西ノ京には春日神社の御用を勤めた西村善五郎代々の名が残る。その後の窯業は不明となるが、転換期は寛政頃と推測され、藩主柳沢保光(龜山)の時代を迎える。京都清水からは京焼陶工が移住、治兵衛ほか三軒のやきもの師の活躍が伝承。赤膚焼の再興に努め、同地に京焼様式、色絵陶器の技術が伝播されるが、木白の作品にも仁清様式・楽茶碗、阿蘭陀、異国物様式などの作品が伝世する。木白は、幼名龜松、

のち佐兵衛、武兵衛を名のる。先代以来、質・炭間屋、「柏屋」を営む郡山藩御用達商人の出自であったが、「木白」は屋号の「柏」に因み、併号、陶器の異銘として使用した。天保六年樂焼を始めとし、樂家歴代、光悦への興味

が窺われるが、色絵調では仁清・萬古、赤絵様式、さらに秋焼のほか唐津・織部・瀬戸・備前焼など多様な製品が伝世。乳白色の秋釉に、興福寺の薪能など能絵を描いた奈良絵の装飾は赤膚焼を代表する図様となる。

高橋隆博著「赤膚焼奥田木白の陶法書」所収

冠山・奥田武兵衛裏表紙④
三十八才(陶器異銘) 木々齋・木白(印)

木白・奥田武兵衛 三十八歳
陶器異銘 木々齋 木白(木白印)

木白・奥田武兵衛 三十八歳
陶器異銘 木々齋 木白(木白印)

木白・奥田武兵衛 三十八歳
陶器異銘 木々齋 木白(木白印)

木白・奥田武兵衛 三十八歳
陶器異銘 木々齋 木白(木白印)

⑧『赤絵師南』…筆者 書画を含む 福原播舟・天保五年(二八三四)刊 国立国会図書館蔵



①



④ 繪之具製法の圖



② 描杯中赤繪の圖



⑤ 金箔解し法并二圖



③ 燒成図… 常定貫兩直燒贈太白杯



⑥ 金口鑄かけの圖

① 『赤絵(繪)師南』 目録

繪の具制法の圖

二ウボウの圖

黒藥の法

蒼藥の法

紺青藥の法

黃藥の法

紫藥の法

光澤藥の法

光澤置揚藥の法

光澤無置揚藥法

赤藥の法

水晶二ウ棒の圖

草色大赫の法

金箔解法并二圖

金口鑄懸の法并二圖

釜燒方并二圖 以上

③ 黒藥 青貝州壹匁 繪の具屋にあり 白玉六分 唐の土七分 是は井上印か高松印がよろし

④ 右二種を圖のごとくにして製し 水を入れて 又能摺り 極細末に成た時 膠水を入れ遣ふべし

⑤ 唐の土二匁五分 綠青七匁 板ながしと云がよろし 日の間六分 是ハ火打石の類なり 白玉二匁

⑥ 右の四種を前のごとく製し 水を入れてすり 又ふのりを入れて遣ふべし 尤ドロリとするくらいにときて彩色すべし

⑦ 右製方蒼藥の如くふのりを入れてドロリと解て彩色すべし 燒あがりて 本色をあらハすなり

⑧ 黃藥 唐の土貳分 唐白目六匁六分 白玉五匁六分 右製方 とき方 前におなじ

⑨ 紫藥 紫貝州壹分 日の間七分 唐の土貳匁五分 しら玉壹匁六分 右まへに同じ

⑩ 光澤藥 此藥を黒かきの上へぬりて燒は うるしにて塗りたる如く つやいづるなり

⑪ 光澤置揚藥 唐の土貳匁五分 綠青貳分 日のおか七分 白玉壹匁八分 右まへにおなじ

⑫ 光澤無置揚 しら玉三匁 唐の土一分 日の間四分 信樂土五匁又しら玉ともいふ 右前におなじ

⑬ 赤藥 弁橋四分 是ハ光明印ト云がよろし 唐の土六分 白玉壹匁 日の間貳分 右是ハ黒藥と解方同じ 膠水にてとぎ ふのりハ入れ べからず

⑭ 草色 是ハ蒼藥と黄くすりヲ合せて用ゆべし

⑮ 大しや藥 是ハ赤藥と黒藥とを合せて用ゆべし

⑯ 金箔解し法并二圖 描杯中安謝繪之圖 我ものにして樂ん雪月花

⑰ そのいろくは 唐にしきともたとふへき まくにこさむのつに流たや山もみち

⑱ 常定貫兩直燒贈太白杯 予としころ二此道の金境に入れば よき程とて目出たし春の雪 做土佐持監職人尽圖并貴

⑲ 繪の具製法の圖 井にうぼうの圖 圖のごとくしてすりをこなすべし 茶碗ハあつての方よろし

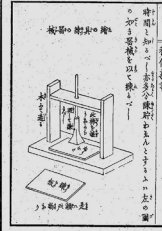
⑳ 金箔ハ はたと云て丸箔のたち落しを買べし 目方は巻刃にて大我四拾目位也

㉑ 如圖中指にてけすべし 圖のごとく一しつくづつ 中指の先にてたむべし 尤氣を長くすべし

㉒ 金口いかけの圖

『赤絵(繪)師南』(縦一八三寸、横二二、七寸)は、福原播舟書画による陶法書。巻末には甥嘯月の跋がある。天保甲午(五年・一八三四)刊。内裏陶器・樂焼関係の絵付と様式、釉藥、絵具、金箔と解し方などを記し、俳句・漢詩他の書が添えられている。緑青に関しては井上印・高松印・板流しなど、『樂焼秘書電圖附』に同じくする内容を確認。乾山の指摘した仁清の黒藥、葉を描いて上を絵具で留めるとした絵藥の記述もみられる。別書であるが、年代・行方ともに不明『南條治郎左衛門相伝陶器秘傳』(陶器錦繪燒付極秘傳)、『樂焼秘傳』(南京和物古物極秘傳)を含む)と題した薩摩平佐焼に関係する伝書も残るといふ(『繪具染料商工史』)。

明治時代 ⑨ 『陶器焼付画工秘傳新書全』



外釜図とかわけの素焼図
墨墨を用いての焼成図

②

『陶器焼付画工秘傳新書全』
「繪の具練の器械」

①

① 繪の具練の器械、亦多分練野丸んとするにハ左の圖の如き器械を以て練るべし
筆ノ用法、陶器ニ書畫を爲さんと欲せば、圖の如く筆を堅く握りて書べし、若軽く持ちて画か際ハ其筆の毛烈しく當り、筆に付いたる繪の具を引に自在を得ず、故に堅く握りて遣ふべし

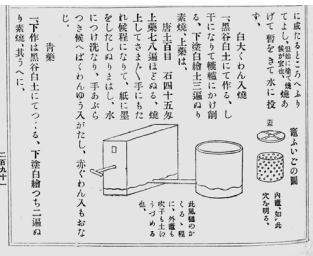
② 右内釜を外釜へ入れて焼なり、其圖左の如し
かわかけの圖、外釜の内釜へ入たる圖にて、已に外釜の下の五徳の上に備置り、中へ松墨を詰、是れを火に起し、如く、い印より印（以下略）

1、調合の第一の有用品は白玉である。陶器の元素にして緊要。練り加減、煮皮（膠）の解き方が重要とある。白玉は鉢・乳棒をもつて一五日間、試みに練る場合は一〇時間ほどとある。

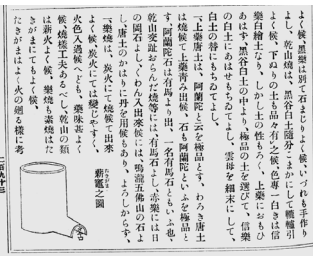
3、花瓶の絵付は口を機械に差し込み描き、大皿の場合には板を口縁に差し渡しにして描。

4、焼成は墨窯では松墨を使用し約四時間、焚窯では松薪を用いて五時間とある。

大正時代 ⑩ 『陶工秘藝』（雜藝叢書）第二



樂燒製方傳・赤樂・黒樂・青樂
窺ふいごの圖



乾山燒、交趾、青磁・桃色など
② 樂燒の原料、調合ほかを記述。卷末に「樂燒記」(山田安樂感)には歴代樂家系譜がある。

陶工秘藝一名樂燒製方傳
① *赤樂土拵下作并樂調合是法... (略) 下地は黒谷赤土。しら干後削り、黄土を二度下塗り(黄土が濃いほど赤味が増す)。上薬を掛け焼成。下塗りなし、賀度河黒石百五十四硝子目地、焙硝五匁、火勢強くせば焼き上りない。為に白土を用いる。
*白大くわん入焼。白繪土を塗り素焼。上薬を掛けて焼成。紙に墨を浸しそれを塗り、水に浸し洗う。
*青樂。下作は黒谷白土。下塗白繪つち二遍塗り素焼。次に「緑青四十匁、唐土百目、石三十五匁」合わせ二、三遍塗り、上薬を二遍ほど掛けて焼成する。
② *乾山燒
下作りは黒谷白土にてつくる、しら干になりてろろに掛け削る。下塗白繪土三べんぬり素焼、其上になににも色繪をつける也。色繪樂は別にけず、上薬は唐土百目、石三十五匁、焼あげて水につけず。
*乾山燒は黒谷白土随分ごまかにして轆轤引(略)
*上薬唐土は阿蘭陀と云ふ極品とす、わろき唐土は燒候て上薬青み出候。石も阿蘭陀といふを極品とす。
*阿蘭陀石は有馬より出一名有馬石といふ也
*乾山交趾おらんだ燒等には、有馬石よし、赤樂には日の阿石よし、くわん入出来候には、鳴瀬五佛山の石よし、唐土のかはりには丹を用候もあり、よしからず、
*素燒は、炭火にて候候て出来よ候、炭火にては變じやすく、火色入過候へども、藥味甚よく候。燒様工夫あるべし、乾山の類は薪火よ候。樂燒も素燒はたぎがまはよよく候。
*ゴスは渡りものにて、長崎よりくるもの也。伊萬里燒の染付繪は、みなゴスにて繪がよくし、乾山燒にもちりては紫となる也。火の強弱による歟。

『雜藝叢書』は三田村鳧魚・朝倉無聲編、享保から安永までの庶民の娯楽、見世物研究の資料を集成、『陶工秘藝』はその内の一卷であるが、樂燒は室町末期以来茶の湯者には必須の道具。陶工以外に雅致ある樂燒を志す者のため、その製法を説いた一書とある。

—陶法書の手本『百工秘術』『樂燒秘囊』—

『百工秘術』（享保九年刊）

「磁工門」目次

磁器下地土こしらへの秘術

井二土の出所

茶わん諸道具つくる秘術并手製の法

素焼の上薬（并二素燒釜ノ圖）

磁器上薬をかくる秘術

磁器藥の秘方 水薬随珠方

秘傳上薬玲瓏方 水海玲瓏方

上薬をかけて後焼たつる秘術

上薬土によりて（色）變する事

赤色の磁器の秘術 赤樂燒等は也

黒色上薬の秘方（黒樂燒等は也）

秘傳黒藥

鉛色藥

秘傳本樂燒

磁器くわんにうを出す方

磁器繪の具つかひやう

『百工秘術』は、享保九年（一七二四）刊。三巻から成り、序文「享保癸卯秋八月八日」下巻末尾に「享保九庚辰歲孟春吉旦」、作者は「東武入江直庵」とある。江戶期の生活全般に涉る技術、その他を記載。智・器・食・女・磁・雜工門、附録に分類、日常生活に必要な知識・常識が纏められた。

磁工門では、やきもの製作に関し先ず土拵えを専らとすること、土の出処を秘することをもって家々一流を造り出すとある。只今の樂燒類を素焼と称し、内薬を裏釜と記すが、釉薬などノ圖石を用いて、代わりて研砂を用いるなど、水海方においては硝子粉を使用、後の釉薬調合との異なりをみせる。

『樂燒秘囊』（享保一八年序・元文元年刊）

目次

一 器物作りヤウ 一 素燒ノ仕ヤウ

一 同數燒察ノ製法 一 本燒赤藥ノ法

一 土ヲ製スル法 一 秘ヲ作ル法

一 火ノ色見ヤウノ法 一 紅梅手ノ秘法

一 地藥秘傳ノ方 一 赤繪藥ノ方

一 白繪藥ノ方 一 萌黃藥ノ方

一 同秘法 一 黒繪藥ノ方

一 瑠璃繪ノ方 一 柿色繪藥ノ方

一 黃繪藥ノ方 一 一箇黃繪ノ方

一 黒繪藥ヲ製スル方 一 洗紙手藥ノ方

一 雲屯ノ方 一 玉虫色燒ヤウ

一 黒藥ノ方 一 青山黒藥ノ方

一 大口樂藥ノ方 一 尼燒藥ノ方

一 赤樂藥ノ方 一 黃瀬戸藥ノ方

一 紺柿藥ノ方 一 變萌黃藥ノ方

一 淺黃藥ノ法 一 膳餐藥ノ方

一 白なだれノ方 一 黒顏ノ方

一 青なだれノ方 一 輕浮ノ秘製

一 陶家用藥須知 一 樂茶碗圖式

樂燒陶法を伝える最古の製法書（二巻）である。享保一八年東々主人序に「陶道の秘要を釣。方法條件尤も精詳を勤む。命じて樂燒秘囊といふ」とあり、作陶に関する総合的な知識を記す。元文元年（一七三六）刊、著者は中田潛龍子、浪速の人である。趣味者には指導書、茶茶碗を重用する茶の湯者には手引書となるが、下巻には賦立・菓子の記事がある。後世、秘事・秘伝を大事とする書類の「手本」となり、右記の目次はのちの陶法書の目安、基盤として応用された。

—陶法書・伝書に記載された人物—

一、乾山名のある陶法書

（●：乾山焼初代口述二代筆記 ○：商人など）

●『内庵秘書』：好古・藤垣爐扇・樂吉左衛門・紋右衛門・乾山省古・近藤安治郎

①『錦齋集』：大塚白鷺齋宗實・信政齋為政・石原策次郎

②『樂燒秘傳』：大塚白鷺齋宗實・任土齋

○大坂道修町三丁目目小西与兵衛・道修町三丁目杵榎木小西与兵衛（商人買物獨案内）天保二年（一八三一）

○京島丸松原下ル吉野屋正兵衛・吉野屋庄兵衛鳥丸通松原下ル町（商人買物獨案内）天保二年（一八三一）

③『樂燒秘法』：京栗田口燒物師元祖九右衛門・京深草燒物師小幡佐五郎・山角六郎左衛門・杉弥左衛門・河田甚太郎・窪田助左衛門・矢部・朝比奈

○大坂屋村田宗清

○京からす丸竹屋町下ル西入わた屋徳兵衛むこふ白粉屋求馬

○二条通本明院百足屋小兵衛（商人買物獨案内）天保二年（一八三一）

○五条通伏見海道西へ入伊世屋出雲

④『樂燒藥法家々之傳寫・なんきんまり焼付繪具藥法集書』：窪田傳・遠山傳

⑤『樂燒秘傳全』：樂燒師李兵衛

○北久寶寺町繪具屋吉兵衛（現大阪市中央区北久宝寺町一―四丁目、堺筋には繪具屋・紙屋・木綿屋・砂糖屋、染手拭の商人がいたという「大阪商工会議所百年史」）

⑥『千家樂燒古實附器出処書完』：窪田助左衛門・小高文貞・栗田口九右衛門・深草小幡佐五郎

○大坂屋村田宗清

○京からす丸竹屋町下ル西入わたや徳兵衛（桃木町鳥丸西入綿屋徳兵衛）の向白粉屋求馬

○二条通本明院百足屋小兵衛（百足屋小兵衛二條東洞院東入萬繪具所畫筆書刷毛品「繪具染料商史」）

⑦『五条通伏見海道西へ入ル伊勢屋出雲清兵衛（京五條通橋東式丁目御用達伊勢屋）

○京都智恩院古丁目前古橋茶碗屋長兵衛（樂燒業誦道具）

○大坂北本町一丁目繪の具屋

○乾山名のない陶法書

①『樂燒秘書電附』：樂吉左衛門・飯塚宗助常秀

②『樂燒諸傳』：松田秀徳・渡邊政拳・尚友齋一心庵（證明寺老僧）・田邊弥三郎・石

野佐次右衛門

○皇都烏丸松原下ル吉野屋吉兵衛

○京都茶碗屋長兵衛・宮川長兵衛・江戸後期京焼陶工葛高長造（二七九七—二八八八）の父

③ 『樂燒藥方』・小高文貞

④ 『本電樂燒唐物藥秘方』・御茶碗師九右衛門・燒物師粟田口尾比屋忠兵衛・清水三年坂八つ坂上樂傳兵衛（無別先生）・井上傳・深川江戸記・加藤傳・國勝傳・禰原玄順・川上冬屋・今戸土器師

○とうかん堀越前守中屋敷燒物師粉裂所小川子平

○麻布廣ろふ燒物電師今井燒物師

○浅草駒形繪具問屋近藤

○通油町新道伊勢屋吉兵衛えのく問屋 伊勢屋吉兵衛本町三丁目通油町

⑤ 『秘術卷』・九谷加州小松城下吉兵衛・奕五色之傳京師家元吉左衛門弟子・七藏傳・平助傳

○京都松原御幸町西へ入ル所大和屋六兵衛（大和屋伊兵衛）

⑥ 『陶器樂草』（茶館庵・黒川彫）・義方・伏見街道一ノ橋下ル丹波屋龜祐・五条通建仁寺東入高橋道八（仁阿弥）・四条川東大和橋上ル木屋左平（末左）

三、専門陶工による陶法書

① 『陶器指南』（欽古堂龜祐）・可亭道人

② 『本多佐兵衛所持日記』（本多佐兵衛）・音羽屋惣左衛門・丸屋庄兵衛・木米・周平・樂吉左衛門・道八・仁清

③ 『彩色繪具調合書』（尾形周平）・南御氏（實業集平）

④ 『樂燒之口傳控帳』（奥田木白）・樂家歴代・大樋・了入・左入・道八・光悦・折部（織部）・周斎

○金銀粉大坂安堂寺町井池東入壽繪屋卯兵衛 創業慶応元年（二八六五） 壽繪屋卯兵衛純金箔時絵材料製造販売（繪具染料商工史）他

―陶法書概覧―

（●●乾山名のある伝書 ○●乾山名のない伝書 合冊本はそれ以前の伝書を含む）

○元禄二年（一六八八）『上々御樂帳』（高取焼）八郎重房著

○元禄三年（一六九〇）以降『酒井田柿右衛門家文書』（有田焼 柿右衛門著

○享保九年（一七二四）刊『百工秘術』三卷（磁工書）入江貞庵著

○享保一八年序・元文元年（一七三六）刊『樂燒秘囊』二卷中田潜童子著

●●元文二年（一七三七）『陶工必用』尾形乾山著

●●元文二年（一七三七）『陶磁製方』尾形乾山著

●●寛保末年・延享・宝曆頃（一七四一—一六三頃）『陶器密法書』尾形猪八伝

●●寛政四年（一七九二）萬古堂三世浅茅生三阿訶

●●宝曆一〇年（一七六〇）『内電秘書』（樂燒秘傳）好古樂記内二代乾山次郎兵衛伝

●●明和三年（一七六六）近藤安治郎著

○文化三年（一八〇六）『樂燒秘書電圖附』飯塚宗助写

○文化五年（一八〇八）『陶器総録』松田元寧著

○文政元年（一八一八）『樂燒藥方』筆者不明

○文政元年（一八一八）『陶法手録』青木木米著 文久二年（一八六二）改調合也

○文政七年（一八二四）『錦齋集』大塚白鸞齋著 明治三〇年（一九〇七）合冊本成立

○文政年間（一八一八—一八三〇）頃『樂燒秘傳』大塚白鸞齋著

○文政一三年（一八三〇）刊『陶器指南』欽古堂龜祐著

○天保三年（一八三二）『陶器樂草』茶館庵著 嘉永元年（一八四八）義方写

○天保三年（一八三二）『陶法書』（有節文書）森有節著か

○天保五年（一八三四）『彩色繪具皆傳』尾形周平著・『赤絵（繪）指南』福原掃舟著

○天保六年（一八三五）『樂燒之口傳控帳』奥田木白著

○天保七年（一八三六）『樂燒諸傳』渡辺政拳筆・松田秀徳伝来

○天保七年（一八三六）頃『本多佐兵衛所持日記』二代本多佐平著

○嘉永元年（一八四八）『緒方流陶術秘法書』三浦乾也伝 井伊直弼写

○元治二年（一八六五）『樂燒秘法書』朝比奈写（寛保三年・安永元年の年紀）

○慶応元年（一八六五）頃『家傳賞書』奥田木白口述・二代奥田佐兵衛筆記

○明治三年（一八七〇）頃『樂燒秘傳』好古樂記（合冊本）小林源兵衛編

○明治一七年（一八八四）『陶器機附画工秘傳新書』江藤時太郎著

○明治二〇年（一八八七）以前『秘術卷』筆者不明

○大正四年（一九一五）『陶工秘授書』筆者不明

○大正八年（一九一八）『樂燒傳授書』浦野繁吉著

●●不明『樂燒秘傳全』雜喉場樂燒師李兵衛著

●●不明『繪藥・釉藥配合帳』筆者不明

●●不明『千家樂燒古實 附陶器出処書』筆者不明

○不明『本電樂燒唐物藥秘方』筆者不明・『友古樂燒』友古著

○不明『樂燒藥法家々之傳書寫・なんきんいまり焼付繪具樂法集書』筆者不明

●●不明『樂燒方書完』筆者不明

附録・乾山自筆陶法書（乾山の陶法をより明確にできればと考え、附録として再びここに『陶工必用』を取りあげた）

『陶工必用』大概―仁清伝・孫兵衛伝・乾山伝―

仁清伝

黒谷土を使用、粘土板また削り出しによる成形、乾燥させて素焼をする。白化粧を施し、鉄（鏝）、呉須（染付）絵具を用いて下絵を描き、緑文様、裏面に銘・花押を入れる。本焼上葉を掛け本焼をし、その上に赤・青・黒・緑・黄・金彩などの色絵具を使用して、裝飾を施し、色絵用・錦塗に入れて完成させる。



色絵菊鶴図香合 フリア美術館

孫兵衛伝

黒谷土を使用、粘土板による成形、乾燥させて素焼をする。白化粧を施し乾燥させ、上に金ハダと呉須を混ぜた錆絵具、赤・青・緑・黄・金彩などの色絵具を用いて裝飾、黄土による印を施す。内窯上葉を掛け、内窯に入れて完成させる。



錆絵山水図額皿

色絵十二月和歌花鳥図角皿 MOA美術館



乾山伝

土は不明。素地は他窯の可能性もある。ロクロによる成形、乾燥させて素焼をする。白化粧を施し、上に黒絵具を全体に塗り、乾燥させる。文様描きには再度その文様を白絵具で下描きし、次いでその上に緑・黄などの色絵具を施すが、地色の濃い場合は青も白絵具が適し、その上に内窯上葉を掛け、内窯に入れて完成させる。

『陶工必用』は仁清伝・孫兵衛伝・乾山伝の三部から成り、仁清陶法において乾山は朱字を以って仁清の名の起り、仁清焼は専ら茶人金森宗和好みの茶器を製したこと、孫兵衛陶法では京都において楽焼創始に前後して押小路焼が始まったことなど、両窯の特質・歴史を述べ、それに連なる乾山焼の正統性を述べる。『陶工必用』がなければ京焼の歴史の一部は今日まで不明瞭なままであったと思われる。

一、仁清伝は、高火度焼成・本窯陶法。京焼土物・錦手陶法が主体。調合・配合例は土・本窯絵葉・本窯掛葉・錦手絵葉・楽焼葉の五種に分類。土物類は瀬戸の伝法、錦手色絵は京焼伝法とも言い換えられる。

二、孫兵衛伝は、低火度焼成・内窯陶法、軟質陶器の製作が主体である。内窯掛葉（上葉・絵葉。河南三彩・交趾焼写し、釉下色絵・錆絵作品）

三、乾山伝は、

1、仁清伝の絵葉・錦手絵葉とその改変。本窯・内窯ともに使用可能な白絵具（白絵土）・黒絵具の開発。写し物・錆絵染付・錦手色絵作品類。

2、孫兵衛伝の上葉・絵葉、地塗り色々。白絵具を軸として新色の開発、内窯・錦手内窯に使用可能な絵葉を考案。陶器に絵画的表現を試みる。

乾山は陶家の出自ではない。自由な発想、作陶が可能であり、斬新な新手法を試みる。門外漢であったが故に仁清家でも陶法を譲渡、孫兵衛も協力・参加。新企画の展開は購買者の興味を引き、専門陶工、同時に数寄者としての特色が顕れる。この両面こそ奇しくものちに來たる素人陶芸者の道標となるが、文人・趣味人、同時に陶工として仁清、孫兵衛の指導を受け技を磨く。乾山焼の特異性であり手本とされた理由である。

【仁清伝】〔陶工必用〕〔拔薬〕

- 本薬焼土の覚（おんやくまきつちのしるし）
- 一 黒谷土ニ山科石加へ水ヒ致候（くろやにやまかしのいしをまぜて）まぜ加減有土となミノ土ノ覚（まぜかへば）
- 五器手土（ごきでうぢ）
- 一 黒谷土（くろや）土（つち）いせ土（いせつち） 遊行土（ぎやうぎょうど）五升（ごしょう）ふるひ土（つち） 山科石（やまかしのいし）六升（むくしょう）いせ土（いせつち）ニメ（にめ） 右合（みぎあひ）作り候（つくりまはさむ）
- いらぼ土（いらぼつち）
- 一 黒谷赤土（くろやあかづち）壱斗（いちと）ふるひ（ふるひ） 遊行土（ぎやうぎょうど）五升（ごしょう）ふるひ（ふるひ） 山科石（やまかしのいし）三升（さんしょう）ふるひ（ふるひ）
- からつ手土（からつてつち）
- 一 黒谷白土（くろやしろつち）ふるひ（ふるひ） 同赤土（どうせつち）少色（せうしき）ヲ赤ク付候（あかくな）
- 瀬戸くはん丹う手土（せとくはんにうてつち）
- 一 黒谷土（くろや）土（つち）々々（さまざま）白土（しろつち）ふるひ（ふるひ）
- 白繪（しろえ）ベ（へ）に皿（はら）手土（てつち）
- 一 黒谷赤土（くろやあかづち）半分（はんぶん）ハいせ土（いせつち） 半分（はんぶん）ハいせ土（いせつち） 右（みぎ）の繪（え）ハ（は） 黒谷上白土（くろやじやうしろつち）ヲとき（とき） なま土（なまつち）ノ節（ふし） 繪（え）ヲ書申候（かきまはさむ） 薬（くすり）ハ物（もの）黒色（くろいろ）ニ（に） 青（あお）キ（き）し（し）ヤ（や）かつ薬（くすり） 書申候（かきまはさむ）繪（え）ハ白ク出申候（しろくな）
- なみ白土（なみしろつち）
- 一 黒谷上白土（くろやじやうしろつち）壱斗（いちと） 山科石（やまかしのいし）三升斗（さんしょうと）
- 右（みぎ）随分（ずいぶん）こまかに（こまかに） 水（みづ）ヒいたし候（ひいたし）
- 大道具（だうだうぐ）土（つち）拵（ぢ）ハ（は）
- 一 遊行土（ぎやうぎょうど）こまかに（こまかに）ふるひ（ふるひ） 黒谷中土（くろやなかつち）ヲ水（みづ）ヒいたし（ひいたし） 交合申候（まじりあはさむ） 右水指（みぎみづさし） 花生（かんな）なといたし候（なといたし）ニよく御座候（よくござ） 釜（かま）水次（みづぎ） 茶（ちや）びん（びん） 水（みづ）こほし（こほし） 此類（このるい）ニつかひ申候（つかひ）

- 本焼掛薬（ほんやくか）の方（かた）
- 一 白薬（しろやく） 白石（しろいし）壱斗（いちと） 極細水篩（ごくさいすいし）にて水（みづ）ヒ（ひ） 灰（はい）六升（むくしょう） 右ハ上々（みぎはじやうじやう）白薬（しろやく）ノ方（かた）
- 同方（どうほう）なミ（み）う（う）つく（つく）しく出来候方（できま）
- 一 白石（しろいし）壱斗（いちと）右同断（みぎどうたんだん） 灰（はい）八升同断（はちしょうどうたんだん）
- ベ（べ）に皿（はら）手土（てつち）
- 一 白石（しろいし）壱斗（いちと）右同断（みぎどうたんだん） 灰（はい）壱斗（いちと）八升（はちしょう）
- 高麗薬（こうらいやく）の方（かた）
- 一 白石（しろいし）壱斗（いちと）水（みづ）ヒ（ひ）同前（どうぜん） 灰（はい）壱斗（いちと）式升（しきしょう） 白粉（おしろ）唐土（からつち）壱斗（いちと） 右（みぎ）五器手薬也（ごきでうぢやく）
- 是（こゝ）方（かた）以下（いげ）茶入薬也（ちやにやく）
- 杜若手（つじやくて）ノ（の）柿薬（かきやく）地薬也（ぢやく）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）壱貫目（いちくわんめ） 灰（はい）三百六十目（さんぱくろじゅうめ） 金（かね）ハダ六十め（はだろじゅうめ）
- 同上薬（どうじやうやく） 景薬（けいやく）氏云（しゆん）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）拾（しゆ）五匁（ごぼ） 灰（はい）三十め（さんじゆめ） ちうでい壱匁（いちぼ）
- 柿薬（かきやく）
- 一 信樂水（しんがくみづ）下（した）小（こ） 深草水（ふかぐさみづ）下（した）大（おほ） 二色合（にしきあ）式（しき）貫（くわん）五百目（ごぱくごめ）
- 一 灰（はい）八百五十め（はちひゃくごじゆめ）
- 上々（じやうじやう）のぎめ薬（やく）
- 一 信樂水（しんがくみづ）下（した）五（ご）匁（ぼ） 灰（はい）七（しち）匁（ぼ） 少（せう）バ（ぱ）ン拾（しゆ）五匁（ごぼ） 但（たゞ）天目（てんめ）にて合申候（あはさむ）
- 春鹿薬（はるしかやく）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）六（む）匁（ぼ） 灰（はい）三（さん）匁（ぼ） 貴船紫石（きぶねむらさし）壱匁（いちぼ） 金剛砂（こんがうさ）半（はん）匁（ぼ） 胡粉（こふ）少（せう） 唐土（からつち）少（せう） 金（かね）ハダ少（せう）
- 茶入薬（ちやにやく）
- 一 水（みづ）下（した）十（じゆ）匁（ぼ） ゴ（ご）フ（ふ）ン三（さん）匁（ぼ） 金（かね）のるかす壱匁（いちぼ）
- 一 灰（はい）十五（じゆご）匁（ぼ） 紺青半匁（こんせいはんぼ）
- 瀬戸薬（せとやく）
- 一 水（みづ）下（した）壱升（いちしょう） 灰（はい）壱升（いちしょう） 白（しろ）ぼ（ぼ）こ壱升（いちしょう）
- 唐物業（たうぶつ）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）壱貫目（いちくわんめ） 灰（はい）九（く）百目（ひゃくめ） 金黒石（かねくろいし）百（ひゃく）五拾（ごじゆ）め（め） 海石（うみいし）青（あお）黄色（きやういろ）成（なり）テ用（もち）百目（ひゃくめ） 紫石（むらさきいし）式（しき）百目（ひゃくめ） 白粉（おしろ）五拾目（ごじゆめ）

- 茶入金薬（ちやにきんやく）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）五百目（ごぱくごめ） 灰（はい）三百目（さんぱくめ） 黒（くろ）はま少（せう）
- 正意手茶入薬（しやういてつちやく）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）六十式匁（むくじきむ） 信樂水（しんがくみづ）下（した）六十式匁（むくじきむ） 金（かね）ハダ七匁（ななぼ） 唐（から）かねせんくつ拾（しゆ）三匁（さんぼ）
- なまこ手薬（なまこてやく）
- 一 水（みづ）下（した）百（ひゃく）九拾（くじゆ）四匁（しよむ） 灰（はい）九拾目（くじゆめ） ちうでい八匁（はちぼ）
- 唐物業（たうぶつ）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）百目（ひゃくめ） 紫土（むらさきつち）三拾目（さんじゆめ） 白粉（おしろ）五匁（ごぼ） 灰（はい）九十め（くじゆめ） た（た）ば（ば）こ（こ）ノ灰（はい）志（し）ん（ん）ヲ用（もち）式（しき）拾目（しゆめ） 銀（ぎん）ノからミ拾（しゆ）匁（ぼ）
- 朝日手（あさひて）ノ薬（やく）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）百（ひゃく）五拾目（ひゃくごじゆめ） おも灰（はい）八拾五匁（はちじゆごむ） 金（かね）のるかす式（しき）拾六匁（しゆじやくむ）五分（ごぶん） 紫土（むらさきつち）四拾目（しよじゆめ）
- 一 深草水（ふかぐさみづ）下（した）三匁（さんぼ） 金（かね）ハダ五匁（ごぼ）
- 已上（いじやう）ニテ茶入薬（ちやにやく）ノ方（かた）記（し）り（り）
- 亦（また）本焼山窯（ほんやくやまがま）可用薬方（か）
- る（る）り（り）薬（やく）
- 一 なまぜ石（なまぜいし）壱升（いちしょう） 灰（はい）六合（むくごう） 南京繪薬（なんきやうえやく）式（しき）拾（しゆ）式匁（しきむ） 右（みぎ）の釋（しやく）ヲ（を）屋（や）ス（す） 地土（ぢつち）ハ上々（じやうじやう）ノ白土（しろつち）ヲ用（もち）云々（いんいん）
- 青磁薬（せうじやく）の方（かた）
- 一 なまぜ白石（なまぜしろいし）一升（いっしょう） 白粉（おしろ）四合（しごう） 灰（はい）一升三合（いっしょうさんごう） 瀬戸青薬（せとあおやく）少（せう）
- 瀬戸青薬（せとあおやく）
- 一 生（なま）瀬（せ）白（しろ）石（いし）一升（いっしょう） 灰（はい）一升八合（いっしょうぱちごう） ちうでい五匁（ごぼ）
- さび薬（さびやく）
- 一 水（みづ）下（した）壱升（いちしょう）五合（ごごう） 灰（はい）三升五合（さんしょうごごう） 右水（みぎみづ）ニテ（に）テ（て）キ掛候（か）
- いらほ手薬（いらほてやく）
- 一 山科石（やまかしのいし）十匁（じゆぼ） 灰（はい）八匁（はちぼ）
- 一 茶入薬（ちやにやく） 一水（いちみづ）下（した）十匁（じゆぼ） 灰（はい）十二匁（じふにぼ）
- 右二色（にしき）ノ薬（やく）ヲ合（あ）合（あ）様（やう） 茶入薬（ちやにやく）八匁（はちぼ） いらほ薬（いらほやく）十匁（じゆぼ） 右（みぎ）の通（とほ）式（しき）色（しき）ヲ合（あ）テ（て） 五器手薬（ごきでうぢやく）ノ厚（あ）サ（さ）ニ掛申候（か）
- 刷毛目（はらけめ）又（また）井上（いの上）手薬（てやく）

一 藤尾赤石拾盃 灰九孟

○ 錦手繪具の方

一 赤 金珠沓匂 極白びいどろ式匂

一 萌黄繪具 白粉八分 萌黄びいどろ五匂

一 紺繪之具 極白びいどろ五匂 唐紺青式匂七分

一 黄色繪藥 白ひいどろ五匂 金珠七分

一 紫色繪具 白粉沓匂五分 丹七分 同断

一 白色繪具 極大白ひいどろ一味

一 金ノ台榎 金泥沓匂 透生ほうしや式分

一 黒繪具 金ハタ 南藥二色等分ニ台

○ 樂燒藥の寛

一 茶入の藥 白粉百目 紫土八分

一 右地藥也 上藥ハ白粉拾匂 赤ばご沓匂

○ 樂燒白藥 白粉拾匂ニ唐紺八分

○ 樂燒白藥 赤樂ニモ此藥ヲ用申候

○ 樂燒繪藥の寛 白粉百目 日岡石拾五匂 びいどろ五匂

○ 樂黒藥 青繪紺青 黒繪金ハダ 柿色ハ水ト

一 白粉百目 びいどろ五匂 赤ばご拾五匂

一 白粉十匂 日岡石四匂 唐紺青六匂

一 黒びいどろ百目 金ハダ三拾目 奈ら緑青廿四

○ 同方 一 全ハダ沓匂 ぶきだま式匂 白粉式匂五分

一 右樂燒の方 右本樂燒繪藥錦手繪藥ニ諸事土の合様まで具ニ

一 御望ニ應申候所也 野々村播磨大掾 藤良判

一 元禄十二年卯八月十三日 緒方深沓老 參

一 内窰土製の方

一 諸國假令 異國の土にてモ

一 御室燒器物上ノかけ藥の方

一 右合榎細末 網篩ニテ能こし候て 居させ 上ノ水ヲ

一 内窰繪具ノ方 一 黒 鍔の金ハダ拾匂 南京吳洲藥五匂

一 緑 白粉十匂 日岡石四匂 緑青沓匂二分

一 紺 白粉十匂 日岡石四匂 唐紺青六匂

一 右同断

一 右同断

一 右同断

一 右同断

一 右同断

一 赤ハ 山黄土一味 右同断

一 黄 白粉十匂 日岡石四匂 唐白目三分 極細末

一 紫 白粉十匂 日岡石四匂 南京吳洲藥五分

一 右燒方 内窰外窰形 是等者直ニ御覽ニ被及候所ニ

一 右押小路燒の親族ながら 弟子ニテ候 洛東粟田躰ノ

一 私口授仕候通 尹記送進仕候 以上

『陶工必用』から抜萃した仁清伝、孫兵衛伝である。

而伝は以上のように短いものであるが、仁清伝は二代仁

清の伝えるところ、本窯・錦手繪具・樂燒他の陶法、孫

兵衛伝は内窰土・釉薬・繪具の材料・調合を列記。孫兵

衛伝は口授であった。

『陶工必用』はそれらに加え、乾山燒の始まり、京焼

上に占める位置、自らの工夫による陶法、釉薬・絵薬の

調合とその使用などを記述。朱書によつて私見を加え、

内容はさらに理解し易く、作陶し易く、厚み・豊かさ・

深みも増すなど、文人乾山の表出した一冊となる。造り

方のみではなく、土、顔料、それを扱う材料屋、実地見

学をした多田銀山など、丁寧に關係事項を解説。読みも

のとしても興味深い書物となる。

『陶工必用』—その大概—

都の西北、仁和寺門前、受領播磨大掾藤原・野々村仁清より私、乾山・緒方深省相承の陶器の製法である。土薬、素地土、絵具の作り方など、受理した判形一冊のまに書写、私案は朱字を以ててそれを記す。

乾山(深省)

〔朱・乾山〕仁清は野々村清右衛門。「仁」は仁和寺の「仁」、「清」は清右衛門の「清」、多く陶器の銘に活用。専ら茶匠金森宗和老人の好み道具を製作した。

【仁清伝】

—本窯土—【本窯焼土の覚】

土は、黒谷土に山科石を加え水飯、目的に応じて割合を調整する。

〔朱・乾山〕黒谷土は、古来京都黒谷紫雲山金戒光明寺前辺より出土。山科石は東部山科藤尾山中にある砂である。黒谷土は上白土・中白土、下を圃土というが、上物には上白土、中下また赤土は目的に応じて使い分ける。

○五器手土：

黒谷土一斗(水飯したいせ土)、遊行土五升(ふるい土水飯した山科石六升)以上を合わせる。

〔朱・乾山〕五器手の下地(素地)は黒谷、遊行の混合土に限らずともよい。朝鮮の土を用いれば最上であるが、江州信楽郷長野村(木ノ瀬村)等の白土も良く、信楽土など釉薬を薄く施し焼成すれば、茶人の好み紅葉・火色・火替りなどの赤や青の斑点が現れる。遊行土は、洛東松原通り野辺にある土である。黒谷土同様上中下と赤土があり、五器手には上または中のいずれかを用いる。

○いらぼ土：

黒谷赤土一斗、遊行土五升、山科石三升、ふるい土(朱・乾山)これも黒谷土、遊行土に限らず、諸々の土を試してみれば、好製品ができるかも知れない。

○からつ手土：

黒谷白土を飾い、黒谷赤土を少し加えれば唐津風の赤味が出る。

〔朱・乾山〕いずれの国の土でも良いが、唐津の薄赤土を用いることが最良である。白土・赤土の混合より、一旦窯に入れ色見をすれば、黒谷でも遊行土でも薄赤色の土を用いられよいのではない。

○瀬戸貫入手土：黒谷白土上々の飾い土。

〔朱・乾山〕貫入は「水紋」。篠焼(志野焼)は織部好みの瀬戸焼陶器であるが、黒谷土を用いて志野焼を写した場合、似ていて違うようである。本窯用であればどのような土でもよいが、成形後、生乾きのうち、瀬戸から取寄せた白土を泥状にし、その中に浸し、乾かし、素焼後、上薬を掛け焼成すれば、表面は元来瀬戸産の土、篠焼とは相違ないものに焼き上がる。薄柿色の地に白かった黒色の場合も(今日の赤織部)、瀬戸の薄柿色土、他の薄柿色土なりとも塗り、黒・白の絵を描き焼成、古田織部の好み道具、香合・皿・不皿台などが焼き上がる。

○白絵べに皿手土：

黒谷赤土半分はふるい土、半分は水飯土。黒谷上白土を溶き、これを絵具となす素地上に絵を描く。上薬は透明、半透明の蛇胸袖であるから、自ずと描いた絵は白く現れる。(仁清の白絵具は黒谷白土一味)

〔朱・乾山〕白絵具は乾山家第一の秘伝。口伝を以つて授受するが、右のごとく赤色素地に白絵具を用いて絵を画いた場合、何れも白の発色は悪く、純白にはならない。

黒谷上白土を用いても、焼き上がり素地は風色かうす黒色。絵を描いても真白にはならず、そこで私は備前八木山白土、薩摩白土、なかでも豊後玖珠郡赤岩村の紙を白くする土の活用を考えた。一風流を極める白絵土(絵具)となつたが、白絵具を用いることは今日東山の諸窯において盛んである。多くは下粟田白土・岩倉山に産する白土を使うが、藤尾土(石)の代用とし

ても活用。が、絵具は白く見えても、堆(たか)も盛り上がるなどの欠点があり、上絵付(飾手)の場合はやむを得ないが、これは本窯であり、それを防ぐ乾山自家製の手立ては以上記した通りである。

○なみの白土：

黒谷白土一斗、山科石三升程、以上二種類をよくよく飾い、細かにし、水飯をする。

〔朱・乾山〕並物製作には黒谷土なら中白土か、遊行土でもよいが、仁清は何故上白土とするか。誤りであろう。

○大道具土：

遊行土を細かふるい、黒谷の中土を水飯し、交ぜ合わせる。分量は適宜か。朱書は私(乾山)の案であるが、右の土は水指、花生・釜・水次・茶瓶・水こぼしなどの製作に用いる。

〔朱・乾山〕大道具に限らず、赤土・白土、いずれの土も陶器にならないものはない。善し悪しは窯に入れ試してみればわかるが、頑なに思い込むなど、受け入れる心が狭ければ何事も成就しない。

—本窯下絵具—【本焼の絵薬】

〔朱・乾山〕素焼後、釉薬(掛薬)を掛ける前に用いる絵具である。仁清伝中ここに白絵具を省略したことはすてに紅玉手に記したからであらう。白絵具の活用は乾山に始まるが、洛東諸窯では今なお盛んに模倣して「陶磁製方」には「白土ヤキカヘシ・此白土一返スヤキシ」とある。素焼後における白絵具の工夫であるが生懸け、素焼後など、収縮率を考慮、活用においても乾山の充分な心得が窺われる。

○黒絵薬(黒絵具)：

金(だ)は黒絵の顔料。極細末にして用いる。〔朱・乾山〕金(だ)は鍛冶屋が刃物を打つとき、薄く割げて飛散る鉄粉である。その粉末を一味、また南京染付に使う茶碗薬を等分に混ぜる。鉄粉(一〇匁)に対し茶碗薬四匁の割合が良い。

○青絵薬 (青絵具)・南京と同断。

(朱・乾山) 南京は茶碗薬である。南京人が肥前長崎へ持ち来るといふのが、上中下の差が大きく、青絵には極上品を用いれば、比類のない紺色になる。

○薄柿色絵薬 (薄柿絵具)・

深草水下同断。ふのりに溶いて用いる。

(朱・乾山) 膠を少し加えた方がよい。水下水垂とも書くが、水下一味では確かな薄柿色にはならず、薄赤い土、なかでも瀬戸の薄柿色の土は特によい色を呈する。

(水下水下は鉄・マンガンなど混合物を含み、それだけでは薄柿色にならない)

—本薬上薬—【本焼掛薬】

○白薬 (透明釉薬、上薬)・

白石一斗 極く細かく篩い水懸する。 灰六升

(朱・乾山) 白石は摂州有馬郡生瀬村山中に産する白砂。大坂天神橋南岸にはそれを扱う問屋がある。灰は染物に用いる木灰が良く、白砂は生瀬に限らず、陶家近辺、入手のし易い白砂を用いるが、焼上りの上薬の色があり、生瀬石 (白砂)を用いるが、焼上りの上薬の色が青味を帯びれば火が強くなったこと、玉子色の場合は弱いこととの証となる。以上は上々の白薬の方である。

○同じく、並に美しくできる薬・

白石一斗 (拵えは右同断) 灰八升同断。

(朱・乾山) 美しくと艶のあることをいう。白石は生瀬石・砂、灰も前出と同じである。

○へに皿手薬・

白石・生瀬砂一斗右同断 灰一斗八升

(朱・乾山) これは血の量が多くした割合である。弱い釉薬。べに皿の名は尾張瀬戸の技法に由来。仁清はこの地方の用語であるという。古い茶碗中に「白庵」と称するものがあり、地土は白く、上薬は内にも外にも流れ、溜まると青みを呈するなど、その現象を「なまき」と呼ぶが、弱い釉薬を用いた場合に発生する。

○高麗手薬・

白石一斗 (水鏡) 灰一斗二升 白粉 (唐土) 一斗 右は五器手の薬である。

(朱・乾山) 同手立てを朝鮮素地の器物に試みたが、上々の出来であった。

—茶入薬—

これより以下は茶入薬の方である。

(朱・乾山) 茶入薬には「地薬」「景薬」の二種がある。

二重掛けにするが、地薬は土 (水下水) を多くし灰を少な

く、釉薬の耐火度を高め釉薬の流れを押さええる (強い釉

薬)。上に掛ける景薬は、反対に灰を多くし耐火度を低

く、釉薬の流れを促し、茶人の景色、見所をつくる。弱

好む見どころとなる。

○杜若手柿薬の下地の薬・

(地薬) 深草水下水 (鉄文のある赤土) 一貫目 灰三六〇目 金ハダ六〇目 同上薬は「景薬」ともいう。

(景薬) 深草水下水一五匁 灰三〇〇め ちゅうでい一匁

(朱・乾山) 杜若手は古くある瀬戸茶入の名称である。ちゅうでい (輪泥) は真鍮、銅と亜鉛の合金である。

焼くと黒くなることから使用する。

○柿薬・

信楽水下水少し 深草水下水多く 二種を合せて二貫五〇〇目 灰八五〇〇め

(朱・乾山) この薬は茶人のほかに雑器にも使用。本焼の火が強くなれば器は赤く、柔らかに当れば黒くなる。

信楽水下水は同地方の陶家村々に出土する。

○上々のぎめ (禾目) 薬・

信楽水下水五匁 灰七匁 少パン (硝鑊) 一五匁

割合には天目茶碗を用いて計量する。

(朱・乾山) 禾目は古い茶入の名称であり、上品な茶器とされる。天目茶碗は従来の抹茶茶碗とは異なり、台に乗せて使用するが、各服用の茶碗であり、目安がわかり

易く、計量器として応用する。(天目茶碗は中国浙江省天目

山の禪院で使用されていた一客用の茶碗である。日本へは鎌倉時権僧によつてもたらされたが、低く窄まった高台は、台に乗せて使用し、日本では貴人、献茶、供茶などに用いられる)

○春慶薬・

深草水下水六匁 灰三匁 貴船紫石一匁 金剛砂半匁 胡粉少 唐土少 金ハダ少

(朱・乾山) 貴船石は洛北、貴船川に多くある。金剛砂は細かな粒状の不純物を含む鋼玉、研磨剤に用いられる

○茶入薬 (もう一つの茶入薬)

水下一〇匁 ゴフン (胡粉) 三匁 金の鍍す 不皿

灰一五匁 紺青半匁

(朱・乾山) 仁清が尾張瀬戸において習得した方の一つである。鍍は金属を溶かし鍍金の材料を取るための

用器であるが、金の鍍すは金礦の銀内に残る滓をいう。

○瀬戸薬 (瀬戸薬の基本は水下水と灰である)

水下一升 灰一升 白ぼこ二升

○唐物業・

深草水下水一貫目 灰九〇〇目 金黒石一五〇〇め

海石 青黄色のもの一〇〇目 紫石 貴船川石 二〇〇目 白粉 五〇目

(朱・乾山) 仁清は金黒石も瀬戸にあるというが、鴨川の川原にある紫黒石でもよいであろう。

○茶入金薬・

深草水下水五〇〇目 灰三〇〇目 黒はま少

(朱・乾山) むらむらとして金属の光彩が生ずる茶入薬である。仁清は黒はまも同じく瀬戸にあるというが、鉄

のカナハダを用いてもよいのではないか。

○正意手茶入薬・古器者

深草水下水六二匁 信楽水下水六二匁 金ハダ七匁

唐かねせんくづ一三匁

(乾山書にはここ灰の分量は記されていない。が、原本である仁清伝にはあつたと推考。茶入の注文、茶人に興味のない

乾山の書き落しと考える。正意手は古い茶入の名称である)

○なまこ手葉・水下一九四匁 灰九〇目 ちうでい八匁 なまこ手は古い上等の茶入の名称である。
○(も)一つ) 唐物業・

深草水下一〇〇目 紫土三〇目 白粉五匁 灰九〇め
たばこの志んどの灰二〇目 銀のカラミ一〇匁
(朱・乾山) 銀のカラミは、銀を含む鉱石を精煉する折

炬床で吹き分け、上に浮いたものである。銀は沈み浮いたカラミは捨てられるが、実際撰津多田の銀山において見学、同所に頼めば手に入れることができる。
○朝日手の葉・

深草水下一五〇目 おも灰八五匁 金のるかす二六匁 五分 紫土四〇目 ゴフン三匁 金、タ五匁
(朱・乾山) 仁清の口授では、おも灰は炉中に長くおかれた灰という。紫土は本絵具の紫土である。山黄土を焼いたものであるが、これより貴船紫石のほうが適す。

(白紙)
以上、茶入葉の処法である。

―その他・本窯葉―【本焼の窯に用いる葉の法】
○るり葉・血・鉢・香炉・花入など)
なまぜ石一升 灰六合 南京絵葉二二匁

この場合、素地土は上々の白土を用いる。
(朱・乾山) 瑠璃葉のやきものは、中国また肥前焼にあり、全体に瑠璃色釉を施した深鉢他がある。染付南京絵葉(呉須)の上品を惣地塗りし、上葉を掛ける(南京絵葉は上葉に混ぜて用いる方がよい)。が、磁器とは異なること

とは過ぎないと考え、今まで試みたことはない。
○青磁葉・(粉物の青磁葉。下の呉須には鉄分が多く、日本では青磁葉に転用するが、本物を知る乾山は好しとしない)
なまぜ白石一升 白粉四合 灰二升三合 南京絵葉少

(朱・乾山) 本来、中国の青磁は青味を帯びた石に灰を混ぜた釉葉を用いる。南京絵葉(呉須)を入れることに

は合点がゆかない。

○瀬戸青葉・(織部焼緑色は生瀬石・灰・銅)
生瀬白石一升 灰一升八合 ちうでい五匁
(朱・乾山) これは良い手立てである。瀬戸青葉は上葉(透明釉葉)を掛けた上に、所々に用いるが、皿類には掛け分けなどがよく、幾たびも試みてみる。

○さび葉・(水下・灰のみ、薄く掛けて高温焼成する)
水下一升五合 灰三升五合 水にて溶き掛ける。
(朱・乾山) さび葉は雑器用の釉葉である。土鍋・土釜・茶瓶・水差・水こぼし・壺類などに用いる。

○いらぼ手葉・水下一〇匁 灰二八匁
茶入葉 水下一〇匁 灰二八匁
以上二葉、茶入葉八匁といらぼ手葉一〇匁を合わせ、五器手の葉程の厚さに施軸する。(ざんぐり味、仁清のいらぼ手は掛け分けを意図、乾山は刷毛目を意識、朱書としたか)

(朱・乾山) このいらぼ手葉は適当ではない。いらぼ手茶碗は多く茶人が賞翫、そのうち刷毛目手など、素地に白い刷毛目もつけ、その上にこの二味混合の釉葉を掛けてしまつては、下の刷毛目は、茶入葉の水(赤土の色)によつて見えなくなつてしまふ。むしろ、下地は薄赤色の土に少し荒目の砂を交ぜ、常の本焼用上葉を掛ければ良いのではないか。

○刷毛目または井戸手葉・(素地色)
藤尾赤石一〇匁 灰九匁
(朱・乾山) 藤尾赤石は取り寄せればよいが、当手立てよりは常の上葉(生瀬石・灰)を掛ければよいであろう。

(白紙)
―本窯上絵具―【錦手絵具】基本はじードロ・白粉着色剤)
○赤・
金珠一匁 極白びいどろ二匁 白粉一匁 硃砂、焼返しをしない硃砂三分 右を細末にしふりにて溶く。

(朱・乾山) 金珠は極上の辯柄丹土である。余り良くはないが時に用いる。硃砂は生が良く、ふのりではなく、

膠を少し入れる方がよい。(ふのりは赤色を鈍くする)

○萌黄絵具・白粉八分 萌黄びいどろ五匁 岩緑青六分
(朱・乾山) この手立ては良い。

○紺絵具・極白びいどろ五匁 唐紺青二匁七分 白粉二匁
(朱・乾山) この手立ては良い。

○黄色絵葉・白ひいどろ五匁 金珠七分 白粉一匁五分 丹七分
(朱・乾山) この手立ては余り良くない。詳しくは乾山伝に記す。

○紫色絵具・びいどろ四匁 金珠五厘 丹八分 白粉二分
南京絵葉一分
(朱・乾山) この紫絵具も勝れず、年来工夫の調合を私伝の項に記す。

○白色絵具・極大白びいどろ単味
(朱・乾山) これも余り良くない。錦手、本焼の上に白絵具を付けることはむずかしく、なお工夫を試みたい。

○一金の合わせ方・
金一匁 硃砂二分
(朱・乾山) 焼返し硃砂は精度・濃度が落ちる。金泥を薄く塗つた場合も一時的には光沢を保つが、日を経て剥落する欠点がある。金は高価故、洛東の陶工たちは多く焼返し硃砂を使用、金泥を薄く塗る。生瀬砂(透明砂)では艶光沢を出すために金を厚く塗る必要があり(仁清、乾山はともに生瀬砂を使用)、金泥を多く使うことになる。

○黒絵具・
金ハタ(鉄) 南京葉(呉須)等分に合わせ膠にて溶く。
(朱・乾山) これは仁清の錦手上絵の黒絵具である。が、

上に緑か紺、光沢のある絵具を掛けて定着させなければ安定性も乏しく、艶もない。使い方としては細かな木葉の葉脈などを描き、その上に葉の形なして緑葉を掛けて色落ちを止めるが(葉脈は上部へ透けて見える、乾山の

工夫、調合は乾山伝に繪黒給具の項に記す。

― 染焼 ― 【染焼薬の寛】

○ 茶入薬…(初期染焼には鉛釉黒薬がある)

下地薬は、白粉一〇〇目 紫土(石) 八分

上薬は、白粉一〇〇目 赤ぼこ一匁

または、白粉一〇〇匁 唐紺(青) 八分(以上黒薬)

○ 染焼の白薬(上薬・透明釉薬…(赤薬にも用いる)

白粉一〇〇〇目 日岡石一五匁 びいどろ五匁

○ 染焼の絵薬…

青絵 紺青 黒絵 金ハダ 柿色 水卜

○ 染焼黒薬…もう一つの黒薬)

白粉一〇〇〇匁 びいどろ五匁 赤ぼこ一五匁(赤ぼこ

はよく焼いて用いる) 礬砂五匁(白粉・唐土と同じ役割)

からかねせんくす四匁の内二匁は金ハダ

同方…

黒びいどろ一〇〇目 金ハダ三〇目 なら緑青二〇目

同方…

金ハダ一匁 ふきだま二匁 白粉二匁五分 礬砂八分

(朱・乾山) 染焼の調合である。仁清伝に記載があり、

ここに記したのが有益ではない。京都には利休時代から続

く染焼本家がある。黒・赤薬技法が伝承するが、秘伝で

ある故、希みとあれば口頭にて伝える。

以上 本焼、染焼、上絵薬、錦手絵薬、素地の調合

全てを要したが、必ず他見他言なきように。私家の秘伝

ながら要望に応えて書き記す。以上

野々村播磨大掾藤良判

元禄十二年卯八月十三日 緒方深省老 参

(朱・乾山) 仁清から乾山へ相伝された陶法の奥書の写

しである。

【押小路伝】

― 内窯 ― 【内窯陶器】

押小路焼は、京都柳馬場^{やまのばなばな}東方、押小路に一文字屋助左衛門なる人物がおり、唐人に学んだ技術を用い押小路焼を創始。染焼創始者樂長次郎より古いと聞き及ぶが、いずれが先かは不明である。

元禄二年(一六九〇)、乾山は都の西北泉涌^{いづみうぶ}谷(鳴滝泉谷)に窯を開く。御所の西北(乾山)に当たり、陶器の銘を「乾山」としたが、その節、押小路焼親族また弟子、細工・焼方の功者の孫兵衛を雇う。御室仁清嫡男(二代)清右衛門とも大きな助力を得たが、この兩人から押小路焼(内窯陶法)、仁清焼(本窯陶法)の両伝法を受理。御室仁清伝は先に記したが、ここでは押小路焼陶工孫兵衛の口伝を記す。(歴史、京焼の流れの中に位置する乾山焼の略歴を述べ、如何に乾山焼が正統な立場に立つかをいう)

○ 【内窯土方】

内窯陶器は何れの国の土でも製作可能。陶工の住まう近辺の土を用いることがよいであろう。配合は御室焼と同じである。

○ 【内窯陶器の掛薬】

白粉一〇〇〇目 日岡石四〇目
右を合わせ極細に粉末、絹篩を用いて良く漉し、水甌^{すいひ}する。上水を捨て、ふのりにて溶き、漉したちの掛ける。ふのりの合加減は口授する。(白粉と日ノ岡石はクセルとブレイキの関係、白粉は鉛質、溶け易く、日ノ岡石は珪石、溶け難い)

○ 【内窯絵具】(中国に始まり三彩・交趾。日本では天正頃)

○ 黒…鉄の金ハダ一〇〇匁 南京呉州薬五匁
極細く粉末にして、フノリにて溶く。
○ 緑…白粉一〇〇匁 日岡石四匁 緑青一匁二分右同断
○ 紺…白粉一〇〇匁 日岡石四匁 唐紺青六匁右同断
○ 赤…山黄土一味右同断
○ 黄…白粉一〇〇匁 日岡石四匁 唐白目三分極細末右同断

○ 紫…白粉一〇〇匁 日岡石四匁 南京呉州薬五五分右同断
南京呉須の割合に注意。赤味を帯びた呉須が良く、水に浸せばよくわかる。

焼方、内窯・外窯の形状などに関しては、すでに承知故、図示は省く。

(朱・乾山) 押小路焼親族また弟子、洛東栗田^{うすい}蹴^{あし}上水の近邊比丘尼坂住、孫兵衛から口授された通り、その伝統とする技法を記す。薬方、土拵え、焼方、絵具などは長年製作に携わり、一部始終を承知である。
(押小路焼に白絵具はない。乾山の發明である)

【乾山伝】

(朱) ここからは乾山一流^{なご}の方である。今日迄試し習得、向後^{むこう}も珍しいことなどあれば追って書き記す。

京都西北、乾山において陶器を製し始めてから凡そ四〇年。仁清、押小路焼に伝承する技術のほか、無駄なものは省き、自らの工夫を加え、乾山一流の様式を創り上げたが、左にそれを説明する。数十年來、茶入製作は試みておらず、不分明なこともあるが、今年からは新しく茶入薬にも挑戦したい。

― 本窯土 ― 【陶器地土並びに製法】

陶器の土は、日本また外国、何れにしても陶工にとって近辺の土が良質か否かを知ることは大切である。

内窯では、低温焼成故に器物の破損はなく、いずれの国の土でも使用できる。が、土の性^{しょう}によっては成形後、乾燥中に碗・皿の高台にひび割れが興ることがあり、この種の土は不適である。京都ではその場合、山科藤尾白砂を入るが、石か土か判断はつき難く、基本的には砂であろうが、土一〇貫目に対しこの白砂を二貫目ほど混ぜる。絹篩にて漉し、日に干し乾燥、粘りがでるほどよく揉むが、江戸では器の底切などが生じた場合、房州産、錢座^{せんざ}の用いるの砂を取寄せ、本土一〇に対し同砂二貫目ほ

どを混入、底切れを防ぐことができる。対応方法は何れの国、何処にもあるが、素地の精・粗は、器物、製作目的によつて判別することが肝要である。

○くへんにうらふ南京焼・肥前焼器物の土（磁器土）
○(朱) 南京古染付・松竹梅・雲堂（俗に雲屋台）などの茶碗・香爐・蓋・碟の類に用いる土である。

甲州比良山にある白土は比良の村人が採掘、京都でも売買され、乾山窯でもかなりの量を購入した。

が、単味では焼き上がりが悪く、白くならない。例として中国の呉州手・伊万里皿山の下作磁器の高台内無釉部分に類似するが、純白にするためには乾山窯には秘伝があり、豊後赤岩産の白土を混ぜるのである。比率は等分、五分と五分であるが、これを用いて素地を造り、常の本焼用上葉を掛ける。本窯（山窯）では火前に置き、匣に入れて焼成するが、窯奥は火勢が弱く、よい色合に焼き上げられない。内窯焼では火勢も弱く、道具の破却は稀であるが、本窯では土の性によつては窯中へ推けてしまひ、役に立たない土もあり、毎回本窯に入れて試し焼、善し悪しを確認する必要がある。（鳴滝窯址からは磁器破片が出土している）

○高麗刷毛目茶碗の土並刷毛目の技法・葉
赤土を粉末にし、先に述べた底切れを防ぐための藤尾石（砂）赤色のものを交ぜる。黒谷赤土は黒合金成光明寺門前に出土。江戸では所によつて土性弱く、本焼窯では役に立たないが、その折には京都・尾張・信

ずれも本窯にて砕け取り寄せれば良い。白、薄赤土、山黄土を塗る。山黄土は江戸所々の薬店において販売、色の良い赤土を選び、極細末の絹篩で漉し、水箆をする。器物に一、二回斑のないよう塗り、乾かし、よくよく干して、素焼をす。

刷毛目は、豊後白土に、日の岡石、又は落東岩倉大日山より出土する白石砂を混入。豊後白土一〇〇目に対し二〇匁を交ぜる。石臼にて二返ほど挽き、細粉末に

して、フノリ強、膠弱を加える。ロクロ上でも、左手に持ってもよいが、稿筆を使い、まに刷毛目を付け、常の本窯上葉をかけて焼成する。窯中の置場所によつては色替りが生じ、これにも注意が必要である。

○高麗こよみ手・三嶋こよみ手、三嶋こよみと呼ぶべきか
地土は右の刷毛目土と同断（彫りどとスタンプの二様式）「こよみ」とは高麗からきた茶碗の模様である。「真の手」「花三嶋」などがあり、模写する折には、生乾きの

とき、竹べらを用いて模様を掘付け（彫りつけ）、筋などはロクロを用いて廻し付け。先の刷毛目用白土を二、三返惣地塗りし、廻し付けた内部にも入り込むように塗るが、少し乾かし、薄く先の曲がつた竹へらを作り、それを用いて、彫り込みではない部分の白色を静かに掻き落とす（凹なる窪みに白色が残る）。日に干し、素焼し、上葉を掛けて焼成する。

文様を掘付ける場合は、菊花形など、先に土を用いてその印判を造り（成形・乾燥・素焼をする）、素地に押し当て、その窪みに白絵具を加える。高麗「御本手」「雲鶴」なども同じ技法であるが、古陶磁の模写は、異域本邦、何れに関わらず何より其土地々々の土を取寄せ、模写、焼成することが良い。似ている様でも、相異は歴然と現れ、古・新の別は仕方がないが、各国々それぞれの土を用いて製作する事が良いであらう。

上葉も同じこと、厳しくみれば上葉（透明釉葉）は攝津有馬郡生瀬村出土の白石に灰を加えること以外にはなく、私年来の工夫、調合は先に記した通りである。

一 本窯・上葉
一 本焼・山窯の掛葉（生瀬石・灰が基本）
大方、仁清の方組が良い。生瀬石と灰の合わせ加減は、灰を多く、生瀬石を少なくした場合は釉葉の力は弱くなる。石を多く、灰を少くすれば強くなる。それ故器物、窯の詰め場所などによる変化を考慮、釉葉の強弱を斟酌する必要がある。

柿葉に関しては、茶瓶・土釜・土鍋など、仁清の手立て中に水と灰、二味を合せる方があり、それに従う。

一 本窯・下絵具
一 本焼給具葉（乾山伝下絵用給具）
○白絵具
豊後玖珠郡赤岩村より出土する極白土一しめ（一貫目か）、日岡石か大日山石かの二色の内二〇〇目を加え、石臼にて挽き水箆、よく居させ、ふのり・膠を加え、絵具として惣地塗りなどに用いる。

（朱）この白土も極白であれば豊後白土に限ることはない。異域本邦何れにしても試ししてみればよく、先ずは今迄使用したものに同じ記述する。

○黒絵
南京下の呉州葉五匁、鉄のかなはだ一〇匁極細末して、フノリ・膠を加える。

○紺絵
南京上々茶碗葉（呉須）唐紺青（スマルト）極々土の茶碗葉、また肥前焼上の南京葉であれば一味が良く、紺青は用いない。が、色に深みを加える場合は唐紺青を混入、二色の分量は毎回試す必要がある。

○薄柿色
先の白絵具に山黄土を少し交ぜる。フノリ・膠は同断以上、右四色の外に本焼、下絵に用いる絵具はない。

一 本窯・上絵具（錦手絵具）
一 本焼物の上に彩色絵を付ける給具方
自作他作に関わらず、南京焼・阿彌陀焼・肥前並九州・南海・其他の諸国の陶器本焼土に焼付ける給具である。

○赤絵
年来工夫をしたが、今以つて定まった作り方はない。先ずは緑礬を焼、綠礬に成して、透礬砂を加えて光沢の出るようにする。また仁清伝の如く極上弁柄丹土を再三水箆して用いるか。

○金・消泥
金を消泥に金を消泥にすること、搦棒より指を使って搦る金の消泥一分に透礬砂二分を膠で溶く。フノリは不

用。(焼返した礬砂は日を経て落ちる。東山辺では金泥を薄く用いるべく焼返すが、必ず生礬砂を用いることが必要である)

○銀

町売りの銀泥は役に立たない。箔消しは金箔同様自家にて行方が良く、銀泥一分に対し礬砂七厘を入れる。膠は金泥の遣方と同じである。フノリは入れない。

○紺と緑色

仁清伝が良い。緑は岩緑青いわろくせいが最も良く、奈良緑青ならろくせいは単味では色が悪く、岩白緑いわびろくを加えるか、岩緑青二番手の上々緑青を加えるか。岩緑青・岩白緑・奈良緑青三味の場合は、奈良緑青を多くしても構わない。

又紺青の合絵具と緑青の合絵具とを等分に交ぜれば、緑色に変化のある色ができ、木の葉の裏表などに遣い分けることが可能である。

○黄

白びいどろ一〇匁 白粉四匁 唐白目三分

唐白目一味を能々摺り、極細末にし、白びいどろと白粉を交ぜ、フノリ膠で溶く。此黄葉は内窯用(袖下絵)

である。が、びいどろを入れたことから本窯用にも使用可能。孫兵衛の伝える所、白粉一〇匁に日岡石四匁、唐白目三分は内窯専用の絵具である。本窯上給付(錦絵)には使えないが、仁清伝の黄色も不適。

○濃黄後世に云うカボチャ色か

赤味を帯びた黄色である。先の緑礬の焼返し・緑礬を少し加えるが、分量は桃花色になるほどに加える。

○紫

紫色は、仁清伝、孫兵衛伝ともに不適である。

紫ひいどろ一〇匁・白粉三匁に膠・フノリを少し加えるが、錦手絵・内窯にも良く、薄く付ければ藤色となり、濃く付けば紫色となる。

○黒絵具透明袖葉下でのみ使用。乾山は袖上使用可能を証明

仁清伝の通り、鉄の金ハダ、南京下の呉洲葉を合わせ、膠で溶く。下絵を描き、その上へ緑青の合葉か紺か紫などで黒絵具の上へ一度塗る。一例であるが(既述)、草

葉の芯・葉脈などを此黒絵具を用いて描き、その上に葉の形に緑青の合葉を掛ける。下の黒絵が透き通り現れ、この黒絵具に艶はないが、使い方の工夫によって有益である。

○錦手黒絵具の方是は年来私の工夫によるが、一切の黒色の画図・文字・真草・假名、或は人物・鳥獸など、墨の打付描き通りに使用できる絵具である。光沢もあり、既述した草木の葉脈・葉などを描く場合は先の仁清伝が良いが、これは絵師の用いる「付け立て」に即した絵具である。

白ヒイトロ(青でも可)一〇匁 白粉五匁 主葉は岩白緑(銅)七匁 膠、フノリを入れる。

但し、町売りの緑青に胡粉を交ぜ「白緑」としたものは適さない。岩緑青を水に入れ、上へ浮いた物と思われながら、純青色は悪く、茶色を呈するものが良い。

○錦手窯の焼き方

早く火を引けば艶が出ず、よくよく焼き、冷まし、取り出すが、色見と称し、陶片にこの黒絵具・緑・紺・黄・紫・金・赤絵具などを少し付け、窯蓋上の色見孔から色と窯内に入れる。然るべき火廻りを見計らい、取出すが、色見は本焼山窯にも重要であり、小壺などを造り素焼して使用。窯内の器物同様の上葉・白葉・柚葉・黒葉を掛け、焼成の折、窯の一間一間にある火窓、匣蓋の上へ三つ宛ほどづつ置く。然るべき火廻りを見計らい、壺を取出し様子をつまむが、柚葉の溶け具合によっては再度窯に入れ、指木と称し細長い薪を横間から指入れるなど、温度を調整。再度色見壺を取出し、葉の溶解加減を確認する。充分ならば指木を止め、次の間へと移るが、いく間あつても作業は中断。内窯・錦手窯も同じく毎回色見を入れ確認する。内窯の色見のみ頼ることはむずかしく、判断には色見の活用が肝要である。

○錦手焼は右の通りである。

○本焼茶入葉

仁清伝の通りである。年来の窯業にも拘わらず、乾山

窯に茶入製作の所望はない。夫挑敵のまゝ今日まできたが、仁清方を参照し向後試作、今案などが生ずれば追って書き付ける。(陶法書受理者の近在を示唆するか)

――【乾山一流の内窯葉・絵具、焼方焼方の事】――

既述通り、土は何れの国の土にても下地造りは可能である。素地上にそれ相應の化粧土を塗る焼成すれば、如何なる様式もでき上がるが、土摺えは先に述べた通りである。(絵具とともに乾山の伝えたい事項の一つ)

――内窯・上葉――【内窯掛葉かたて】

孫兵衛伝、押小路焼の上葉が良い。

白粉一〇〇目・日岡石四〇目を基本とするが、古来から京都に伝承する内窯柚葉の調合である。席焼などには日岡石を少し控え、四〇目を三五匁にするなど調節は可能であり、日岡石を控えることにより柚葉が早く溶解、坐席焼には最適である。(但し、焼成時の最終盤、柚葉の溶解状況を判断することこそがむずかしい)

――内窯・焼方――【内窯の窯焚かま】(おそらく乾山人前にて実演、経験上の結論であらう)

内窯焼成は、初回においては掛葉の乾き切らない器物を入れても、火気は未だ弱く器物の破損は起こらない。が、二番目よりは窯の外外共に火勢は強く、湿りあるものを入れては器物は破損。二番目からはよくよく炙り乾かし、窯へ詰めることが大事となる。素焼が足りなければ、器物に焦げが生じ、悪い結果を招く故、素焼は薪を充分にしつかりと焼成。生焼けでは焼直しは必須である。

窯の据え方にも心得が必要である。湿気は窯の温度を上げ難くする。火気の上昇に伴って器物を蒸し上げ、蒸し上げれば器物の色合に変化が生ずる。

内窯用の窯の設置は、始めに湿気を取り去り、水捌けの良い工夫をする。地面からは一尺ほど掘り下げ、鉄

か銅かの盤を埋め、地面までは砂を詰める。地面との境目を少し空け、瓦また石などを敷きつめ、その上に窯を据えるが、内・外の窯の間隔は指二本ほどが良く、隙間が広過れば火氣は強くなり、器物の色に悪い影響を与えてしまう(本窯の鉄間の役割)。焼き具合は火窓より覗き、窯内の器物の形が判然とせず、火の色が白く見えるほどの折が適時である。色見陶片にも注意を払い、絵具・釉薬の溶け具合如何を見計らい取り出すが、生焼けてあれば器物惣体に艶はなく、結着が悪く白絵具の地塗り、上薬にも跳ね上がる。もとよりふりを濃く解き、膠も多くと入れ、塗った後は指に着かない程度によく乾かすが、上薬の湿りが残れば浮き上がり起き、窯へ入れる以前に悪い結果になってしまう。充分な注意が必要である。

―内窯・絵具・地塗り―【内窯絵具・地塗り色々】

○白絵具…乾山独自の割合・割合

白ひいとろ一〇〇目 白粉三〇め 白土は豊後赤岩その外いずれにても五〇め。白で挽き、水簸、ふのり、膠を濃いめに交ぜ、よくよく乾かし、最後に上薬を掛ける。文様描き、惣地塗りの場合も同断である。

○同白絵具打石…

水戸産火打石三〇め 白粉三五瓦 煙硝二一瓦、以上を合わせ七六瓦。その半減三五瓦。これに豊後白土、又いずれかの白土を入れるが、手立ては右同様である。

○黒絵具…

南京呉州葉五瓦 鐵のカナハダ一〇瓦。極々細末にし、水簸、フノリ、膠を交ぜる。

○赤色…

山黄土に緑礬の焼き返しである絳礬を少し加える。細末にし、水簸、フノリ、膠を加える。

○紺色…

白粉一〇瓦 日岡石三瓦五分 唐紺青(スマルト)六瓦。此方よりは錦手絵具中に記したビードロ入紺絵具が良い。膠、フノリを交ぜる。スマルトは呉須ではなく、

青色のガラス粉である。青色の顔料となるが、中国ではなく、西域に始まり、乾山は花紺青ともいう。

○綠色…

白粉一〇瓦 日岡石四瓦 緑青(若緑青・奈良緑青・若白緑でも可。その内二味、また三味を交ぜても良く、掛目窓にも五分) 紺・緑の合わせ絵具を等分にし、内窯、錦窯も一度使用。

○紫…

白粉一〇瓦 日岡石四瓦 呉州葉のうち赤色を帯びたもの・かけめ五分 フノリ、膠を交ぜる。

右の紫よりは紫玉(ビードロ)を入れた絵具が良く、内窯絵薬としても用いることができる。

○黄…

白粉一〇瓦 日岡石四瓦 唐白目三分 フノリ、膠同前。これも錦手内に書き付けたビードロ入りの黄色が良い。

―乾山一流の色(ブレンド)―

○桃色…

右最初に書き付けた白絵具の合葉(白ビードロ・白粉・白土)に、緑礬の焼き返し(絳礬、又は極上弁柄丹土を混入、水簸し交り物を捨て、極精純の色よいものを少し加えるが、色相が桃の花色を呈したものをいう。

○くちば色の黄…

右に記した黄絵具(白粉・日岡石・唐白目)に、鉄分を加えるが、先の桃色に交ぜた赤色二色の内(絳礬か極上弁柄)いずれか一味を入れ、桃色を呈したものを。

○本絵に用いる朱墨色…

黒絵具に右二色のうち赤色の色よいものを交ぜる。

○薄柿色…

合わせ白絵具に山黄土少し加える。

○薄浅黄…

合わせ白絵具に惣地塗りなどに用いる合わせ紺青絵具(スマルト)を交ぜる。色の濃淡は好み次第。

○薄明黄…

合わせ白絵具に合わせ緑青を適宜交ぜる。右二色(薄浅黄・薄明黄)いずれかの地塗りに文様を描く場合、白・黒・赤、合わせ紺青絵具・緑青絵具、何れを用いても下の地色とは判別ができ、滲むようなことはない。桃色地であれば、先の合わせた桃色を塗るが、緑青・紺青色を惣地とした場合には、文様部分の色を先に付け、文様以外の惣地を畑(彫り)塗りにする(文様の間をぬりように塗る)。黄・紫の場合も同じである。

○惣地を黒に塗る事…

はじめに下地に合わせ白絵具(密着性を高め、糊の役割)を一度塗る。その上に黒絵具を二回、斑のないように塗る、よく乾かす。次に白絵具を用いて花形・草木・文字などを描くが、色彩を加える場合も必ず白絵具を用いて下描をする。その上に彩色をするが、黒地塗りに直に色絵具を用いることはなく、黒地に限らず、赤・薄赤地上も同様、白絵具の下描きなくして色付けは不可である。

黒絵具・赤絵具の顔料である山黄土は鉄分を含む。色絵具中に含まれる鉄分を吸収し、絵具の力は失落、上薬を掛けた場合は剥げが生じ、また溶けつきなどが起こる。故に含有物を多く含む白絵具を下に置きそれを防ぐ工夫をする。

(朱) いずれも惣地塗りの文様は、はじめに白絵具を用いて下描きをする。その上に色絵具を用いて彩色するが、文様の間を黒絵具などで塗ることもあり、併せてその黒絵具の下にも白絵具を一度塗らなければ黒色は保たれない。黒に限らず、必ず下に白絵具を地塗りすることが大事となる。

―金銀金具焼付方―

金、銀いずれも蒔絵に用いる金具(薄い切金)を求め、はじめに文様とする月・花、如何よりの文様も切り買っておく。それを素焼をした器物上に貼り付けるが、白絵具が糊である。常の半減ほどの硼砂を加え、濃い膠を少し交ぜ、よくよく摺り、固めの糊ほどに練り合わせると、

金、銀いずれも蒔絵に用いる金具(薄い切金)を求め、はじめに文様とする月・花、如何よりの文様も切り買っておく。それを素焼をした器物上に貼り付けるが、白絵具が糊である。常の半減ほどの硼砂を加え、濃い膠を少し交ぜ、よくよく摺り、固めの糊ほどに練り合わせると、

それを切金につけて図とする箇所に押し付ける。彩色する場合黒・白・紫・紺・緑・黄・赤・桃色など好み次第。次いで上葉を全体に二度掛けし、窯に入れるが、文様上の上葉は飛散し、金具の隙いっばいに釉薬は止まり、金銀色の文様が出現。後に切金を付ける必要のない理である。但し、器物の形状には限りがあり、表面に段差・高低のある器物、曲面上には過ぎない。香合など上部の平らな文字・盃台・皿類・香盆形など、平らな形状に限定、付ける場合は縦にも横にも可能である。右の外に珍しいものがあれば試み、工夫、作定するなど、重ねて伝える。已上□□□□ 已三月五日

乾山深省(花押) 兩字型
元文丁巳煇八月武江蘭溪 勝任之印(白文方印)

水上蘆川 陶煙居藏書記(朱文長方印)
水上蘆川 陶煙居藏書記(朱文長方印)

『陶工必用』概説

一、本窯・本焼関係(仁清伝・瀬戸焼・京焼中心)

土…黒谷土・金成光明寺周辺出土。粘り気強い

山科石・山科藤尾山中出土。土の粘り調節
遊行土・京松原通野辺出土。土の粗密調整

上葉…摂州生瀬産生瀬石・木灰

(絵葉・絵具。本窯釉下色絵具は白黒青柿色の四色
乾山焼中四色揃うのは春草図蓋茶碗

白絵葉・白絵土。豊後赤岩村産白土・日ノ岡石

化粧土・絵具として使用

二、内窯・内焼関係(孫兵衛伝・押小路焼)

土…黒谷白土が主体

上葉…白粉(唐土・日ノ岡石。透明かつ光沢の調整

絵葉…色釉・絵具。上葉(透明釉薬)に着色剤を混入

白絵葉・豊後赤岩村白土・白粉・白ビードロ

三、楽焼関係(乾山伝にはない)

土…黒谷土・山科石
釉薬…唐土(白粉)・日ノ岡石・白玉(ビードロ)

黒葉は加茂川石・紫石・貴船石 加える

四、土・砂・石・絵具・釉薬

日ノ岡石・珪石。釉薬・絵具の原料。焼継剤となる

絵具の剝離・貫入を防ぐ

生瀬石…長石。媒溶剤。本焼上葉の原料

唐土…白粉・鉛白。鉛釉の原料

加茂川石…紫石・貴船石。鉄・マンガンを含む

ビードロ…白玉・硝粉(フリツ)。珪石・硼砂・鉛丹

として使用。耐火度が増し、発色・艶・光

沢を出す

五、人物

勝任…進藤周防守徒五位藤原勝任。公寛・公遵法

親王に近任。輪王寺宮家坊官。乾山の葬儀、

墓所を配慮『陶工必用』受理者か

六、その他

一、本窯にて潰れなければ、陶器の粘土は異域本邦いず

れの土も適うという。乾山は工人近辺の土を第一とする

ことを述べるが、度量狭ければ何事も成就しないなど、

素人陶芸者に向かうかの言がみられる。乾山は経験から

得る常識、伝統とする定法を大切にされた。

二、やきものに色彩を強調。裝飾における白色の大事さ

を述べる。本焼・内焼ともに活用できる白絵土を開発

黒絵具とともに乾山一流の技法を確立するが、今日まで

へと継続する絵具となり、鳴瀆下山後、洛中洛東の陶工

との交流からすでにその影響大なることを認識する。後

世の陶法書類にも白絵・白絵土の記載は多く、乾山焼を

意識する・しないに関わらず乾山の残した遺産の一つと

して伝承する。黒絵具は裝飾として書を入れるか・否か

にも関係しよう。

三、内窯に対する特別な強調があり、低下度焼成であつ

ても楽焼とは異なるやきものを確立。乾山一流の白黒及

び錦手絵具の改良とブレンド絵具。その使い方・変化が

特徴。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

矢田陪…矢田陪豊前守。論王寺宮家坊官。公遵法親

王に近任。進藤氏の同僚

水上蘆川…『陶工必用』巻末に記載。俳諧人と推測。

當書は、渡藤氏から矢田陪氏、さらに水上

蘆川へと渡るが、印章「陶煙居藏書記」か

らやきもの趣味の人物か

六、その他

一、本窯にて潰れなければ、陶器の粘土は異域本邦いず

れの土も適うという。乾山は工人近辺の土を第一とする

ことを述べるが、度量狭ければ何事も成就しないなど、

素人陶芸者に向かうかの言がみられる。乾山は経験から

得る常識、伝統とする定法を大切にされた。

二、やきものに色彩を強調。裝飾における白色の大事さ

を述べる。本焼・内焼ともに活用できる白絵土を開発

黒絵具とともに乾山一流の技法を確立するが、今日まで

へと継続する絵具となり、鳴瀆下山後、洛中洛東の陶工

との交流からすでにその影響大なることを認識する。後

世の陶法書類にも白絵・白絵土の記載は多く、乾山焼を

意識する・しないに関わらず乾山の残した遺産の一つと

して伝承する。黒絵具は裝飾として書を入れるか・否か

にも関係しよう。

三、内窯に対する特別な強調があり、低下度焼成であつ

ても楽焼とは異なるやきものを確立。乾山一流の白黒及

び錦手絵具の改良とブレンド絵具。その使い方・変化が

特徴。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

など。これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致

おわりに

ぼつこりもぐらが頭を出した。大空だ。果てしない。
やがてもぐらは土の中へと戻つてゆく。

如何なることも究める道にはそれ特有の孤独が待つ。骨へと達するその孤独は、古来先人の歩み続けた道であろう。恐れるな、真に近づくと道を往け。己れの心も不明であれば、解らないことにまみれることは当然である。研究上の理解、解釈に困難がつきまとうことは当たり前であろう。

乾山は新都江戸へ下向した。千年を誇るみやこの人。近づき難い法親王の元にあり、昔を語れば文人、数寄者、自由を貴ぶ散人であった。文事・芸事の修得に励み、禅寺に老師を訪う。一代を築き上げた絵師光琳は兄であったが、胸中にそれを潜めた乾山はゆつたりとしてやさしい。工房に引きこもり、火と闘うばかりの老人ではない。席画、席焼、周囲をよるこぼせるなど、乾山の愉しみの一つではなかったろうか。
人生の終わりに乾山は何を思つたのであろう。

最後の作品、短冊皿の箱書には「陶冶」とある（八七頁図参照）。陶冶は、
杜甫の五言詩に、登臨多物色 陶冶頼詩篇
蘇軾の「司馬温公獨樂園記」に、先生獨何事 四海望陶冶

とある。「陶」はやきもの、「冶」は鋳物。手を下して形を造るとした意である。古くは（南北朝期頃）精神を鍛える、素質・才能を練りあげるなどの意に用いられたが、物事を鍛錬する、そこから自己を練る、削り上げる、天下を化するなどの意に転ずるといふ。乾山は独照禪師から公案を

与えられていた。心底深く潜む神龍を捉えるとは如何なる意であったのか。人間の龍、非凡の人の意にもなるが、その道程を歩み続け、磨き続けた乾山は八一歳、短冊皿を造り上げた。箱書付には「陶冶」とある。やきものとともに己れをつくる。没年までも歩みを止めず、真、乾山の命を尽くすとした生き方を示すものではなかったか。

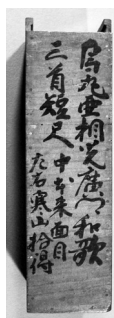
恩師佐藤雅彦先生の死より三〇年近い歳月が流れる。法蔵寺住持坂口貞光師・光彰師、栗木達介先生を失つて何年になるだろう。励まし続けてくださった雄山閣出版芳賀章内氏、聖護院御門跡宮城泰年師、善養寺館克亮師、大槻幹郎先生、星野裕子先生。栃木県さくら市鐵竹堂瀧澤記念館瀧澤雅夫氏・邦子氏御夫妻の御慈愛も胸裡にふつふつと生きている。

本稿掲載にあたり、比叡山延暦寺「叡山文庫」、東京都立中央図書館（特別文庫室・加賀文庫）、京都府立京都学・歴史館、国立国会図書館（橿原文庫）、東京国立博物館（資料室）、東北大学図書館（狩野文庫）、神奈川県立歴史博物館、三田市教育委員会、栃木県埋蔵文化財センター、ビーボディ・エセックス博物館の皆さまにお世話になりました。国際日本文化研究センター稲賀繁美氏、パトリシア・フィスター氏、またモーガン・ピテルカ氏にも厚く御礼申し上げます。別して国際基督教大学図書館にはことばに尽くせぬ御力添え、思いやりをいただいた。研究はそれ故にこそ継続が可能であった。黒澤公人氏、南和子氏の御配慮、来嶋裕子氏、長濱峻平氏、河村貴子氏。ICC所長矢嶋直規氏、助手小平友美氏の温かな御心遣い、並木英子氏他皆さまに改めまして曠空の謝意を表します。ありがとうございました。

乾山焼酎箱書…華洛陶
治 乾山漢省 八十一歳製



同箱書…鳥丸重相光廣卿和歌 三首短尺
中本来面目 左右寒山拾得 静嘉堂文库美術館



参考文献

- 安芸徳子「掘り出された人形」『考古学』と江戸文化』江戸遺跡研究会第五回発表会要旨一九九二年
- 雨森芳野編『陶器樂章』楠瀬恂編『随筆文学選集』第十一卷、書齋社一九二九年刊
- 今泉雄作「尾形乾山」『建築工芸叢誌』第二期第十冊一九一四年刊
- 入江佳代「文献にみる軟質施釉陶器の釉薬 関西陶磁史研究会編『軟質施釉陶器の成立と展開』研究集会資料二〇〇四年発表
- 江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房二〇〇一年刊
- 大阪繪具染料同業組合編『繪具染料商工史』一八三八年刊
- 大橋康二「陶磁器の様相…高原五郎七から江戸高原焼と瀬戸助焼、そして本遺跡出土の重要な陶磁器」加藤建設株式会社文化財調査部編『上野忍岡遺跡群…東京国立博物館管理棟(仮称)地点』国立文化財機構東京国立博物館二〇〇八年刊
- 小川望編『江戸の土器』付「江戸遺跡発掘調査報告一覽」ニュー・サイエンス社二〇〇一年刊
- 小柏典華「近世滋賀院境内の復原的考察 運営組織と空間序列から」『日本建築学会計画系論文集』第八三巻七四九号二〇一八年刊
- 落合則子「江戸今戸焼史に関する一試論—江戸窯業変遷史における位置づけ」『生活文化史』第一五号一九八九年刊
- 鬼原俊枝「天台宗儀礼に沿ける座の昇風」『待兼山論叢美字稿』第三号一九八九年刊
- 小俣悟他編『東京都台東区 浅草高原町遺跡』寿二丁目三番地(東陽寺)地点、株式会社社友ロープ・マネジメント大成エンジニアリング株式会社二〇一五年刊
- 小俣悟「入谷土器」について—東京都台東区入谷遺跡出土資料の検討—『江戸遺跡研究会会報』九六号二〇〇四年刊
- 浦井正明『上野寛永寺 將軍家の葬儀』吉川弘文館二〇〇七年刊
- 金子智「江戸の瓦生産と近世瓦の展開」『幕藩体制下の瓦』第六六回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料二〇一七年刊
- 寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編『東叡山寛永寺…徳川將軍家御裏方靈廟』吉川弘文館二〇一二年刊
- 苦瀬博仁・原田裕子「隅田川河口部沿岸域の江戸期における物流施設の機能と分布に関する基礎的研究」『日本都市計画学会学術研究論文集』三三巻一九八八年刊
- 斎藤夏来「家康の神格化と画像」『日本史研究』五四五号二〇〇八年刊
- 下房俊一「注解『七十一番職人歌合』稿(七)」『島根大学法文学部紀要 文学科編』第一五号一九九一年刊
- 杉本欣久「江戸中期の漢詩文にみる画人関係資料・事項一覽編」『古文化研究』第九号二〇一一年刊
- 鈴木泰浩他「越名西遺跡・越名河岸跡」栃木県教育委員会一九九六年刊
- 洲本市立淡路文化史料館編『珉平焼』珉平焼とその系譜…賀集珉平から志吾園まで」洲本市立淡路文化史料館一九八九年刊
- 台東区文化財調査会編『入谷遺跡下谷二丁目二番地点…集合住宅建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書一四二〇一〇年刊
- 台東区文化財調査会編『入谷遺跡下谷二丁目一番地点…集合住宅建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書一六二〇一〇年刊
- 玉林晴朗「下谷と上野」東台社一九三二年刊
- 鶴田榮一「顔料の歴史」『色材協会誌』七五巻四号二〇〇二年刊
- 東京市下谷區編『下谷區史』東京市下谷區一九三五年刊
- 富本憲吉「乾山の『陶工必用』について」『尾形乾山自筆『陶工必用』並解説』大和文華館一九六四年刊
- 日光山輪王寺宝物殿・徳川記念財団編『日光山と徳川四〇〇年の文化』日光山輪王寺二〇〇四年刊
- 本島知辰編『月堂見聞集』森統三・北川博邦監修『続日本隨筆大成別巻四 近世風俗見聞集』吉川弘文館一九八二年刊
- 大和文華財保存会編『財団法人大和文華財保存会取藏品目録 陶磁器編—赤膚焼—』大和文華財保存会一九九五年刊

訂正事項

- 本誌「人文科学研究」五十一号「乾山焼陶法伝書」その伝播」
五一頁最終行「ふりがな『陶器居』(誤)―『陶器居』(正)
七四頁四段九行「不勝 終」(誤)―「不勝終」(正)
一〇七頁二段一〇行「顔料代銀積」(誤)―「色薬代銀積」(正)

previously recorded as based in Ueno Chôjamachi, Asakusa, is listed as headquartered in Iriya as an official potter in the 1774 samurai directory *Daimyo bukan*.

In the previous issue of this journal the authors considered how the Kenzan technical legacy was passed down among designated successors: the so-called Kenzan line of potters. However there is also one other Kenzan legacy, and that is how his techniques were used or otherwise regarded by potters outside the Kenzan succession. Evidence for this can be found in the dozens of pottery manuals written by professional and amateur potters, which cluster in the second half of the Edo period. The authors surveyed about thirty of these manuals to determine how Kenzan was characterized. A bridge between Kenzan himself and this coterie is found in *Uchigama hisho* (Secrets for glazed earthenware), a group of Kenzan recipes copied out in Edo in 1766. In the dedicatory page at the end, an otherwise unnamed (second-generation) Kenzan relates that when he was given this information he was told by (the first) Kenzan that the techniques did not constitute a title transmission and that they could be shared freely. By the 1790s the third-generation Edo Banko-ware potter Asajisei San'a was allowing copies to be made of another "secret" Kenzan manual that originated in Kyoto, called *Tôki mippôsho* (Ceramic secrets, ca. 1750). In the second decade of the nineteenth century, professional potters back in Kyoto like Aoki Mokubei (1767-1833) were listing "Kenzan" recipes, but these references are eclipsed by those of amateurs in the decades that followed. Most of those are recipe lists whose titles included the term "rakuyaki," which by this time connoted low-temperature lead-glazed ceramics made for pleasure rather than the tea ceremony wares made professionally by the Raku family in Kyoto. The surge of interest is evidenced in a forlorn potter portrayed in the 1825 *Imayô shokumin zukushi utaawase* (Modern-style poetry contest using the theme of craftsmen) who grumbles, "What a nuisance...the recent fad for amateur raku-yaki has taken away all my business!" The manuals of these enthusiasts often cite Kenzan's invention of a white pigment. This was a mixture of glass frit, white clay from Kyushu, and lead carbonate. When used as a wash (engobe), it turned any clay, regardless of its color, into a canvas that could be painted upon. The first-generation Kenzan had recognized the importance of this pigment, calling it "the most important secret of the Kenzan kiln." Even in the opening of the 20th century, when these premodern pastimes were recast for newly risen white-collar workers under the rubric of *shumi* or hobby, pottery-as-shumi publications like "Tôkô hitsunô" (Potters' secrets; *Zatsugei sôsho* 1, 1915) began its inventory of "raku" glazes by citing Kenzan's white.

An appendix at the end of the article lists the core components of the first Kenzan's manual, *Tôkô hitsuyô* (Potter's essentials; 1737), and transcribes the document into modern Japanese.

Keywords: Early modern Japanese ceramics; Japanese ceramic technology; Ceramic manuals, Kenzan ware; Ogata Kenzan; Raku ware, Prince Kôkan, Kan'eiji, Rinnôji, Edo ceramics

キーワード：近世日本の陶磁、窯業技術、陶法伝書、乾山焼、尾形乾山、楽焼、公寛法親王、寛永寺、輪王寺、江戸在地系土器

Abstract

Kenzan's Edo Period and its Legacy

Ogata Kenzan (1663-1743) was born and raised in Kyoto and built his illustrious career as a ceramic designer in that city. However in his final years he chose to move to Edo, where he worked until his death. Although there is a paucity of evidence for this period, this article considers Kenzan's motivations, his interactions with elite patrons and local ceramics workshops in Edo, and finally how that legacy resonated for later professionals and amateurs who variously evoked his name and techniques.

A consensus in Kenzan studies is that in these Edo years (ca.1731-1743) he was supported by Prince Kōkan (1697-1738), the third son of Emperor Higashiyama and the nephew of Kenzan's longtime Kyoto patron Nijō Tsunahira (1670-1732). This is corroborated in a 1737-dated letter by Kenzan relating that he had arranged an audience with the prince for some acquaintances (coll. Osaka Municipal Museum), and a 1738-dated lamentation written by Kenzan upon the death of the prince (coll. Yamato Bunkakan). Posthumously, the 1820 pamphlet *Sumidagawa hanayashiki* (ex-Keio Library coll.) and the 1854 painting history *Koga bikō* related that Kenzan lived in Iriya, located in the lowland just east of Ueno terrace, where Kōkan presided as abbot of the Tendai-sect center Kan'eiji. The circumstances of Kenzan's death were also credibly described in a period diary of a Kan'eiji official named Honma, but only known from an 1895 article in the newspaper *Yamato shinbun*. To build upon these few references, the authors investigated the ritual and informal activities of Kōkan by consulting documents such as the *Tokugawa jikki* (Chronicles of the Tokugawa), diaries preserved in the Tendai-sect archive Eizan Bunko in Ōtsu, and anecdotal evidence from temples, shrines, and secular sources, particularly a collection of anecdotes entitled *Getsudō kenmonshū* (Moon hall eyewitness records). While none of these materials directly mention Kenzan, the authors tried to demonstrate that 1) there was precedent among the Kan'eiji abbots for introducing aspects of Kyoto culture into Edo, and 2) Kōkan had proclivities in poetry, painting and calligraphy that would have made Kenzan a welcome companion.

After comprehensively surveying the documentary evidence for early ceramics activities in Edo, the article's focus moves to Iriya. Until now the only documentary evidence for ceramics production there was the *Shinpen Musashi fudoki kō* (New edition gazetteer for Musashi; 1810-1828), which briefly describes vernacular and official pottery activities in the village. However we were able to find a reference to pottery making in "Sakamoto," which overlaps geographically with Iriya, in the 1735 sequel volume of the city guide *Edo sunago* (Gold dust of Edo). Presumably Iriya, together with the better known Imado kilns just to its east, began to develop in response to popular demand at the turn of the 18th century. An Iriya potter named Kyūsaku is named in *Tōki densho* (Ceramics manual), a ca. 1737 notebook attributed to Sano (Tochigi) hobbyist Ōkawa Kendō, surveyed by the authors in vol. 51 of this journal. Although not directly related to Kenzan, we were able to produce further evidence as to when Iriya gained status as an official pottery producer: the government-appointed earthenware maker (*on-doki-shi*) Matsui Shinzaemon,

